

---

# 魔法少女リリカルなのはFIRSTSTORY

鴫坂カスハ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはFIRST STORY

### 【Nコード】

N6615I

### 【作者名】

鴉坂カス八

### 【あらすじ】

何気なく平和に過ごしていた高町なのは。しかし、突然闇こえた謎の声に導かれ、戦いの渦へと巻き込まれていく。 - 無印の原作沿い小説です。駄文ですが一生懸命頑張りますんで、感想や評価などをよろしく願います。

## オリキャラ&デバイス設定(前書き)

感想や評価をお待ちしております。

## オリキャラ&デバイス設定

名前 高町 光 (たかまち ひかり)

年齢 9歳

魔力量 S+

魔力光 漆黒

使用術式 ミッドチルダ式

レアスキル 魔力変換資質「重力」

所有デバイス ヴァリアブルデバイス 「プリューナク」

備考

なのはの兄。髪はなのはと同じ栗色で、髪型はショートヘア。魔法とは6歳のころに出会い、そのときから、美由紀、恭也とともに朝練に参加するようになった。美由紀のことを美由姉、恭也のことを恭兄と呼んでいる。3年経過した今では、体力は美由紀以上恭也以下だ。剣術はまだ早いとのこと、やらせてもらっていない。恭也と美由紀が剣術の稽古をしているときは、なのはを起こしに行ったり、母である桃子の手伝いをしている。性格は明るく、優しい。だが必要なときは厳しくなる。

デバイス設定

名前 プリューナク

待機状態 プレスレット

使用者 高町 光

デバイスの種類 ヴァリアブルデバイス

備考

ヴァリアブルではないすとは、ロストロギアを中核にしているデバイスのこと。そのロストロギアの効果を使用できることから、時空管理局が定めた法律により、使用・所持が禁止されているデバイスである。効果は不明。高町家の近くにある公園にて、使用者である高町光に拾われた。以来、光のことをマスターと呼んでいる。また、理由は不明だが、光以外の人間を様付けで呼んでいる。

## プロローグ（前書き）

アドバイスをや評価をお待ちしております。

## プロローグ

くく??くく??

真つ暗な空間。一切の光を許さず、闇のみが広がっていた。

(これは、夢なんだろうか?)

『……ますか?』

「!?!」

突然聞こえた声。慌てて周囲を確認するが、なにもない。相変わらず闇が広がっているだけだ。

「誰だ!?!どこにいる!?!」

『聞こえますか?私の声が』

先ほどはわからなかったが、今なら分かる。この声は、耳から聞こえるような普通の声ではなく、電話の留守電サービスのような電子的なものだ。しかも耳からではなく、頭に直接伝わってきていた。

「なんなんだこの声は……」

『もし私の声が聞こえるなら、来て下さい。貴方が毎日立ち寄る場所へ。』

その声と同時に、体が引つ張られる感覚に襲われた。

「待て！！なんなんだ、お前は!？」

『私は、あなたの・・・』

問いの答えを最後まで聞くことなく、意識は途絶えた。

~~~~高町家、とある一室~~~~

夕方。

高町家の二階のとある一室。そこで1人の少年、高町光が椅子に座り、机に両腕を投げ出し、それを枕にするように眠っていた。

「ん？ふああああつ。今何時だ？」

机の上に置いてある時計へ目を向けると、午後4時30分を指していた。

「4時30分か。いつの魔にか寝ちゃったみたいだ。それにしても、さっきのはなんだったんだろう?」

『もし私の声が聞こえるなら、来て下さい。貴方が毎日立ち寄る場所へ。』

ふと、先ほどの声が頭に浮かんだ。

「毎日立ち寄る場所?どこだ?学校には月曜日から金曜日までの5



日間だし、あとは……そうか！公園だ！」

光は部屋を飛び出し、家の近くにある海鳴公園へ向かった。

~~~~海鳴公園~~~~

「はあ、はあ、はあ。つ、着いた。着いたけど、誰もいないじゃん。」

『私は、近くの森の中にいます。』

「っ！森の、中……行ってみよう」

光は、森の中を鬱すんで行った。

~~~~森~~~~

そこは、夕方にもかかわらず薄暗かった。今が夜だと錯覚してしま  
いそうなほどに。

「暗いな。しかもすこし寒い。」

ゆっくりと、ただひたすらに歩いていった。

「ん？」

やがて、一筋の蒼い光が足元で輝いているのを見つけた。

「これは……腕輪？」

『来てくれたんですね。』

突然、声が頭に直接響いてきた。

(っ！夢と同じ声！？一体どこから!?)

『ここですよ。貴方の目の前にいるじゃないですか。』

「目の前って、腕輪しかない・・・ってまさか君が！」

『そのとおりです。私が貴方を呼び出しました。』

「でも、腕輪が喋るなんて、聞いたことないよ？」

「それが全次元世界共通の常識ですからね。』

「なんで僕を呼び出したの？」

『私の調査の結果、あなたには資質があることが判明しました。』

「資質？」

『ええ。魔法を扱う資質です。』

「魔法？それって、テレビとかでやってるビームとかを出す、アレのこと？」

『まあ、似たようなものです。』

「ふうん、そつか。そういえば、自己紹介がまだだったね。僕の名前は高町光。皆は僕の事を光って呼んでるから、君もそう呼んでよ。」

『わかりました。マスター光。』

「ますたー？なにそれ。」

『分かりやすく言えば、偉い人、という意味です。』

「そつか。」

『マスター光。一つお願いがあります。』

「何？」

『先ほど見た夢の話、そして、今私と話したことを、内緒にしておいてほしいんです。』

「なんで？」

『もし、話してしまえばマスターは頭がおかしくなったと誤解されてしまうかもしれないからです。』

「それは嫌だな。うん、分かった。内緒にしておくよ。」

『ありがとうございます。』

「そういえば、樹の名前は？」

『私には名前がありません。マスターが付けてくださいますか？』

「いいの？」

『ええ。お願いします。』

「分かった！……んーと、……えーっと……うん、決まった！君の名前はプリューナクだよ！」

『プリューナク、ですか。素敵な名前だと思います。これからは、そう名乗らせていただきます。』

「これからよろしくね、プリューナク！」

『こちらこそよろしくお願いします。』

こうして、高町光とプリューナクは出会った。これより3年後、本編が始まる。

## 第1話 ？（前書き）

感想や評価をお待ちしております。

## 第1話 ?

くく??くく??

どこかの森のような場所。

ここで、1人の少年が息を乱しながら立っていた。

「はあ、はあ、はあ。」

よく見ると、腕から少し血が出ている。

だが少年は傷の事などお構いなしにただ、周りを警戒していた。

「ガオオオオオオ！」

瞬間、目の前の草むらから異形が姿を現した。

少年は慌てる事なく、懐から紅い宝石のようなものを取り出し、前に掲げた。

その紅い宝石からライトグリーンの円形の何かが展開されていく。

それが展開した後、少年は呪文のようなものをつぶやいた。

「栄えたる響き、光となれ！許されずモノを封印の輪に！ジュエルシード、封印！」

そうつぶやいたのと同時、異形はまっすぐ少年へと駆け出し、円形のなにかに激突し、肉片のようなものが飛び散った。だが、完全に捕らえる事はできなかったようで、逃げられてしまった。

「くっ！にがし・・・ちゃった・・・追いかけてなくちゃ・・・」

さらに少年は追いかけてようとするが、力尽きたのか、その場に倒れこんだ。

（誰か、僕の声を聴いて・・・力を貸して・・・魔法の力を。）

少年は意識を失い、ライトグリーンに輝いた。

輝きが収まった頃には、少年の姿は無く、フェレットと、紅い宝石しかなかった。

～～高町家～～

午前5時。

太陽が昇ってから間もない時間に、高町家のとある一室にいる少年、高町光は起床した。

「おはよう。プリューナク。」

『おはようございます。マスター光』

相棒であるプリューナクに挨拶をし、トレーニング用のジャージに着替える。

あれから、プリューナクに出会ってから3年が経過した。たくさん  
のことを教わった。プリューナクが、ロストロギア（世界が崩壊し  
た後に残る、その世界の遺産のようなもの）を中核としている、ヴ  
アリアブルデバイスという種類に分類される特別なデバイスである  
事。

魔法使いは全員念話という会話手段があるということ。

デバイスを用いての戦闘の基本。

スフィアの精製方法。

プリューナクにヒントをもらいながら、応用技も発明した。

本当にいろいろなことがあった。

「さて、そろそろ行きますか。」

プリューナクを腕につけ、玄関へ向かう。

ガチャ。

「お、来たな。」

「おはよう、光。」

玄関の扉を開けると、すでに先客が2名いた。



「おはよう。恭兄、美由姉。」

「ああ、おはよう。」

「おはよう。」

「今日のメニューは？」

「1時間以内で、4キロ離れた海岸まで行き、海岸沿いを1週した後、ここへ戻って来い。」

「了解！」

「それでは、・・・スタート！」

俺達はスタートの合図と共に駆け出した。

(今日はこの後、母さんの手伝いをする予定だから、早めに終わらせよう。)

「悪いけど、恭兄、美由姉、子の後、母さんの手伝いする予定なんだけど、なにかリクエストはある？」

「俺は特にないが。」

「私は半熟の目玉焼きがいい！」

「了解。準備とかがあるから、今日はスピード上げていくよ。」

「分かった。車に気をつけてな。」

「分かってる。」

「頑張つてね〜！」

「美由姉もね。んじゃ、また後で。」

その言葉を最後に俺はスピードを上げ、美由姉達と別れた。

〜40分後〜高町家〜

「ふう。ただいま。」

「あら、おかえり。今日は早かったのね。」

水分補給をするために台所へいくと、すでに母さんがいた。

「まあ、ね。今日は母さんの手伝いをしようと思ってさ。」

「ふふつ。ありがとう。」

スポーツドリンクを呑んだ後、風呂場へ行き、汗を流した。

数分間シャワーを浴び、制服に着替え、母さんの手伝いをするために再びリビングへ向かった。

午前7時。

朝食が出来上がったので、皆を呼びに行く。

ついでに紹介をしておこう。

まずは俺から。

俺の名前は高町光。私立聖祥大付属小学校に通う、小学3年生だ。

「恭兄、美由姉。朝ごはんできたよ。」

「ああ。分かった。」

「了解。」

「ほら、タオル。」

「ありがとう。」

美由姉にタオルを投げ渡した。

「それじゃあ、美由紀。今朝はここまで。」

この人が長男の高町恭也さん。現在大学1年生だ。父さん直伝の剣術家で、美由姉と俺の師匠だ。

「はい。じゃあ、続きは学校から帰ってからね。」

んで、この人が高町美由紀さん。現在高校2年生だ。

道場を後にし、玄関へ向かい新聞を取り、リビングに向かう。

「おはよう、光。朝早くから、色々お手伝ってくれてありがとうな。」

この人が父さんの高町 土郎さん。喫茶「翠屋」のマスターで一家の大黒柱だ。

「本当、大助かりだわ。」

で、母さんの高町桃子さん。喫茶「翠屋」のお菓子職人で、綺麗で優しい俺となのはが大好きな葉挟んだ。

ちなみに、喫茶「翠屋」は、駅前商店街の真ん中にある、ケーキにシュークリーム、自家売店コーヒーが自慢の喫茶店で、学校帰りの女の子や近所の奥さん達に人気のお店だ。

「父さんと母さんは、店の事で急がしだらうから、少しでもなにかできることがあったら、手伝いたいんだよ。」

「いい心がけだ。その気持ち、大切にするんだぞ?」

「うん、分かった。そういえば、なのはは?」

「まだ寝ているんじゃないか?」

「まったく、いい加減一人で起きれるようになってほしいよ。じゃ、起こしに行くてくる。」

「ああ。」

呆れの声を残し、リビングから出て行った。

階段を登り、手前にあるなのはの部屋に到着した。

「お〜い・なのは！朝だぞ！早く起きろ！」

最後に、俺の妹であり、高町家においては、末っ子の高町なのは。俺と同じく、私立聖祥大付属小学校の3年生だ。1年ほど前からなのはから、強力な魔力を感じるようになった。もしかしたら、俺と同じようにいずれは魔導師になるのかもしれない。

「今起きた！すぐした降りるよ！」

「了解。」

リビングに戻り、なのはが到着するのを待った。

数分後、なのはが制服に着替えて降りてきた。

「おはよう。」

「ああ、おはよう。」

「おはよう、なのは。」

「もうご飯できてるから、早速食べましょうか。」

「いただきます」

7時40分。

「いってきま〜す!」

「いってらっしゃい!」

俺達はバス停に徒歩で、向かった。

「ねえ、光お兄ちゃん。相談があるんだけど・・・」

「何?」

「実はね・・・というわけなの。」

なのはどうぞやら、夢の事が気になるらしい。

「ふむ。確かに、助けてっと言ってたんだよな。」

「うん。」

「そっか。まあ、気にするような事じゃないよ。所詮夢だつて。だからそんな、不安そうな顔はやめてくれ。」

「うん!分かったよ光お兄ちゃん!ありがとう、相談のってしてくれ。」

「どういたしまして。さ、バスが待っているから、急ぐぞ。」

「うん！」

なのはと秋和していると、バス停にスクールバスが停まっているのが見えたので、俺はなのはの手を引き、走った。なのはの顔は、先ほどと違い、笑顔だった。

「おはようございませう。」

「なのは、光！」

「こつちこつち！」

運転手さんに声を掛けてすぐに一番後ろの席から、二人の少女が俺達を呼んだ。

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん。」

「おはよう、アリサ、すずか。」

「うん、おはよう。」

「おはよう。」

紹介しよう。

最初に俺達を呼んだ少女の名前は、アリサ・バニングス。金髪の短いツインテールで、少々強引なところがあるが、いざと言うときは

クラスメートをまとめている、クラスのリーダー的存在だ。バニングス家といえば世界中に大企業を持つ、超がつくほどの金持ちだ。アリサはそのバニングス家の一人娘である。

後のほうに声を掛けてきた少女の名前は月村すずか。紫のロングストリートが特徴的であり、アリサとは正反対で、おとなしい女の子だ。すずかの家もアリサの家に負けないほどのお金持ちだ。

二人とも、入学してからまもなく起きたちよつとした事を境に仲良くなった。の話題

それ以来、去年、今年と同じクラスだ。それに加えなのはのみだが、今年から同じ塾にも通う事になった。

なのははアリサとすずかの真ん中に、俺はなのは達より一つ前の座席に座った。

なのは達は、夕べ見たテレビの話題に夢中になっているようだ。

俺もその話に加わりたいが、少し気になることがあったので、やめておいた。

気になることというのは、なのはが見たと言う夢のことだ。

(昨夜感じた微弱な魔力反応と結界。もしかしたら、なのはが見た夢と言うのは、あのことだったのかもしれない。膨大な魔力を持っているが故に、その場で起こった魔法関連の事件を夢として見る事ができた、という可能性もあるな。だが、それならば何故、俺は見なかった？プリューナク、どう思う？)



『特定の人にだけ、みせることができるのかも知れません。』

(なるほど。特定の条件を持っている者のみが見れる夢か。3年前、俺がお前の声を聴き、公園まで行った時と似ているな。)

『これだけは考えても仕方ありません。流れに任せましょう。いざというときは、マスター光が介入すればよろしいかと。』

(分かった。それでいこう。いざというときは俺がなのは守ればいいいな)

バス内で陽気な笑い声が飛び交う中、光だけが真剣な顔をしていた。

## 第1話 ？（前書き）

長くなった上に文章がおかしくなってしまうました。

## 第1話 ?

〓〓教室〓〓

場所は移って教室。

今は社会の時間だ。

「この前皆に調べてもらったように、この街にもたくさんのお店がありましたね。そこで働く人の様子や工夫を実際に見て、聞いて、大変勉強になったと思います。」

家が喫茶店だと、こういう宿題がでた時はものすごく楽だ。母さんや父さんに聞けばいいだけだし。

「このようにいろいろな場所で、いろいろな仕事があるわけですが、皆は将来どんなお仕事に就きたいですか？今から考えてみるのも、いいかもしれませんね。」

キンコーンカーンコーン

先生が言い終わると同時に、4限目が終了した。

「さて、隣の教室に行くか。」

俺はいつも隣のクラスの友達と昼ごはんを食べている。大勢で食べた方がおいしいし、なにより楽しい。

俺が移動しようと弁当箱を持ち、席を立った瞬間 . . . . .

「どこに行くのよ、光。」

アリサが俺の前に立ち塞がった。

「隣のクラスに。そこでいつも昼ごはん食べてるから。」

「あんだ、妹といっしょに食べようとは思わないの!？」

「そついえばないな。」

女子ばかりいるところに、男1人が入るってのは少し抵抗があるし。

「なら今日から私達と食べなさい！」

は!?!なんですと!?!

「ちよつと待て!?!なんでそうなる!?!」

「私達が一緒に食べたいからよ!?!なんか文句ある!?!」

「大有りだ!?!おかしいじゃないか!?!女子3人に対して男1人なんて!?!」

「!?!ちや!?!ちや言っでないで、さつさと来なさい!?!」

シビレを切らしたようで、アリサは俺の手を引き屋上まで猛スピードで走った。

「俺の意見は・・・どうなるんだ~~~~~!!!!」

後に聞いたはなしによると、俺の叫び声は学校中に響いたらしい。

く屋上く

ガチャ。

ポイ。

「いつっ!」

アリスは屋上に着いたと同時に、俺を生ごみのように捨てた。

この扱いは酷すぎる。

「やっと来たね、光お兄ちゃん。」

「光君が来るの、待ってたんだよ?」

「そんなところでボケくっとしてないで、早くこっちに座りなさいよ。」

はあ、なんでこんなことになったんだらう。

ここまで来て、逃げるわけにもいかないし、さっさと食つか。

「くくくく。」

アリサたちが座っているベンチに俺が座り、昼食が始まった。

「将来、か。」

しばらく黙々と弁当を食べていた俺達だが、なのはの呟きによって箸を止めた。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、もう結構決まってるんだよね？」

「家はお父さんもお母さんも会社経営だし、一杯勉強してちゃんその後を継がなきゃ、くらいだけど？」

とアリサ。

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなって思ってるけど。」

とすずか。

「そっか。二人ともすごいよねえ。」

確かに。小学3年生である今の時点でそこまで考えているとは。

「そっいえば、光お兄ちゃんは何か考えてるの？」

「俺か」。やっぱり、翠屋のお菓子職人になろうとは考えてるけど。」

その夢が叶うことはないだろうがな。

プリューナクから聞いた話の中に出てきた時空管理局という組織。この世界以外にも多数の世界が存在し、それぞれの世界に干渉し合う出来事を管理している機関によって定められた「時空管理法」の中に、「ロストログアー失われた技術」を用いた機器の製造は禁止されている」と明記されているらしい。

もしこれに違反した場合、異次元にあると言われている収容所に100年以上投獄されるとか。

しかもプリューナクの話では俺が保有する魔力量は、S+。

魔力量だけなら、管理局の中でもわずから5%しかないと言われる貴重な人材のようだ。

いくら管理外世界といえど、管理局が放っておくはずがないだろうと言うのがプリューナクの考え。

見つかったら最後、監獄行き、か。

今から考えたって仕方がないと思ってはいるが、どうしても考えてしまう。

自分が捕まったらどうなるか、を。

『マスター光。考えるのはよろしいですが、場をわきまえて下さい。今はなのは様達とお食事中ですよ。そのような暗い顔はおやめください。』

(ああ、悪い。分かったよ。)

「光が翠屋のお菓子職人を目指してるってことは、なのはは翠屋の2代目マスターを目指してるの?」

「それも将来のビジョンの一つではあるんだけど。やりたい事が何かあるようなきがするんだけど、まだそれがなんなのかはつきりしないんだ。私、特技も取得も特にないし。」

!!

俺は空の弁当箱をベンチに置き、なのはの前に移動した。

今の台詞、聞き捨てならねえ!!

「なのは。顔上げろ。」

「え?」

「この、大馬鹿野郎!」

パチン。

「~~~~~っ!」

あまりの痛みにうずくまっている。本気でやったから、そうなるのも当然だ。

「自分からそういう事を言っな!」

「そっだよなのはちゃん。なのはちゃんにしか出来ない事、きつと



あるよ。」

「大体あんた、理数の成績はこの私よりもいいじゃないの！それで取得がないとはどの口で言うわけ？ああああん！？」

やっと痛みから解放され、顔を上げたが今度はアリサに飛び掛られ、口を横に引っ張られてる。

俺のでこピンよりはマシだろうが、それでも痛そうだ。

「だって、なのは文系も苦手だし、体育も苦手だし～～～！」

アリサに口を引っ張られてなお、しっかりと発音できる事に、周りの生徒が感心していたのはまた別の話である。

～～～帰り道～～～夕方

授業も全て終わり、いまは下校中。

「ねえ、今日のすずかのドッチボール、凄かったね！」

アリサの感嘆の声に、なのはもうなずいている。

「そんなことないよ。光君のほうがすごっかよ。」

「いや、俺の場合は偶然がうまい具合に重なっただけだよ。」

「相手の玉をすべて避けて、自分投げた球が100発100中したのが偶然なのかしら？」

・・・痛いところをつくな、アリサのやつ。

実はドッジボール開始前、プリユーナクから「いい機会ですから、相手チームが投げるボールを敵の魔力弾だと思って、避けてください。これも訓練ですよ。魔法は、当然魔法の使用は禁止なので、自力で頑張ってください」という指令を受けていたのだ。

本当のことを言うわけにもいかない。なんとかごまかさないと。

「ま、毎朝訓練してるから、きっとその効果が発揮されたんだよ。」

「・・・ま、そういう事にしておくれ。」

ふう、助かった。いちじはどうなるかと思ったよ。

「それより、お前ら今日は塾だったよな？」

「うん。」

「そつだよ。」

「時間がないから、急がなくちゃいけないけどね。あ、こつこつち。この道を行くと、塾への近道になるんだ。」

アリサの自信に溢れた声に、すずかは不安そうな声で言った。

「そつなの？」

まあ、見た限りでは薄暗い森に続いているから、不安になるのも無

理は無いが。

「ちょっと、道悪いけどね。さ、行くわよ。」

アリスの言葉に従い、俺達は森へ続く道へ入っていった。

しばらく歩いていると、なのはが急に立ち止まった。

「なのは？どうかしたのか？」

「う、ううん。なんでもない。」

「大丈夫？」

「うん。」

すずかの四敗する声にも普通に答えた。

「じゃ、行くう？」

アリスの言葉でまた歩き出す。

その時なのはが何かをつぶやいた様な気がした。

俺達はどんどん奥へと進んでいく。

この道の奥に進むことに、俺は違和感を覚えた。

(プリューナク、まさかこころって。)

『お察しのとおり、タベ魔力反応と結界の反応があった場所です。』

(やはり、か)

『助けて!』

考え事をしてしていると、プリューナクのものではない、助けを求める念話が聞こえた。

「今なにか、聞こえなかった?」

なのはにも聞こえていたのか。

「何か?」

「なんか・・・声みたいな。」

「別に・・・」

「聞こえなかった、かな?」

アリサとすずかに聞こえないのは当然だ。なぜなら、念話は魔法資質を持った人物にしか聞こえないのだから。

「俺は聞こえた。」

「光お兄ちゃんも!?!」

「ああ。」

俺達は周囲を観察したが、なにもない。

『助けて!!!』

その時、さっきより強い念話が聞こえた。

ダッ!

なのはは念話を聴いた瞬間走り出した。

俺もすぐに後を追って走り出す。

「なのはちゃん、光君!？」

「どこ行くのよ!？」

後ろからアリサ達の声がしたが、止まることなく走り続けた。

少し走ると、なのはを見つけた。

「なのは!??どうしたんだよ、いきなり走り出して。」

「光お兄ちゃん。この子、どうしよう。」

なのはの両手には、傷だらけのフェレットがいた。

首には赤い宝石のようなものがある。

おそらく、これはデバイスだろう。

まさか、こいつが俺達を……。

「っ！怪我してるじゃないか！」

「こいついう時は、どうすればいいの？」

俺が答えようとした時、すずかとアリサが追いついて来た。

「光、なのは!?!」

「急にどうしたの!?!」

すずかやアリサにも傷付いたフェレットを見せた途端、慌しくなつた。

「怪我してるじゃない!」

「うん。どうしよう!?!」

見てもらえないので、俺が仲介に入る。

「落ち着け！近くに動物病院はあるか!?!」

「あるよ。」

「よし、そこに運ぼう！すずか、案内してくれ!」

「うん！」

〳〵動物病院〳〵

走って近くにある動物病院まで来た俺達は、傷付いたフェレットを院長先生に診て貰った。

院長先生によると、怪我はたいした事無いが、衰弱しているとのこと。

結局、1日動物病院の方で預かってもらい、様子を見ることになった。

たいしたことがなくてよかった。これで安心だ。

あ、すっかり忘れてた。

「お前ら、塾の時間大丈夫か？」

フェレットがたいした怪我ではなかった事に関して喜び合ってた3人だが、俺に言われ時計を見ると、すでに塾は始まっている時間だった。

3人は急いで塾へ向かい、俺はのんびり家へ帰った。

〳〵高町家〳〵夜〳〵

今は夕食の時間。

どうやら塾の時に話し合い、すずかとアリサはすでに猫と犬を飼っているという事から、なのはが家族の皆に聞いてみることにしたらしい。

現在。お父さん達に確認をとっているところだ。

「どう、かな？」

「うん。」

父さんはどうやら悩んでるようだ。

そこへ、母さんが提案を出す。

「かごに入れてなのはがきちんと世話ができるならいいかも。美由紀、恭也、どう？」

「俺は別に構わないよ。」

「私も同じく。」

美由姉と恭兄も賛成したので、これでフェレットを家で飼うことが決定した。

「よかったな、なのは。」

「うん！ありがとう、お父さん！」



夕食も食べ、お風呂に入り、後はねるだけとなった俺だが、なにもやることはない。

すずかやアリアに、フェレットをこっちで飼うことになったのを伝えようとも思ったが、それはなのはがやるだろうし。

仕方がない。少し早いが、寝るとするか。

形態を充電機につなぎ、ベッドに入ろうとした瞬間。

『聞こえますか！僕の声が、聞こえますか！？』

「っ！！」

（夕方と同じ声！？）

『聞いてください！僕の声が聞こえる貴女。お願いです！僕に、力を貸してください！』

「あいつが、呼んでいるのか？」

『お願い、僕のところへ、時間が、危険が、もう！』

その言葉を最後に念話は途絶えた。

『マスター光。夕方立ち寄った動物病院から、ロストログアと結果の反応を感知しました。』

「わかった。おそらくなのはもう動物病院に向かっているだろう。俺達も行くぞ！」

『了解』

「プリューナク、Set Up！」

『スタンバイ レディ。Set Up！』

漆黒の光が俺を包み込み、寝巻きからバリアジャケットへと衣服が替わっていく。

漆黒の光が収まったところには、寝巻きではなく、上は赤のインナーシャツの上に黒いジャンパー、下には赤く長いズボンという姿に変わっていた。

プリューナクも、持ち手の部分が蒼く、中心部分は白、デバイスの核であるコアは紫の杖に変わっていた。

「急ぐぞ、プリューナク！」

『OK, my master』

窓から星空へ飛び、急いで動物病院へ向かった。

～～動物病院～～

数分で動物病院へ到着し、結界をすり抜けた俺はなのはを探すために飛び回り、やっとのことで見つけた。どうやらフェレットも一緒

らしい。

だが、敵は既になのはを捕らえようと頭上まで迫っていた。

「まずい！プリューナク！」

『ストライク ムーヴ』

俺はなのはを守るために加速魔法を使って敵の目の前に移動し、デバイスで殴り飛ばした。

「グオオオオオオオ！」

雄叫びをあげながら電柱にぶつかり、肉片が飛び散る。

「光お兄ちゃん！？なんでここにいるの？それになんなの、その格好！？」

「説明している暇は無い！おい、そのフェレット！」

「は、はい…！」

フェレットがなのはの手をすり抜け、地面へ着地した。

「俺がしばらく時間を稼ぐから、さっさとデバイスをなのはに継承しろ…！」

「わ、分かりました！」

『グオオオオオオオ！』

フェレットに指示を出し終わると同時に、敵は再生し、襲ってきた。なのは達は、敵が襲ってくると同時に、近くの電柱に隠れたようだ。

『グアアアア！』

アームのような物を左右から伸ばし、俺に向けた。

「プリューナク、セイバーモード！」

『セイバーモード』

デバイスが変形し、魔力刀が出現した。

「はあああああ！」

襲い掛かる触手を切り捨て、本体へ刀を振り下ろした。

『グオオオオオ！？』

肉片が周辺に飛び散るも、再生を始めた。

追撃しようとした瞬間、桜色の光が天へ伸び、それと同時に強力な魔力反応を感じた。

「どうやら、継承できたようだな。これで俺の役目は終了だ。後は、なのはに任せよう。」

「光お兄ちゃん！」

「無事に、デバイスを起動できたようだな。」

「なんなの？これ。」

「それも後で説明するよ。今は、フェレットの指示にしたがって、あれをどうにかする事に集中するんだ。」

「う、うん！」

「じゃ、後は頼んだぜ？」

「はい。」

俺はなのはの一步手前で話を聞くことにした。

「心を澄ませてください。そうすれば、あなたの呪文が浮かぶはず  
です！」

「う、うん。」

なのはは深呼吸をして集中しはじめた。

だが、その直後敵が再生しなのはへ向けて2本のアームのような物を放った。

なのはは慌てることなく防御魔法「プロテクション」で防ぎ、敵はアームのようなものを戻し、後退した。

「リリカル！マジカル！」

なのははそのすきに、上空で飛びながら、呪文を唱えた。

「封印すべきは、忌まわしき器、ジュエルシード！」

「ジュエルシード、封印！」

『Sealing Mode』

なのはのデバイスは変形し、敵に桜色の帯のようなものを放った。

それは確実に敵の動きを封じ、額に「XX？」が浮かび上がった。

「ジュエルシード、シリアル21、封印！」

『Sealing』

桃色の光が周囲にあふれ出し、視界を埋める。

その光が収まると、敵の姿は無く、代わりにひし形の蒼い石のような物が浮かんでいた。

俺は、それに近づき、手に取った。

「これが、敵の正体か？」

「ええ。今のは、ジュエルシードによって生み出された思念体です。」

「思念体、か。」

「はい。これで封印は完了しました。レイジングハートで触れてください。」

俺はジュエルシードをなのはが持っている杖、レイジングハートに触れさせた。

『Put in serial 21』

ジュエルシードは、レイジングハートへ吸い込まれていった。

「これで、終わりなの？」

なのはが確認するようにフェレットに質問した。

「はい、ありがとうございます。貴方達のおかげで助かりました。」

「ケガの方は大丈夫か？」

「ええ。貴方達のおかげで残りの魔力を治療のほうにまわすことができましたので、もうほとんど治ってます。」

その証拠をみせるためか、フェレットは包帯を外した。

「わあ、本当だ。」

「確かに。そういえば、自己紹介がまだだったな。俺の名前は高町光。光って呼んでくれ。」

「私の名前は高町なのは。親しい人は皆、なのはって呼ぶよ。」

「僕の名前はユーノ・スクライア。スクライアは部族名ですから、ユーノが名前です。すいません、貴方達を、光君となのはさんを巻き込んで島しました。」

「ま、なんとかなるだろう。気にするなよ。後、俺達に対して敬語は禁止な。」

「私も、きつと大丈夫！」

ユーノは安心したように微笑んだ。

「は・・・うん。ありがとう。」

「さ、家に帰ろうぜ、二人とも！」

「うん！」

家に帰ろうと背を向けた瞬間、景色が変わった。

（結界！？）

ユーノが張った結界は、モノクロに景色が変わったが、今展開された結界は翠に統一されていた。

「驚かせてしまい、申し訳ありません。」

突然、声が目の前から聞こえた。



さっきまでは誰もいなかった場所に、上下黒に統一された服をきた短髪の男がいた。

## 第2話 ？（前書き）

今回は短い上に、自分でもわけわからないことになってしまいました。おかしい点がありましたら、お知らせください。

## 第2話 ？

突然現れた謎の男は、笑顔を浮かべながら。達へ近づいてきた。

俺は咄嗟になのはを後ろに追いやり、なるべくあの男の視界に入らないようにした。

「貴方は？」

「申し遅れました。私は、遺失物専門対策局「レイクス」に所属している、カイル・セルフィアという者です。」

「レイクスだつて!？」

その名を聞いた瞬間、ユーノが過剰とも思える反応を示した。

「知っているのか？ユーノ。」

「うん。遺失物、つまりロストロギアの封印と管理を目的とした機関のことなんだ。風の噂で、レイクスの規模は時空管理局と同等、あるいはそれ以上だと聞いたことがあるよ。」

ロストロギア関連の事件を専門とする機関、という事か。

「そうか。で、その遺失物専門対策局の人がなんの御用ですか？」

「ロストロギア、「ジュエルシード」に関して詳しく伺いたいので、本部へお越し願いたいのです。少し、気になることもありますし。」

気になること、だと？まさか、バレたのか？俺がヴァリアブルデバイスを持ち主だと。

「なんですか？気になることって？」

俺は若干の不安を感じながらも、それを悟られないように平然を装い、聞いた。

「ここでは話せる内容ではないので、詳しくは本部へ到着してから話します。」

つまり、話を聴くには本部へ行くしかない、という事か。

「わかりました、行きます。ですが、行くのは俺1人にしてくれませんか？事情を説明するだけなら、俺1人で十分でしょう？」

セルフィアの顔から初めて笑顔が消え、困惑した表情になった。

「上司に全員連れてくるように、と言われてはいるんですが。どうやら、先にお話した方がいいみたいですね。『ケイオス』防音結界発動。」

『了解』

セルフィアが首に掛けているネックレス、『ケイオス』と呼ばれたデバイスから翠色の光が発せられ、俺達は半透明のドームに包まれた。

「これは？」

なのはが不思議そうに周辺を見渡す。

「防音効果を追加した結果です。今から話す内容を、誰にも聞かれたくないのです。さて、高町光さん。」

「なぜ、俺の名前を!？」

「ヴァリアブルデバイスの所有者の名前や家族構成を調べるのは当然の事でしょう。」

「ヴァリアブル、デバイス？」

「ロストロギア、崩壊した世界の遺産を中核として作られた、インテリジェントデバイスをも超える高性能なデバイスの総称、これをヴァリアブルデバイスと呼んでいます。」

なのはからの疑問の声に、なのはの方を見ながらセルフィアはスラスラと答えている。

「ロストロギアを用いた機器の製造・使用は時空管理局が定めた法律によって禁じられているのはご存知ですよね？」

セルフィアは、再び視線を俺に戻し、問い掛けた。

「ああ、知ってる。」

「通常なら、異世界に設置されていると言われている収容所で100年以上、服役する事になるでしょう。」

「そんな!？」

「話は最後まで聞いてください。高町なのはさん。」通常なら」と言ったでしょう。」

「はう。ごめんなさい。」

セルフィアに注意され、なのはは申し訳なさそうに誤った。

「ですが、あなたが逮捕されることはありません。」

俺はその言葉に驚愕した。

ロストログアを中核としたヴァリアブルデバイスの使用は、立法律違反だ。当然バレたら、逮捕されると考えるのが普通だ。なのに、この男は俺が逮捕されることはないと言った。なんで、

「なぜ、俺が逮捕されることはないんだ？俺はヴァリアブルデバイスを\_usingしてるとだぜ？」

「裁かれるのは、貴方達使用者ではありません。製造者である時空管理局です。」

「バカな！？時空管理局は法の守護者だ！法を定めた機関が、法を破るはずがない！」

セルフィアの言葉にユーノは、驚愕の声をあげセルフィアに抗議した。

「証拠なら、ありますよ。ウチの情報収集署が、発見したものです。」

「

ヴォン。

ウィンドウが展開され、映像が流れ始めた。

そこには、時空管理局のエンブレムがある蒼い制服の上に白衣を着た研究員らしき男達がヴァリアブルデバイスを製造している場面が映し出されていた。次に移されたのは、何かを保管するような場所よく見ると、プリューナクに似た外見のデバイスが大量に保管されていた。

「そんな・・・法と秩序を守る時空管理局が、法を破っていたなんて。」

ユーノが重苦しい声で言った。その後姿は、信じていたものに裏切られたという失望感に満ちていた。

「でも、時空管理局はなんのためにヴァリアブルデバイスを作ったんですか？」

俺はふと、疑問に思ったことを聞いてみた。

「恐らく、高ランクの魔導師を見つけ出すためでしょう。ヴァリアブルデバイスは、AAAランク以上の魔導師にしか、反応しないようにできています。管理局の部隊に拘束させ、裏取引で管理局に無理矢理入局させるというのが狙いでしょう。」

「そんな・・・」

「あまりにも酷すぎる・・・」

俺となのはは絶句していた。そして、あまりにも自分勝手な時空管理局に、怒りを覚えた。

「ふう。やっとおわりましたね。これで当初の目的に戻れます。」

今までの重い空気を吹き飛ばすかのように、陽気な声をあげたセルフィア。

「当初の、」

「目的？」

俺とユーノの疑問に、セルフィアは呆れの表情を見せた。

「最初に言ったはずですよ。ジュエルシードに関しての詳しい話を伺いたいので、本部へ来てくださいますか、と。」

「「「あつ!」「」」

俺たち3人は、同時に思い出したようで、声が重なった。

「で、高町光さんがいきなり1人で行く、なんて言い出すもんですから、防音結界を張って説明したんですよ。逮捕されると考えていたであろうあなたに、我々は逮捕する気はない、という意味を示すために。で、答えは？」

「「「行きます!」「」」



最初浮かべていた警戒心は、今となっては消えていた。

「では、準備をしますので、私の周りに集まってください。」

セルフィアの指示で周辺に俺たちは集まった。

俺達が集まった途端、足元に翠の魔方陣が出現した。どうやら、転移魔法のようだ。

「座標指定、dojee3rkj2fk2i2u。誘いの扉よ、我らを導け！セルフィアが家と呼べるあの場所へ！」

足元に浮かぶ魔方陣から俺達を中心に光を発し、どんどん広がっていった。

その光が収まると、人の姿はなく、ジュエルシードを封印する際にできたコンクリートの破片だけが散らばっていた。

## 第2話 ？（後書き）

すいません。移動することなく終わってしまいました。

## 第2話 ?

「第2管理世界「セリオン」」

俺達を包み込んでいた翠の光が少しずつ消えていく。

光が消えた先には、さっきいた地球ではなく、どこかの建物の中のようにだ。

どうやらここがレイクスの本部らしい。

「あ、そうそう。いつまでもバリアジャケットのままっていうのも窮屈だろっから、解除していいよ。」

「あ、そうですね。なら。」

「そうさせてもらいます。」

セルフィア・・・さんの言葉に従い、俺となのははバリアジャケットを解除した。

「肝も、元の姿に戻ったほうが楽なんじゃないか？」

今度はユーノにも同じ事を言うセルフィアさん。

「あ、そうですね。しばらくこの姿でいたので、戻るの忘れてました。」

「え？」



「うん、ごめんね。驚かせちゃって。」

「いやいや、別にいいよ。こっちこそ大声を出してごめん。」

「ごめんなさい。」

「ううん。気にしないで。当然の反応だから。」

「あゝ、もう話は終わりましたか？」

セルフィアさんの声で、俺達はずっと立ち止まっていた事を思い出した。

「あ、すみません。」

「いえいえ。では、本部長の部屋へ案内しますね。」

セルフィアさんに案内され、どんどん奥へ進んでいく。

やがて、一つの扉の前で足を止めた。

「ここが、本部長の部屋です。どうぞ、中へお入りください。」

自動ドアが開き、部屋の中へ入る俺達3人とセルフィアさん。

「本部長、3人を連れてきました。」

部屋に入った俺達の眼に、壁側にびっしりと円を描くように置かれている本棚の数々が飛び込んできた。すべての本棚に、本がびっし

りと入れられていた。

「ご苦労様。どうぞ3人ともお掛けください。」

ふと、声が聞こえたので、そこへ視線を向けると部屋の真ん中にある向かい合わせに置いてあるソファアの奥のほうに、長髪で綺麗な黒髪の女性がいた。

俺達は手前のソファアに座り、セルフィアさんと女性と向かい合った。

「始めまして。私の名前はセレナ・クローセル。遺失物専門対策局「レイクス」の本部長を務めています。よろしく。」

「……よろしくお願ひします!」「」

「さて、ジュエルシードに関して、詳しいお願ひを聞かせてもらいますか?」

「わかりました。」

ユーノはジュエルシードを発見した経緯を話し始めた。

「なるほど。ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですか。」

「だから、僕が全部回収しよう……」

「21個のジュエルシードをたった一人で集めるおつもりだったんですか?」

「はい。あれが散らばってしまったのは、僕の責任ですから。」  
表情を暗くし、俯くユーノ。

「そんなの危険すぎる！俺も手伝うよ！」

「私も！」

21個ものジュエルシードをたった一人で集めるなんて、無茶だ！

「……ありがとう。なら、大変申し訳ないんだけど、よろしくおねがいします。」

ユーノは、俺達に頭を下げた。

「おいおい。頭を上げてくれよ。」

俺の言葉にユーノはゆっくりと顔を上げていく。

「あなたたちはジュエルシードを集めるのに意欲的みたいですね。なら、どうでしょう？遺失物専門対策局に囑託魔導師として所属してみては？」

「囑託魔導師？」

「囑託魔導師とは、将来対策局に入局することを前提に、対策局の任務を体験できる役職のことです。簡単に言うと、アルバイトのよ  
うなものです。」

「……すみません。少し考えさせてください。」

「私も考えさせてください。」

なのはも同じ意見のようだ。まあ、それも当然だよな。自分の将来に関わることだ。そう簡単に答えは出せない。

「そうですね。こちらこそすみません。少し、急すぎましたね。返事は2日後にお願いします。」

2日後か。長いようで短いな。

「わかりました。それまでには返答をします。」

「質問などがありますか？」

「あ〜。」

なのはは遠慮がちに手を挙げた。

「なんですか？高町なのはさん。」

「今回、ジュエルシードを封印した際に破壊してしまった道路とかは、どうなるんですか？」

「修復することはできませんが、大型トラックが激突したことによる破損ということにするように偽造しておきます。」

「そうですね、わかりました。」



「他に何か質問は？」

「ありません。」

「では、これで終了です。ご苦勞様でした。セルフィアに遅らせま  
しょう。」

「どうぞ、こちらへ。先ほどの場所までお送りします。」

「あ、はい。」

「わかりました。」

俺たちも立ち上がり、部屋を出る時に一礼してから廊下へ出た。

そして俺たちは転送ポートへ向かい、地球に帰った。

### 第 3 話 ?

セルフィアさんの転移魔法により地球に戻った俺達は帰路についた。

ユーノは、高町家ではこの姿ではいられないといってフェレットの姿へ再び戻った。

10数分で家に着いたのだが・・・ここで問題が発生した。

俺達は、母さんたちに一言も言わず外に出ってしまったのだ。

しかも現在の時間は午後8時。小学生がうるついていい時間ではない。

きつと、いや絶対に怒られる。俺達はそのことに恐怖して、なるべく音を立てないように家へ入ったのだが、

「おかえり。なのは、光。」

ビクッ!!

「恭兄・・・」

「お兄ちゃん・・・」

恭兄に見つかってしまった。しかもものすごい剣幕だ。

「二人して、こんな時間に、どこにお出かけだ？」

「えと、あの……その……えっと。」

「じ、実は……その……」

「あら、かわいく！」

俺達が答えに詰まっていると、美由姉が背後からやってきた。

「お、お姉ちゃん……」

「美由姉……」

「でも、なんか元気ないね。なのはと光は、この子の事が心配で様子を見に行っただよな？」

「うん。」

「なんだかすごく心配で、なのはと二人で様子を見に行っただよ。」

申し訳なさそうに俺は恭兄に、なのはは美由姉に言った。

「気持ちにはわからなくてもないが、だからと言って内緒でと言うのはいただけないぞ。」

「まあまあ。こうして二人とも無事に戻ってきたんだしいいじゃない。それに、光となのはいい子だから、もうこんな事しないもんね？」

「うん。その、恭兄。内緒で出かけて、心配かけて、ごめんなさい。」

「

「じめんなさい。」

俺達は恭兄の顔を見て、言葉を考えて反省の気持ちを伝えて、頭を下げた。

「まあ、今回は無事に戻ってきたんだしよしとしよう。」

恭兄の言葉に、俺となのはお互いの顔を見合い、笑った。

「でも、かわいい動物ねえ。」

美由姉はなのはの手からユーノをそつと持ち上げた。

「母さんなんか、この子見たらかわいすぎて悶絶しちゃうんじゃない?」

「その可能性は否定できんな。」

~~~~リビング~~~~

あの後、すぐにリビングに入り、夜食を食べた。

そして、母さんにユーノを見せると、

「まあ、かわいい~~~~!!」

美由姉の予想通り、母さんはユーノを見て悶絶していた。

「ほんと、かわいいわよねえ。」

そう言いながら、母さんはユーノをブランブランと揺らす。

《大丈夫か？ユーノ。》

《な、なんとか・・・》

ユーノの事が心配で、念話を送ったのだが、ちょっときつそうだな。

「母さん。ほどほどにしないとユーノがかawaiiそうだよ。」

言うてはみたものの、効果はなく、ユーノを揺らし続けている。

「なかなか賢そうな・・・イタチじゃないか。」

父さんの言葉にため息をつく恭兄。

「イタチじゃなくて、フェレットだよ、お父さん。」

美由姉がやんわりと訂正した。

「なにか芸とかできるかな？ほれ、お手。」

「キョツ。」

「「おお～～！！」」

ユーノがお手をした事に関して盛り上がっている二人なのであった。

くく光の部屋くく

ユーノの世話の事や、えさの事の話をした後、俺となのはは部屋に戻った。

「囑託魔導師、か。」

ふと、今日クローセルさんに言われた囑託魔導師の事が頭に浮かんだ。

将来入局することを前提に局の任務に就き、準局員としての権限を得る事ができるシステム。

これを受ければ、将来、遺失物専門対策局に入局しなければならぬ。

だが、それは俺にとってはどうでもいい事になっていた。

困っている人がいて、その人を助ける力が自分にあるのなら、迷わず進め。

父さんの教えが、こんな時にも役に立つなんてな。

ユーノは、一人でこの世界に来たと言っていた。きっと誰にも頼れなくて、苦しかったはずだ。俺やなのは、ユーノを助けることができる力を持っている。

なら、俺は囑託魔導師になろう。困っている人を少しでも救うために。

この手の魔法は、困っている人を助けるためのものだと、俺は思っ  
から。

コンコン。

ドアを叩く音に、思考を中断する。

「びびぞ〜」

ガチャ。

「あの、お兄ちゃん。ちょっといい？」

「なのはか。別に構わないぜ？」

なのは俺が座っている椅子の近くにあるベッドに腰掛けた。

「どうしたんだ？こんな時間に。」

「うん。今日クローセルさんに言われた囑託魔導師の事、お兄ちゃんは、どう思っているのかを聞こうと思って。」

なのはも囑託魔導師の事を考えていたらしい。

「俺は、受けるよ。」

「そっか。やっぱりお兄ちゃんも受けるんだ。私と同じだね。」

「ああ。ユーノを放っておけないしな。俺にできる範囲で、手伝い

たいんだよ。」

「私も、同じ気持ち。学校や塾の時間は無理だけど、それ以外の時間なら手伝えるから。」

「どうやら、俺達は同じ結論に至ったようだ。」

「じゃあ、決まりだな。」

「うん。」

「プリューナク、通信回線を開いてくれ。あて先はセルフィアさんだ。」

『了解』

すぐにウィンドウが展開され、セルフィアさんが応答した。

「これはこれは。光さんになのはさん。もう、返事は決まったのですか?」

「はい。」

「では、答えを聞かせてください。」

「受けさせてもらいます。」

「私も同じくです。」

「そうですね。では、明日の午後4時に賣方達の家の近くにある公



園に来てください。囑託魔導師の試験を行います。」

「試験、ですか？」

「ええ。内容は模擬戦による防御力、回避力、攻撃力の測定です。それぞれの力が基準を満たしていれば合格です。先に言っておきませんが、模擬戦の勝敗は試験の結果とは関係ありません。」

「「わかりました。」」

「それでは、また明日の午後4時にお会いしましょう。」

ブツン。

そう言ってセルフフィアさんは通信を切った。

「さて、報告も済んだし、もう寝ようか。そういえば、ユーノは？」

「お父さんと一緒にお風呂に入ってるよ。」

「ん。わかった。」

「おやすみ。あ兄ちゃん。」

「ああ。おやすみ。なのは。」

なのはが部屋から出て行き、入れ替わりにユーノが入ってきた。

「あ、光。囑託魔導師の件、どうするかもう決めたの？」

「ああ。俺もなのも受けることにしたよ。」

「そっか。ごめん、巻き込んだじゃって。」

ユ一ノが暗い表情で言った。

「そんな暗い顔するなよ。これは俺達を選んだ道だ。お前が誤る必要はないんだよ。」

「そうだね、分かったよ。」

「さ、もう遅いから寝ようぜ。」

「うん！」

俺は電気を消し、布団に入った。

月明かりが俺の部屋を優しく照らしだしているのを見ながら夢の世  
界へと意識を飛ばした。

3話？ (1) 囑託魔導師試験！ 高町光編（前書き）

色々と忙しかったので、投稿が遅れてしまいました。申し訳ありません。感想やアドバイスをお待ちしております。

3話？ (1) 囑託魔導師試験！ 高町光編

〳〵翌日、夕方〳〵

現在の時間は3時55分。約束の時間より5分早く到着した俺となのは、フェレットの姿のユーノは、ベンチに座っていた。

この5分間、暇なので、今朝あった出来事を説明しよう。

〳午前八時〳

「おはよう〜!!」

「あ、なのはちゃん、光君！」

「おはよう。」

俺達が教室に入り、挨拶をすると、すずかとアリサが声をかけてきた。

「ねえ、あの話、聞いた？」

俺となのはが席に着いたのを確認してから、アリサが俺達に問いかけてきた。

「なんのこと？」

「何も聞いてないが？」

「なんか昨夜、無人の大型トラックが動物病院前の電柱にぶつかって、電柱が折れたうえに、折れた電柱が向かいの壁に直撃したんだってさ。怪我人はいなかったみたいなんだけど。」

あゝ、そういえば、クローセルさんが偽装しておくって言ってたっけ。まさか、本当にやるとはね。

「無人ってことは誰も乗ってなかったんだよな？誰も乗ってないのになんでトラックが動いたんだ？」

道路を破壊した当事者だけど、ここは何も知らないように装わないとな。

「詳しい事はよくわからない。けど、あのフェレットの事が心配で事故の話を聞いた後、探しに行っただけど、いなかったの。」

「ああ、その事なら・・・」

なのはが昨日の夜、俺と協力して考えておいた“真実をちょっとぼかした”ユーノとの出会いの経緯を話した。

「そっか。無事なのは達の家に居るんだ。それにしても、たまにたま逃げ出してたあの子と道でばったり会うなんて、すごい偶然よね。」

「う、うん。そうだね。」

夜中に俺達だけで出歩いていた事に関してはなんとも思わないだろうか？

「あ、それでね。なんかあの子、飼いフェレットじゃないみたいで、当分の間うちで預かることになったよ。」

「そっか。で、名前は決めたの？」

「ああ。ユーノっていうんだ。」

すずかの問いかけに対して今度は俺が自信を込めて言った。

「「ユーノ？」

「「そう、ユーノ」

「「へえ〜！」

~~~~~

とまあ、こんな感じだ。

「光お兄ちゃん。そろそろ時間だよ。」

「ああ、分かった。」

なのはの言葉で俺は立ち上がり、なのはと共に、公園の中心部に移動した。

中央部に到着したとたん。翠色の半球体が俺達を包み込んだ。

結界が展開されたのと同時に、俺達の目の前に結界と同色の魔方陣が出現した。

『お待たせいたしました。準備が完了いたしましたので、本部へお越しく下さい。その魔方陣の中央に立つて下さい。』

セルフィアさんの念話による指示に従い、俺達は魔方陣の中央に立った。

それと同時に、俺達の視界を翠が包み込み、この世界から俺達の姿は消えた。

〈遺失物専門対策局「レイクス」本部〉

翠がだんだん薄れていき、やがて消えた。

その先には、以前1度来たレイクスの本部が広がっていて、目の前の扉の近くに、セルフィアさんがいた。

「こんにちは。」

「「こんにちは。」」

「さて、さっそく移動しましょうか。」

「「はい!」」

セルフィアさんに挨拶をした後、試験会場である訓練施設に移動した。

ユーノは、本部に到着してすぐに、人間の姿に戻った。

数分歩くと、「囑託魔導師試験会場」と書かれた紙が張つてある場所にたどり着いた。

セルフィアさんは、部屋の前で立ち止まると、俺達の方を向き、話し始めた。

「では、最初は高町光さんからです。」

「はい！」

「申し訳ないんですが、ユーノさんとなのはさんは、隣の部屋にあるモニタールームで観戦できるのでそちらにどうぞしてください。」

「「分かりました！」」

セルフィアさんの指示に従い、ユーノとなのはは隣の部屋へ入っていった。

「頑張つてね、光」

「応援してるよ、光お兄ちゃん！」

「ああ、ありがとう。行ってくる」

念話でなのはとユーノに返事を返しながら、俺とセルフィアさんは、



試験会場の中へ入っていった。

中へ入ると、驚いたときに、荒野が広がっていた。

「これは、一体……」

「これは空間シミュレーターと言って、擬似的に風景を再現するシステムです。他に、市街地や森などにも変化させることが可能です。」

「そうなんですか。」

便利だな、空間シミュレーターって。

「さて、そろそろ試験を始めましょうか。内容は、昨夜お伝えしたとおり、模擬戦による回避力、攻撃力、防御力の判定です。模擬線の最中に、こちらから課題を出すのでそれを実行してください。それ以外のときは、なにをやっても構いません。」

「分かりました。」

「では、バリアジャケットの準備を。」

「はい！」

お互いに、バリアジャケットを展開し、デバイスを構える。

セルフイアさんのデバイスは、赤を主体とした鎌のようなもの。

外見だけでは大した情報は入手できない。実際に戦ってみなければ。

「見せてください。ヴァリアブルデバイスの所有者の力を。」

「はい！」

「3・・・2・・・」

セルフィアさんがカウントダウンを始めた。

数が減っていく度に、空気が張り詰めていくのを感じる。

「・・・1・・・開始！」

「グラビティランサー！」

最初にアクションをとったのは俺。

4つのランサーを周辺に展開し、セルフィアさんに向けて放つ。

「フリーズランサー！」

セルフィアさんも4つのランサーを展開し、俺へ放った。

お互いのランサーが敵を捕らえるべく、疾走した。

俺は縦横無尽に空を空中を駆け抜け、セルフィアさんのランサーをかわしていく。

セルフィアさんも同じく俺のランサーをアクロバティックな飛行でかわしている。

俺とセルフィアさんの距離が少しずつ縮まっていく。

「プリユーナク、セイバーモード！」

『セイバーモード』

プリユーナクを変形させ、漆黒の魔力刀を形成する。

「ケイオス、ソードフォーム！」

『ソードフォーム』

セルフィアさんも翠の魔力刀を形成した。

「はあああああ！」

キーン！

気合とともに振り下ろされた魔力刀はお互いのデバイスに衝突し、鏝迫り合いになった。

「なかなかいい動きでしたよ！想像以上です！」

「それはどうも！」

ガキーン！

どちらともなくバックステップで距離をとり、デバイスを構える。

「それでは、回避力の測定を始めます。」

「はい！」

回避力の測定か。ここではひたすら避けるしかない。防御は不要だな。

「プリユーナク、インパルスモード」

『インパルスモード』

上に羽織っていた黒いジャケットはなくなり、赤のインナーシャツとズボンが半袖、短パンに変化した。防御を捨て、速さを追及した結果の姿だ。

「準備はできたようですね。それでは、いきます！」

俺がバリアジャケットを変化させている時に、セルフィアさんは上空へ上がり、ケイオスをシューティングフォームに変えたようだ。

「永久なる凍土よ。尽きる事のない氷槍を刻め！」

翠の魔方陣がセルフィアさんの足元に出現すると同時に、4つのスフィアが展開された。

『f i r e』

ケイオスの合図で、4つのスフィアから無数の魔力弾が発射された。

「全て避けきるぞ！ストライクムーブ、フルブースト！」

対する俺は加速魔法ストライクムーブを最大出力で展開し、時にはしゃがみ、時には飛び上がり、魔力弾を回避していった。

その状態が数十秒くらい繰り返していると、突然、魔力弾の雨が止んだ。

「これで、回避力の測定は終了です。続いて、防御力の測定に入ります。」

「はい！」

次は、防御力、か。どんな攻撃だろうと、耐え切ってやる！

「プリユーナク、ノーマルモード！」

『ノーマルモード』

バリアジャケットを元の姿に戻し、障壁を展開する。

「準備OKです！」

「わかりました。それでは、始めます！」

「永久なる凍土よ。眼下を白銀に染めよ！」

セルフィアさんの足元に魔方陣が出現し、ケイオスの先端に魔力が蓄積されていく。

「凍てつけ！」

『エターナルバスター』

セルフィアさんはケイオスを振り上げ、改めて俺に照準を合わせ、砲撃を放った。

ズドオオオオン！

くうっ！予想してたより重い！？

「くっ！・・・うう！！」

砲撃の威力に押し負け、少しずつ後方に追いやられていく。

追いやられていく度に、少しずつ障壁に輝ひびが入り始めた。

距離にして約1mくらい押された時、砲撃が止まった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

あ、危なかった。あと少し止むのが遅かったら、障壁が破壊された。

『呼吸が荒いようですが、大丈夫ですか？』

セルフィアさんが、念話で話しかけてきた。

『はい。大丈夫です。続けてください。』

『分かりました。死後は、攻撃力の測定です。遠慮はいりません。全力で撃ってください。』

『はい。分かりました。』

「これで最後だ。プリューナク、全力で行くぞ！」

『はい！』

「集え、星の力よ！我が声に応え、その力を示せ！」

ケイオスの先端に魔力が蓄積されていく。

「玉碎せよ！グラビティレイ！」

漆黒の砲撃がセルフィアさんへ疾走する！

「ケイオス、障壁展開」

『了解』

セルフィアさんが障壁を展開した直後、砲撃が障壁に衝突した。

火花を散らせながら、砲撃は少しずつ障壁を削っていく。

「はあああああ！」

ドオオオオオン！

セルフィアさんの気合と同時に、砲撃は爆発し、白煙が視界を奪った。

煙が晴れると、障壁を展開したまま笑みを浮かべているセルフィアさんがいた。

「お疲れ様でした。これで光さんの試験は終了です。」

地上に降りたセルフィアさんが俺に向かって歩み寄りながら言った。

「ありがとうございました！」

俺は、バリアジャケットを解除し、制服姿になった。

「次は、高町なのはさんです。」

「わかりました。呼んできます。」

俺は会場の隣にあるモニタールームへ行き、なのはを呼びに行った。

「光お兄ちゃん！かつこよかったよ！」

部屋の扉を開けた瞬間、なのはが興奮した様子で俺に言った。

「ユーノも労いの言葉をかけてくれた。」

「ありがとう。さあ、次はなのはの番だ。頑張れ。」

「うん！行ってきますー！」

「」「」「いってらっしゃい。」「」



俺の試験は終わった。

次はなのはの番だ。

落ち着いてやれば、きっと大丈夫だろう。

俺はそんな事を思いながらなのはが出て行った扉を見つめていた。

第3話 ？ (2) 囑託魔導師試験！ 高町なのは編(前書き)

感想やアドバイスをお願いします。

第3話 ? (2) 囑託魔導師試験! 高町なのは編

私は、隣にある試験会場に入った。

光お兄ちゃんときは、荒野が広がっていた場所が、市街地に早代わりしていた。

「今祖は市街地なんだ。」

「あらゆる場所での戦闘を可能とするために、組み込まれた空間の一つです。」

私の呟きに、セルフィアさんが、私の方へ歩み寄りながら答えてくれた。

「さて、魔法の力を手に入れてまだ二日しか経っていないわけですが。なんなら、スフィアの形成などの練習時間を設けましょうか?」

「必要ありません。すぐに試験を始めてください。」

セルフィアさんの提案を丁重に断る。不安じゃないといったら嘘になるけど、今の私に出来る事は、この胸に宿る魔法を信じて全力を出すだけ。

「了解しました。それでは、バリアジャケットの準備を。」

「わかりました。レイジングハート! Set Up!」

『スタンバイレディ？Set Up!』

制服をモチーフにしたバリアジャケットに服装が変化していく。

「準備ができたようですね。それでは、始めましょう。3・・・2・・・1・・・スタート!」

「デイベインシューター!シュート!」

最初に動いたのは私。5つのシューターを出現させ、セルフィアさんに向けて放つ!

「ケイオス、ソードモード」

『ソードモード』

「はあああ!」

『アイススラッシュ』

ザシュツ!ザシュツ!ザシュツ!ザシュツ!ザシュツ!

セルフィアさんが打ち出した衝撃波は、デイベインシューターを全て切り裂き、私へ襲い掛かる!

「レイジングハート!飛んで!」

『フライヤーフィン』

私は、飛行魔法を使用し、衝撃波を回避した。

レイジングハートを、正面にいるセルフィアさんに向けようとしたんだけど……

「い、いない!? 一体どこに!？」

セルフィアさんの姿は見当たらなかった。下にも、後ろにも。ということは、上!

「レイジングハート!」

『プロテクション』

ガキーン!

咄嗟にレイジングハートを真上に掲げ、障壁を展開した。障壁の展開と同時に、何かがぶつかる音が響き、腕に痺れを感じた。

「今のを防ぎますか。今までの魔導師は、この1撃で堕ちたんですが。」

真上を向くと、セルフィアさんが笑みを浮かべていた。

「さて、準備運動はこれくらいにして、測定に入りましょう。最初は回避力を測定します。準備はいいですか?」

「はい!」

「それでは、いきます！フリーズランサー！」

セルフィアさんの周囲に20個以上のランサーが出現した。

「ファイア！」

「レイジングハート！」

『フラッシュムーブ』

降り注ぐ魔力弾の雨を、加速魔法を用いて縦横無尽に避けていく。

全て避けきった時には、肩で息をするほどに疲労してしまった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「呼吸が荒いようですが、大丈夫ですか？」

光お兄ちゃんと同じように問いかけるセルフィアさん。

「大丈夫です。続けてください。」

「分かりました。次は、防御力を測定します。」

「わかりました。」

どんな攻撃が来るか分からないけど、とにかくできることをするしかない。

「レイジングハート！」

『プロテクション』

「準備OKです！」

「分かりました。それでは、いきます！」

『エターナルバスター』

光お兄ちゃんの時と同じように、翠の砲撃が私に襲い掛かる。

ズドオオン！

砲撃は真つ直ぐ障壁に激突し、予想以上の重みが腕に伝わってくる。

（くっ！重い・・・だけど、光お兄ちゃんだって耐えたんだ！私も、耐えてみせる！）

「くっ・・・ううう！」

ピキピキピキ

そ、そんな！障壁に痺ひびが・・・ダメッ！もう、耐えられない！

パリン

ズドオオオオオン！

「ぎゃあああああ！」

私が展開した障壁は、ガラスが割れるような音を立て、崩れ去った。障壁を打ち破った砲撃はそのまま私に直撃し、私は数メートル後ろまで吹き飛ばされてしまった。

「いたたたあゝ。」

すぐに自分の力で起き上がり、レイジングハートを構えた。

「だ、大丈夫ですか!？」

試験中であることも忘れ、セルフィアさんが慌てた様子でこちらに向かってきた。

「大丈夫です。それよりも、次の測定をお願いします。」

「・・・分かりました。最後の測定に入ります。最後は攻撃力を測定します。遠慮はいりません。全力で撃ってください。」

「分かりました。」

私の返事を聞くと、セルフィアさんは、上空へ上がり、障壁を展開した。

「レイジングハート!全力でやるよ!」

『OK』

桃色の魔方陣が私の足元に出現した。



「星の光よ、我が下へ集い、敵を撃ち抜け！」

レイジングハートに桃色の魔力が蓄積されていく。

「全力全開！ダイバイン！」

『バスター』

桃色の砲撃がセルフィアさんへと疾走する。

ズドオオオオン！

砲撃は真っ直ぐセルフィアさんが展開した障壁に激突し、火花を散らしている。

バアアアン！

やがてセルフィアさんが展開した障壁は爆発し、白煙が視界を奪った。

白煙が晴れると、笑みを浮かべているセルフィアさんがいた。

「お疲れ様でした。これで試験は終了です。データを打ち込むのに、少し時間が掛かるので、モニタールームで休憩しててください。結果が分かり次第、お知らせしますので。」

セルフィアさんが私に向かって歩み寄りながら言った。

「分かりました。では、失礼します！」

私はバリアジャケットを解除し、試験会場から出て行った。



## 試験結果（前書き）

遅くなってしまうたうえに、滅茶苦茶な文章になってしまいました。本当に申し訳ないです。感想やアドバイスをお願いします。

## 試験結果

〈モニタールーム〉

なのはが試験を終えてから30分後。

約束の時間に遅れることなく、セルフィアさんが試験結果の紙を持って戻ってきた。

「お二人の試験結果が判明したのでお知らせします。まずは高町光さんからです。」

「はい！」

やばい。今頃になって緊張してきた。心臓の鼓動の音がやけに大きく聞こえる。

「高町光さんは、合格しました。」

「ごう、かく？やったのか俺は！」

「光さんのデータを解析した結果、攻撃力S、回避力S、防御力AAとなりました。これを魔導師ランクに置き換えると、Sランク相当になります。まだ荒い所は見られますが、それはこれからの訓練で修正していきましょう。」

「はい！ありがとうございます！」

《おめでとうございます。マスター光。》

《ありがとうございます！プリユーナク。だけど、本当に喜ぶのはまだ少し先だ。次はなのはの試験結果が発表されるからな》

そう、次はなのはの試験結果が発表される。

先ほどの模擬戦の映像を見る限り、大丈夫だとは思うが、やはり不安はある。

「続いて、高町なのはさんの結果です。」

「高町なのはさんは・・・合格しました。」

「じう、かく・・・？や、やったー！！」

「おめでとうなのは」

「よくがんばったな。」

「ありがとうございます！ユーノ君、光お兄ちゃん！」

無事になのはも合格したか。これで本格的にジュエルシードの探索をすることができる。

「まだ話は終わってませんよ。お静かにお願いします。」

「」「」「すいません」「」

なのは合格したと言う通知だけを聞いて盛り上がってしまった。ちゃんと分析結果も聞いて、これからに役立てないとな。

「なのはさんのデータを解析した結果、攻撃力AAA、回避力AA、防御力AAでした。これを魔導師ランクに置き換えるなら、AAランク相当です。魔法の力を手に入れてから僅か数日でここまで戦えるなら十分です。ですが貴女はまだ力を手に入れて間もないので、これからの訓練で感覚を掴んでいってください。」

「はい！ありがとうございます！」

「さて、お二人ともご苦労様でした。レイジングハートとプリューナクに本部の座標と、長距離転移魔方陣を送りましたので、これを使っておこしく下さい。」

「わかりました！！！」

「それでは、解散とします。」

「ありがとうございます！！！」

セルフィアさんは入ってきた時と同じように、静かに出て行った。

ふう。やっと終わったな。早く家に帰って、風呂に入るとしよう。

「さ、帰ろっか？」

「うん！！！」

俺達は転移ポートへ向かい、海鳴公園に戻った。公園に到着したと同時にユーノはフェレットの姿になった。

公園の中央に備え付けられている時計に目を向けると、午後6時になっていた。

空を見てみると、太陽は半分ほど沈んでいる。

とりあえず帰ろう。

遅くなった理由を聞かれた時は、なのはと一緒に遊んでいたらいつの間にかユーノがいなくなっていたので二人で探していた、とでも言えば大丈夫だろうし。

「「ただいま〜!」」

「おかえりなさい。遅かったじゃない、心配してたのよ?」

「ごめんなさい。なのはと一緒に遊んでいたら、ユーノがいつの間にかいなくなっちゃって。二人で探してたんだ。」

あらかじめ考えていた理由を母さんに言ったら、すんなり許してくれた。

「とりあえず、お風呂沸いているから入ってらっしゃい。」

「「はい!」」

く光の部屋く

現在の時間は午後八時。

あれから風呂に入り、晩ご飯を食べ、今は自分の部屋の椅子に座ってユーノと念話で話していた。

《ごめんな、ユーノ。お前のせいにしちゃって》

《気にしないでいいよ。なんとも思っていないから》

《そっか。》

夜空を見上げてみれば、無数の星が輝いていた。

普通ならこの光景を見て感動するんだろうが、何故か俺はそうは思えなかった。

胸に不安を抱えながら俺は眠りに付いた。



新たな出会い 高町光編（前書き）

大変遅くなってしまい、申し訳ありません。時間が掛けたわりに、完成度は低いです。ホント、小説書くのって難しいですね。

新たな出会い 高町光編

（光の部屋）

皆さん、おはようございます。

突然ですが、今俺は呆然としています。

今の時間は、午前10時。

少なくとも家に誰か一人くらいはいる時間です。

なのに、我が家では俺1人。

いつも訓練している恭兄や美由姉は、勉強のために学校に行った事はまあ、納得できます。

昨日本人達も今日は朝早くから学校に行くと言ってましたし、

学生の本分は勉強とよくいいますから。

お父さんとお母さんは、当然喫茶「翠屋」で仕事なので、家に居ないのは当たり前でしょう。

ですが、なのはまでもが居ないのは少し、いやだいがおかしいと思います。

それで、家中を探してみたところ、リビングの机の上に、

「おはよう、光お兄ちゃん。いきなりだけど、アリサちゃんの家に  
すずかちゃんと一緒に遊びに行く事になったので行って来ます。夕  
方頃には帰ってくるつもりです。」

P・S お昼ご飯は冷蔵庫に入れてあるから、温めて食べてねって  
お母さんが言ってたよ」

冷蔵庫を覗いてみると、置き書き通りに昼ご飯であろうオムライス  
が入っていた。

お昼ご飯がオムライスなのは嬉しい事なのだが……。

「俺にも一声かけるよ〜!」

ちくしょう。俺もアリサの家に行きたかったのに。

なのはの奴、1人だけ行きやがって〜。

《だったら、今からでも行けばいいじゃないですか。》

俺もそう思ったんだけどさ。

「アリサの家の住所と電話番号知らないんだよな。」

3年間も友達として付き合い合ってるのに、家の番号も知らないとなる  
と……もうダメだね。

《しっかりしてくださいよ、まったく》

すみません。

《で？これからどうなさるおつもりなんですか？》

どうすっかな。

「適当にパンでも食べてから、久しぶりに散歩にでも行こうかな。」

《そうですね。たまには休息も必要でしょう》

というわけで、散歩をする事に決定。

（アリサの家）

アリサの家では十数匹の犬に囲まれながら、なのは、アリサ、すずかの3人はティータイムを楽しんでいた。

「それにしても、よかったの？光を誘わなくて。今頃怒り狂ってるんじゃないの？」

「きつと大丈夫だよ。って言いたい所なんだけど、なんか背筋が寒くなってきた……。」

ブルブルという効果音が付きそうなほど、なのはの体は震えていた。

「ふええ。なんか家に帰るのが怖くなってきたよ。」

偶然にも、なのはが背筋に寒さを感じたのは、光が大声を挙げたのと同時だった。

「光君、怒ってるかもしれないから3人でなにか買ってこようよ。」

「「ナイスアイデア!」」

すずかの提案になのはとアリサが同意したので、3人は近くにあるケーキ屋に行く事に決定。

「光サイド」

朝食を適当に食べた俺は今現在家の付近を散歩中だ。

「たまにはのんびり歩くっていうのも悪くないな。」

《でしょう? マスター光はたださえ毎朝往復8キロランニングという、小学生らしからぬ事をしてるんです。修行・トレーニング以外の空いている時間を使って、少しは小学生らしい事をしてください》

「努力するよ。」

努力しようとは思ってるんだけど、なかなかできないんだよなあ。

ゲームに興味はないし、同学年が見ているテレビもいったいどこがおもしろいかわからないし。

そんな事してるくらいなら、図書館に行って本を読んでもる方がマシだ。

そんな事を考えながらふと横を見てみると、懐かしい場所を発見した

「お、海鳴公園の近くにある林じゃん。ここに来るのも久しぶりだな。」

「ええ。私とマスター光が此処で出会って以来、一度も此処を訪れる事はありませんでしたね。」

「そういえばアレっきり来た事ないな。結構近くなのに。ま、あれから忙しかったってのもあるかもしれないけど。」

「確かにそうですね。出会ってからすぐ、美由紀様や恭也様と一緒に朝練に参加なされていましたし、2年前からは近くの山に朝早くから行って魔法の訓練を始めましたからね。」

「ああ。あの時は本当に死ぬかと思ったぜ。」

「うっ！話してたらあの2年前の地獄のような訓練を思い出しちゃったじゃねーか。」

「地獄のような訓練の内容はまた今度話すとして、今は少し休むとしよう。」

「公園のベンチに座って少し休むか。」

「ええ。少し休憩しましょうか。」

俺は林を抜け、公園のベンチに向かった。

ベンチが見えてきて一安心したのも束の間。

先客がいたようだ。ベンチに誰か座っている。

見た目は同じ年くらいの女の子。

髪は金髪で髪型はツインテール。

瞳の色は赤。

服装は、黒いワンピース。

とても綺麗だ。

俺は彼女から目が離せなくなってしまった。

俺の視線に気づいたのか、少女は俺の方へ顔を向けた。

彼女の顔は何の表情も表していなかったが、何故か俺には寂しそうな表情をしているように見えた。

「君は、誰？なんで私を見てるの？」

俺は、この問いに答えられないでいた。

新たな出会い 高町光編（後書き）

どうだったでしょうか？

感想やアドバイス、評価などをお待ちしております。



新たな出会い 高町なのは編（前書き）

大変お待たせしました。

相変わらずの駄文ですが、それでも構わないという方は読んでみてください。

感想や評価などもお待ちしております。

## 新たな出会い 高町なのは編

「ありがとうございます。」

営業スマイルを浮かべたお姉さんの言葉を背に、私達はケーキ屋さんを後にした。

光お兄ちゃんのために、アリサちゃんオススメのチーズケーキを買った。

実は光お兄ちゃんは、チーズケーキが大好きなの。

どれ程好きかというと、どんなに不機嫌な時もチーズケーキがあれば、たちまちご機嫌になるほど。

「チーズケーキ、おいしかったね。」

「そうだね。これなら光お兄ちゃんも大喜び間違いなしだよ。」

すずかちゃんが言ったことから分かるとは思っけど、

私達は光お兄ちゃんのお土産であるチーズケーキをお店で食べてきたの。

「当たったり前よ！私知ってるケーキ屋さんの中で、此処のチーズケーキが一番おいしいんだから！」

アリサちゃんが自信満々に言ったように、このチーズケーキは今

で食べたケーキの中で一番おいしかった。

色々と話しているうちに、アリサちゃんの家近くにある公園にたどり着いた。

私は公園の奥に、誰かがいるような感じがした。

魔力反応があるわけでもないのに、何故かそう思った。

「すずかちゃん、アリサちゃん。悪いんだけど、このケーキを持って先に家に戻っててくれないかな？」

私の言葉に、アリサちゃんとすずかちゃんが怪訝な顔をした。

「構わないけど、どうしたの？」

「ちょっと、この辺を散歩したくなっただ。」

「私達も一緒に行こうか？」

「大丈夫だよ。だから先に戻ってて。後悪いんだけど、ユーノ君の面倒もよろしく。じゃ、また後でね！」

私は、二人の返事を聞くことなく、公園の中に入っていった。

説明するのすっかり忘れてたけどユーノ君は、アリサちゃんの家に置いてきたの。

今頃は、アリサちゃんの犬たちと一緒に遊んでいるんじゃないかな？

〈同時刻、アリサの家 ユーノサイド〉

なのはがすずかにケーキを手渡していた頃、アリサの家の庭では、犬たちとユーノが追いかけてっこをしていた。

3匹ほどの犬に追いかけられ、涙目で必死に逃げているユーノ。

（なのは〜！早く戻ってきて〜！）

ユーノにとっての命をかけた鬼ごっこは、まだ始まったばかりだ。

〈ユーノサイド END 〉

〈光サイド〉

彼女の質問に、俺は数秒後に答えることができた。

緊張しているのか、少し声が震えていた気がするけど。

「俺の名前は高町光。できれば、光って呼んでくれ。君を見ていた理由だけど、なんだか君が寂しそうな顔をしているように見えたから、ちょっと気になったただだよ。」

「そう。君が名乗ってくれたんだから、私も自己紹介しないとね。私の名前はフェイト。フェイト・テストロッサ。私の事もフェイトって呼んでいいよ。」

フェイトか。いい名前だな。

「いつまでも立ってないで、こっちに来て座ったら？」

「じゃ、お言葉に甘えさせてもらおうよ。」

フェイトの言葉に従い、俺はフェイトの隣に座った。

さっそく気になった事を聞いてみるとしよう。

「ねえ、フェイトはなんで寂しそうな顔をしているの？誰かに苛められたの？」

しばらく無言だったけど、少しずつフェイトは話してくれた。

「・・・探し物をしてるんだ。」

「探し物？」

フェイトは、相変わらず寂しそうな顔をしながら話続ける。

「そう。母さんに集めて欲しい物があるって言われてたからそれを探してるんだけど、なかなか見つからないんだ。」

母さんに言われて、か。

「なんなら、俺も手伝おうか？」

一人よりも二人の方が早く探し物が見つかるかもしれないし。

だが俺の提案にフェイトは首を横に振り、言った。

「気持ちはいがたいけど光に迷惑をかけるわけにはいかないよ。それに、協力してくれている人達がいるから、きつとすぐに見つかると思う。」

ここで初めてフェイトが笑った。けど、その笑顔は心からのものではなく、無理に笑っているように思えた。

「そうか。」

しばらく沈黙が続いた。

俺が何の話をしようか迷っているとフェイトが立ち上がった。

「じゃあこれから用事があるから、私は帰るね。」

「ああ。気をつけてな。」

フェイトは、ゆっくりとした足取りで、公園から出て行った。

「さて、家に帰るとするか。」

フェイトが公園から出て行ったのを確認した後、俺も立ち上がり、帰路についた。

くなのはサイドく

公園に入って最初に視界に入ったのは、大きな滑り台。

滑り台は丁度真ん中の位置にあり、左右に5人ほど座れるようなベンチがあった。

見渡す限り、人の姿は無い。

( やっぱり、気のせいだったのかな？誰かがいるような気がしたんだけど。 )

私はさらに奥へと足を進めた。

そこには、小さなジャングルジムがあった。

そして、ジャングルジムの頂上に腰掛けている一人の男の子を見つけた。

金髪のショートヘアで、綺麗な赤い瞳。

瞳と同じ色の赤いシャツに、白いズボンという服装の、たぶん私と同年くらいの子。

「ん？誰だ、お前は？」

じっと観察していた私の視線に気付いたようで、ジャングルジムから降りた男の子が問いかけてきた。

「私の名前は高町なのは。親しい人は、私の事をなのはって呼んでるから、私の事はなのはって呼んでね。貴方の名前は？」

「俺の名前はフィレス。フィレス・テストロツサだ。俺の事もフィ

レスって呼んでいい。」

フィレス君、か。

「フィレス君は、ジャングルジムの頂上に登って何してたの？」

「……考え事してたんだ。」

「なにか悩み事？何なら、相談にのろうか？」

友達や親しい人ならともかく、たった今出会った男の子に対して言う言葉じゃないような気がしたけど、困っている人が目の前にいるんだから力になってあげたいと思ったんだ。

「少し長くなるかもしれないから、場所を変えよう。」

そう言っつて、フィレス君は、歩き出した。

私はフィレス君についていき、ベンチの前まで来た所でフィレス君は足を止めた。

「此処でいいかな。すわろうか。」

「うん。」

「……」

「……」



座ったのはいいけど、フィレス君は話そうとしない。

そんなに話づらいことなのだろうか。

そう思っていると、フィレス君がゆっくりだけど話し始めた。

「実はな、母さんからどうしても欲しい物があるから、探してきてくれって頼まれたんだけど、それがなかなか見つからないんだ。」

フィレス君は、寂しそうな表情で話続ける。

「一つだけならいいんだけど複数あるから、集めるのに時間がかかるんだ。しかも、どこにあるのかですらわからない。」

「なんなら、私も探すの手伝おうか？一人よりも二人のほうが早く探し物が見つかるかもよ？」

私の提案に、フィレス君は首を振って言った。

「気持ちはいりたいが、なのはに迷惑をかけるわけにはいかない。それに、俺は一人じゃない。協力してくれている人達がいるから、大丈夫だ。諦めずに探し続ければ、きっと見つかるって俺は信じている。」

「そっか。頑張ってるね、応援してるよ。」

「ああ、ありがとな。話を聞いてくれて。話したら少し楽になったよ。」

確かに先ほどのような寂しそうな表情は消え、少し明るいものにな

っていた。

私は、フィレス君の役に立つことができたのが嬉しかった。

「なら良かった。」

フィレス君は、ベンチから立ち上がり、にこやかに言った。

「じゃあ、俺は用事があるからそろそろ帰るよ。」

「そっか。」

本当はもう少し話していたかったけど、仕方が無いよね。

フィレス君に迷惑をかけるわけにはいかないし。

「なのはも気をつけて帰れよ。」

そう言いながら、フィレス君はゆっくりと公園の出口へ歩いていった。

「私も、アリサちゃんの家に戻ろう。」

フィレス君が公園から出て行ってから私も立ち上がり、アリサちゃんの家に向かった。

（またどこかで合えたらいいな。）

なのははそう思い、鼻歌を歌いながらアリサの家までの道歩いていく。

だがその願いが最悪の形で叶う事になるうとは、まだ誰も知る由もなかった。

## 現れた敵（前書き）

まずは最初に一言。すいませんでした。テスト週間などで最近忙しく、投稿できませんでした。相変わらずの駄文ですが、評価や感想などをよろしくお願いします。

## 現れた敵

〽翌日、午前6時30分〽

いつもどおりの朝練を終えた俺は、母さんの朝食作りを手伝っていた。

30分経過し、朝食が完成した。

メニューは、ご飯、豆腐とわかめの味噌汁、目玉焼きだ。

食卓に人数分の箸と茶碗を並べ、壁側にある時計で時間を確認すると、現在7時。

そろそろなのはを起こさないとまずいな。

「母さん。なのはを起こしてくる。」

「お願いね。後、道場にいる父さん達にも声を掛けといてくれないかしら?」

「ん、了解。」

俺は2階にあるなのはの部屋に向かった。

コンコン。

「もう7時だぞ。そろそろ起きろ。」

「ん〜。今行く〜」

まったく。一体いつになったら自力で起きれるようになるのかね、あいつは。

さて、次は道場に向かうか。その前に、洗面所に寄って洗い立てのタオルを持って行かないと。

〜道場〜

道場の扉を開けると、美由姉と恭兄が木刀で素振りをしていた。

父さんは少し離れた場所で二人の事を観察していた。

「父さん、美由姉、恭兄！朝ごはんできたよ〜！」

「分かった。んじゃ、美由紀、恭也。続きは学校から帰ってからな。」

「はい。」

「ほら、これ使って。」

洗面所で取ってきた洗い立てのタオルを3人に放り投げた。

「んじゃ、リビングで待ってるから、なるべく早く来てね。」

俺は返事を聞くことなく道場から出て行った。

〜リビング〜

10分ほど経過して、全員リビングに来た。

「「「「「いただきます」「」「」

やっぱり母さんの料理はおいしいな。

今度作り方教えてもらおうかな？

バスの時間に間に合わなくなるから急いで食べよう。

「「「「ちそつさま」「」

「なのは、早くランドセル取りに行こう。バスの時間に間に合わなくなる。」

「うん！」

カバンを部屋まで取りに行き、玄関に向かう。

「「「いつてきまーす!!」「」

バス停に着き、バスに乗り込む。

バスは学校へと向かって行った。

「学校、昼休み」

時は進み、現在は昼休み。

いつもどおり屋上でアリサ達とお弁当を食べていた。

「そういえば、5時間目って体育だったわよね？」

「うゝ。体育嫌だよゝ！」

アリサの言葉になのはがげんりしているようだけど。

「なに言ってるんだよ。体育楽しいじゃん。」

「光お兄ちゃんやすずかちゃんみたいな運動神経がいい人だけだよゝ。なのはは運動が苦手なのゝ！」

「まあまあ、落ち着いてなのはちゃん。私は運動神経がいいわけじゃないよ。ただ体を動かすのが好きだけ。それに光君は普段から訓練してるからじゃないかな？」

だったよなそうそう。すずかの言うとおりだよ。

「そろそろ予鈴なるわよ？戻ったほうがいいんじゃない？」

「げ！？もうこんな時間かよ！早く戻ろうぜ！確か次は数学だったよな？」

「ええ、だから早くしなさい。あの先生は怒ると怖いんだから！」

「」「うん！/ああ！」「」

俺達は急いで教室に向かった。



夕方

無事に午後の授業も終了し、現在はなのはと下校中だ。

すずかとアリサとは、途中の道で別れた。

このまま帰るのもつまらないので、近くの商店街でウィンドウショッピングをしている。

だいたい見終わったので、そろそろ帰ろうとしたその時！

『光さん、なのはさん、ユーノさん！ジュエルシードの反応を感じました！場所は、すぐ近くの神社です！すぐに向かってください！』

カイルさんからの念話の直後、俺達もジュエルシードの反応を感じました。

確かに俺達が感知するより速い。これならこちらも速やかに対応することができる。

『了解！すぐに向かいます！』

俺達はすぐに神社に向かった。

神社

神社に向かっている途中、ユーノと合流し、3人で神社に向かった。

神社に到着すると、そこには赤い角に鋭い牙、4つの目を持った謎の生物がいた。

「あれもジュエルシードの思念体なのか？前のやつとは違うような気がするんだけど？」

「あれは・・・原住生物を取り込んでる！？」

「どうなるの？」

「実体がある分、前よりも手強くなってると思う。」

「そうか。なら、前と同じように俺が時間を稼ぐから、なのはは封印の準備を頼む。」

「うん！」

さあ、戦闘開始だ！

「プリューナク！」

「レイジングハート！」

「Set Up！」

制服からバリアジャケットへ服装を変え、杖となったプリューナクを握る。

「行くぞ！プリューナク！」

『OK』

プリューナクとの短い会話を終え、足の裏に魔力を込め、跳躍。

「プリューナク！シューティングモード！」

『シューティングモード』

「グラビティランサー！ファイア！」

4つのランサーを生成し、敵に向かって放つ。

「ギヤアアアア！」

ランサーは全て命中し、敵は気絶した。

「光お兄ちゃん！」

その時、ちょうどなのはの声が聞こえた。

どうやら、封印の準備ができたらしい。

俺はなのはの後ろまで移動した。

「レイジングハート！シーリングモード！」

『seaaring』

レイジングハートから、桃色の帯のようなものが伸び、敵を拘束していく。

「グオオオオオ！」

桃色の帯で拘束されると、敵は苦しみ始めた。

すると、敵の額に「XVI」という文字が浮かび上がった。

「ジュエルシード、シリアル16！封印！」

敵から眩しいほどの光が発せられ、一瞬俺達の視覚を奪った。

目を開けてみると気絶している犬がいた。

そして空中に浮いているジュエルシード。

恐らく、この犬がジュエルシードを発動させてしまったのだろう。

なのはが、レイジングハートでジュエルシードを回収した事によって”この戦闘”は終了した。

「さて、なのは、お疲れさん。」

「うん。光お兄ちゃんもお疲れ。」

「悪いんだけど、俺とユーノはちょっとやらなくちゃいけない事があるから、悪いけどなのはは先に家に戻ってくれ。」

「それはいいけど……ユーノ君と何をするの？」

「それはちょっと言えない。男同士でなくちゃできない事なんだ。」

「……わかった。じゃ、先に戻ってるよ。あんまり遅くなっちゃだめだからね？」

なのははまだ納得はしていないようだったが、頷いてくれた。

「ああ。わかってる。」

俺の返事を聞き、なのはは笑顔を浮かべ去っていった。

「なんでなのはにあんな事言ったの？」

「巻き込みたくなかったんだよ。これから起こるであろう戦闘に。」

「戦闘って……もうジュエルシールドは確保したじゃないか！」

「……此処に来た時点で、俺はジュエルシールドとは違う魔慮反応を感じた。そして、その魔力反応は今も感じる。恐らく、魔導師だろう。」

俺の言葉に、ユーノは驚愕の表情を浮かべる。

「魔力反応だって！？でも僕は何も感じないよ？」

「幻術でも使って魔力反応を抑えているんだろうよ。おい！いい加減出てこいよ！」

静寂がしばらく続いてから、どこからか声が聞こえた。

「……まさか俺の幻術が見破られるとはな。お前なかなかやるな。」

声が聞こえるのと同時に、目の前の空間が歪み、一人の少年が姿を現した。

金髪のショートヘアに、透き通るような赤い瞳。

「フェイト……じゃないな。誰だお前？」

相手の少年は、不敵な笑みを浮かべながら言った。

「俺の名はフィレス。フィレス・テストロッサ。お前がさっき言ったフェイト兄だよ。お前がどれ程の実力を持つてるのかを試しに来たんだ。」

今、第2の戦闘が始まるうとしていた。

## 敵の実力（前書き）

やっと完成しました。あいかわらず完成度が低いですが、よかったです。読んでください。評価や感想などをお待ちしています。

## 敵の実力

「俺の実力を見たい、だと？」

「ああ。」

俺の問に対して、フィレスは淡々と答える。

「なぜ俺の実力を知る必要がある？」

「簡単なことさ。お前と同じく、俺もヴァリアブルデバイスの持ち主でな。俺とお前、どちらが強いかを知りたいんだよ。ヴァリアブルデバイスの使い手はなかなかいないからな」

「っ！お前が知っているということは、フェイトも知っているのか！？」

「いや、フェイトはなににも知らないよ。これは俺が単独でやっていることだ。さて、悪いがあんまりのんびりとしている時間はないんでね。そろそろ始めさせてもらおう」

そう言いながら、フィレスは右手を掲げる。

右手には、金色の宝石が付いた指輪をしている。

恐らくあの指輪があいつのデバイスだろう。

「ユーノ！結界を展開してくれ！」



「わかった！」

ユーノが展開した結界により、周囲の景色がモノクロに変わっていき。

「ルシファリウス！Set Up！」

フィレスが紫の光に包まれる。

光が収まると、赤いボディースーツに黒いベルトという姿になっていた。

《ユーノ！どこかに隠れてろ！》

《う、うん！わかった！》

ユーノは近くの茂みに隠れた。

「ルシファリウス！シューティングモード！」

『シューティングモード』

「フレイムシューター！シュート！」

『フレイムシューター』

フィレスは、3つの炎を帯びたスフィアを展開し、俺に放つ。

俺はそれをバックステップでよける。

「グラビティランサー！ファイア！」

『グラビティランサー』

俺はグラビティランサーを4発展開し、フィレスへ放つ。

「ルシファリウス！ハーケンモード！」

『ハーケンモード』

ルシファリウスの宝石の部分がスライドし、そこから魔力刀が展開される。

フィレスはハーケンモードとなったルシファリウスを上段から振りあげる！

「切り裂け！ハーケンセイバー！」

『ハーケンセイバー』

ルシファリウスから三日月型の魔力刀が放たれランサーを全て切り裂き、俺に襲いかかる。

『プロテクション』

迫り来るハーケンセイバーを俺はプロテクションで防ぐ。

プロテクションを解除し、フィレスがいるであろう前方に緯線方向を向けるが……

「いない！？一体どこに行った！？」

そこにフィレスの姿はなかった。

右、左、後ろ。

どこにもいない。

となると残るは・・・

「上か！？」

「はあっ！！」

咄嗟に俺はプリューナクを頭上に振り上げる。

それと同時にフィレスはルシファリウスを振り降ろす。

お互いのデバイスが衝突し、衝撃波を周囲に拡散させる。

「よく反応できたな！」

「日頃から鍛えているんでね！」

短い会話を終わらせ、俺達はお互いに距離をとった。

ルシファリウスをデバイスモードに戻し、フィレスは言った。

「準備運動はこれくらいでいいだろう。」

「準備運動だと？」

「ああ。今までののはほんの肩慣らしさ。これからが本番だ！」

そう言い、フィレスはルシファリウスを掲げた。

「我は汝の真姿開放を望む！今此処に顕現せよ！炎剣！」  
フラツメ・シユウエアト

ルシファリウスが突然光輝を放ちながら、徐々に形を変えていく。

光輝が収まると、フィレスの手には……

「剣、だと！？」

燃え盛る剣が握られていた。

「なんなんだ……いつたいなんだよその姿は！」

俺はパニックになってしまった。

プリューナクに出会って3年経つがこんな話、今まで聞いたことがない。

「おいおい、まさか3年も一緒にいたのに真姿開放もできてないのか？」

フィレスの呆れたような声に、俺は何も言い返せない。

「お前には失望したよ。ヴァリアブルデバイスの真名も聞けないん

じゃ話にもならない。」

「真名？」

「俺のルシファリウスも、お前のプリューナクも”ヴァリアブルデバイスとしての名”だ。真名とは、中核として使用されているロストロギアの名のことをいうのさ。その名を開放することによって、ヴァリアブルデバイスは真の力を発揮する。こんなふうにな！」

ファイレスフラッシュ・シユウヘアト炎剣を地面に突き刺した。

すると、俺とファイレスの中間地点からバスケットボール並みの火球が飛び出してきた。

しかも1発じゃない。

俺に少しずつ近付きながら2発3発と飛び出してくる。

俺はバク転しそれらを避け、跳躍。

そのまま地面に着地しようとしたが・・・

『マスター光！四方より魔力反応です！』

プリューナクの警告の警告どおり、上下左右から火球が迫っていた。

（くっっ！！誘導型だったのか！！）

直線で俺に迫ってきたので、勝手に直射型だと判断してしまったのだ。

冷静に考えればすぐに分かる事だ。

誘導型の火球を放ち、直線で進むように操作すればいい。

「しまっ！！」

凄まじい爆音が響き、黒煙が上がる。

飛行しているならまだ防ぐ手はあったが、今は跳躍しているだけ。

その結果、ラウンドシールドを展開することもできず、全て命中。

重力に従い俺は転落した。

全体的にバリアジャケットに焦げ目があり、体中が少し熱い。

両足と右腕は無事だが、左腕が折れてるみたいだ。

左腕のいたみのせいか、熱のせいかわからないが、目がかすんできた。

頭の中で、先程なのはと交わした言葉が蘇った。

『わかった。じゃ、先に戻ってるよ。あんまり遅くなっちゃだめだからね？約束だよ？』

『ああ。わかってる。』

(ごめん、なのは。約束・・・守れ・・・なく・・・)

なのはに心の中で詫び、俺は意識を手放した。

「ユーノサイド」

僕は光の指示に従い、近くの茂みに隠れて、戦況をずっと見ていた。まさか、光が負けるなんて。

その事実が信じられなくて、光に駆け寄った。

「光、光！」

僕が呼びかけてもまったく返事が無い。

気を失っているみたいだ。

「確かユーノとかいったな」

いきなりフィレスに声を掛けられた。

「一応加減はした。早めに病院に連れて行って治療してやってくれ。そして、高町光が目覚ましたら伝えてほしい事がある。俺との実力差は体感したとおりだ。もしこれからも俺の前に現れるのならば、手加減はしない、とな」

僕の返答を聞くことなく、フィレスは転移魔法でこの場からいなくなった。

「とにかく光を病院に連れて行かないと！」

《カイルさん！聞こえますか！？》

《ユーノさん！なにかあったのですか！》

カイルさんからの返信はすぐに来た。

《ジュエルシードの確保には成功したのですが、その直後に魔導師の襲撃にあい、光が負傷しました！》

《すぐに医療班の手配をします！近く長距離転移魔方陣を展開させますので、すぐに来てください！》

《わかりました！》

光を背負うと、近くに魔方陣が展開されたので、すぐに魔方陣の中心に移動した。

すると魔方陣が展開し、僕と光はこの場から消えた。

〈ユーノサイド End〉

〈なのはサイド 同時刻 なのはの部屋〉

私は今ベッドに腰掛けている。

光お兄ちゃんに言われて家に戻ってから既に時間が経過していた。



光お兄ちゃん、ユーノ君と何やってるんだろう？

すぐに戻ってくるって言ったのに、まだ帰ってこないし。

様子を見に行こうかな？

ベッドから立ち上がったその時！

《なのはさん！聞こえますか！？》

カイルさんから念話が届いた。

《カイルさん？どうしたんですか？》

《光さんが魔導師の襲撃にあい、負傷しました！すぐに来てください！》

カイルさんの言葉で全身が硬直してしまった。

(っ！！そんな・・・な・・・光お兄ちゃんがやられるなんて・・・)

《わかり・・・ました。すぐに行きます》

落ち込んでいても仕方が無い。

ユーノ君に会って、話を聞かないと！

「レイジングハート！長距離転移魔法発動！私を対策局に連れてって！」

『了解しました』

長距離魔法が足元に展開され、私は対策局に向かった。

その後（前編）（前書き）

今回はいつもより早く更新できました。評価や感想をお待ちしております。

その後（前編）

「第2管理世界「セリオン」」

「なのはサイド」

転移を終え、対策局に到着した。

「なのはさん！」

背後からカイルさんの声が聞こえたので、振り向いた。

「カイルさん！光お兄ちゃんの容態はどうなんですか！？」

「全身の軽度の火傷に、左腕の骨に輝が入っているようです。この程度なら、数時間で治りますよ。」

「・・・そうですか。」

「ユーノさんには先に病院に向かってもらっていますので、私達も行きましようか？」

「・・・はい。」

私達は足早に病院へ向かった。

「病院のロビー」

病院のロビーに到着すると、そこにはユーノ君がいた。

「・・・ごめん、なのは。僕が居ながらこんな事になっちゃって。」

ユーノ君の表情は暗い。

「気にしないで。ユーノが悪いわけじゃないから。それより、私が家に戻った後何が起こったかを話してくれる？」

「・・・うん、分かった。」

ユーノ君は、私が家に戻ってからの事を話してくれた。

「光は、神社に到着した時点で、敵の魔導師の気配に気付いていたんだ。敵の魔導師の名前はフィレス・テストロッサ・・・」

「!!!」

そんな・・・フィレス君が・・・光お兄ちゃんを？

「なのは、フィレス・テストロッサを知ってるの？」

私の反応を見て、ユーノ君が私に尋ねる。

「うん。2日前に光お兄ちゃんのためにケーキを買った帰りに、公園で偶然会って少しお話したんだけど。でも、フィレス君からは魔力反応を感じなかったよ!？」

「光が言ってたよ。幻術を使って魔力反応を抑えていたんだろうっ

て。・・・ファイレスの今回の目的は光の実力を試す事だったんだ。」

「光お兄ちゃんの実力を試す？なんでわざわざそんな事を？」

「それはファイレスも光と同じく、ヴァリアブルデバイスの使い手だったから。自分と同じデバイスを持つ相手と闘って、自分がどれほどの強さか知りたいて言ってた。」

「ファイレス君も、光お兄ちゃんと同じヴァリアブルデバイスの使い手だったなんて・・・」

私はただ驚くことしかできない。

「別に驚くような事ではありません。時空管理局はそれこそ数え切れないほどのヴァリアブルデバイスを製造し、次元世界に飛ばしているのです。同じ次元世界に、ヴァリアブルデバイスの使い手が複数いてもおかしくはありませんよ。」

「・・・そうですよね。」

私は、初めてカイルさんと出会った時に見せられた映像を思い浮かべた。確かに、時空管理局は数え切れないほどのヴァリアブルデバイスを保管していた。

「最初は、光とファイレスは互角の戦いを繰り広げてた。でも、ファイレスは全然本気を出さなくて、今までの互角の戦いは準備運動だと言って言ったんだ。そしてこれからが本番だとも言っように、ヴァリアブルデバイスの本当の力を開放したんだ。」

「ヴァリアブルデバイスの、本当の力？」

「フィレスによると、ヴァリアブルデバイスの核として使用されているロストロギアの名前の事を真名というらしいんだけど、その真名を開放する事によって、真の姿と力を発揮するらしいんだ。そしてフィレスが真姿開放をすると、デバイスが杖から燃え盛る剣に変化したんだ。インテリジェントデバイスの状態の時から炎を操っていた所を見ると、レアスキル『魔力変換資質「炎」』の持ち主だと思う。そして光は、開放されたその力に敗れてしまったんだ。・・・これが、なのはが神社から出て行った後に起こった事の全てだよ。」

「・・・そっか。話してくれてありがとう、ユーノ君・・・」

自分の声が震えているのを自覚した。

我慢しなくちゃと思ってても、この震えは、悲しみは止められない。

光お兄ちゃんにとって、私は一体なんなんだろう？

「・・・」

「・・・」

「・・・」

私達は、ただ黙っているだけだった。

光お兄ちゃんが負傷した経緯はユーノ君が説明してくれたので、後は光お兄ちゃんの治療が終わるのを待つしかない。

「高町光さんの治療が終了しました。間もなく意識が戻ると思っています。1234号室にお越しく下さい。」

沈黙が数分続いた後、看護婦さんがやってきて、光お兄ちゃんの治療が終了した事を教えてくれた。

病室まで案内してくれるようなので、私達は看護婦さんについていく。

しばらく歩くと、光お兄ちゃんぼの病室に到着した。

看護婦さんが病室の扉をノックし、光お兄ちゃんお返事を聞いてから入室した。

私達も、看護婦さんの後に続き、入室する。

そこには、上体を起こした上体でベッドに横になっている光お兄ちゃんがあった。

くなのはサイド End く

くユーノサイドく

看護婦さんが、ベッドの横に人数分の椅子を用意してくれたので、お礼を言っ僕達は座った。

それにしても、困ったな。



フィレスから伝言を預かったのはいいけど、どうやって光に伝えよう？

内容が内容だから、なのはやカイルさんがいる前で伝えるわけにもいかないし。

・・・そうだ！念話で伝えればいいんだ！

そつすれば、光に伝言を伝えられる！

でもいきなりだと光が驚くかもしれないから、会話をしながらやろう。

用が済んだら看護婦さんが出て行くだろうから、その直後に実行だ。

僕が考えをまとめ終わると、ちょうど看護婦さんが部屋を出て行った。

「光、体の調子はどう？《実は、フィレスから伝言を預かっているんだ》

「ああ。痛みもなくなっている。もう大丈夫だ。《フィレスから伝言？》

「そっか。良かった。《俺との実力差は体感したとおりだ。もしこれからも俺の前に現れるのならば、手加減はしない。って言ったよ。》

「念のために今日は検査入院するように、って先生に言われたよ。今の状況をどういう風に母さん達に言えば良いと思う？事実を話す

わけにもいかないし・・・《・・・警告、か。あいつの今回の目的は俺の実力を測る事だったようだから、手加減してなおあの威力、という事か。》

「それなら、友達の家に泊まる事になったっていつふうに言えばいいんじゃないかな? 《うん、そうなるね。光はどうするつもりなの?》」

「だけど、そう言ったら母さん達のことだ、絶対に友達の親御さんに代わって言うと思うけど? 《これからも、ジュエルシード集めを続けるさ。まだ確証はないけど、俺達とファイレス達の目的は同じだと思う。このままジュエルシードを集め続けていけば、ファイレスにまた会えるような気がするんだ。次にファイレスに会う時まで、俺も真姿解放を使えるようになっていれば少なくとも今回のような事にはならないはずだ。そう簡単にはいかないだろうけど、会得してみせるぞ》」

光の瞳はその決意が揺ぎ無いものである事を物語っていた。

僕にできる事があるのなら、協力したい。

僕はそう思った。

くユーノサイド Endく

くなのはサイドく

光お兄ちゃんの疑問に、ユーノ君は唸り声をあげている。

そんな時に、フィレスさんが助け舟を出してくれた。

「なら、私が光さんの家に連絡するというのはどうでしょう？」

「それだ！すいませんがフィレスさん、お願いできますか？」

「了解しました。」

これで”1つ目の問題”は解決した。

ユーノ君達にとってはこれで終りだろうけど、私にしてみればこれは一つ目の問題。

私には、他にやらなければいけない事がある。

それは、光お兄ちゃんと二人きりで話をする事。

さっきユーノ君の話を聴いている時に、光お兄ちゃんと1対1で話をしたいって思ったんだ。

光お兄ちゃんにとって私は何なのかを確かめるため、私の願いや想いを光お兄ちゃんに伝えるためにこれはどうしても必要な事。

だから -

- - - - -

「ユーノ君、カイルさん。光お兄ちゃんと二人きりで話をしたいので、席を外してもらいませんか？」

「構いませんよ。では、私は光さんの家に連絡してきますね。さ、

ユ一ノさん。行きましようか。」

「あ、はい。じゃあ、光。また明日。」

「ああ。また明日な。カイルさんも、ありがとうございました。」

ユ一ノ君とカイルさんはが部屋から出て行くと、病室内はしばらく静寂に包まれた。

「・・・で、話つてのはなんだ？」

私がい出すタイミングを計っていると、光お兄ちゃんの方から口火を切ってくれた。

「単刀直入に聞くね。・・・光お兄ちゃんにとって、私は足手まといなのかな？」

「っ!!！」

光お兄ちゃんが息を呑んだのが分かった。

窓から差し込む夕日だけが、私達を見守っていた。

その後（後編）（前書き）

感想や評価をお願いします。

その後（後編）

「何言ってるんだ、そんなわけないだろう！」

叫ぶように大声で否定する光お兄ちゃん。

それなら、どうして！！

「なら！なんで、私を家に帰したの！？神社に着いた時点で、フィレス君の魔力反応を感知していたんでしょ！？？」

「……ユーノから聞いたのか。」

「そうだよ。ユーノ君が全部話してくれた」

しばらく、沈黙が続く。

「……神社に着いた時点で感じていた魔力反応は、俺と同等だった。だから、俺一人で対処できると思ったんだ。ユーノに残ってもらったのは、結界を展開してもらったためだ。」

先程と違い、今度は静かに光お兄ちゃんは話す。

「でも、結局は負けちゃったじゃない。」

「ああ。だけど、次は負けないさ。だから、なのは。お前は俺の事は気にせずに、ジュエルシード集めに集中して「そんなの嫌だ！！」  
っ！！！」

私は光お兄ちゃんの言葉を遮るように私は叫ぶ。

「光お兄ちゃんがフィレス君と戦っているのに、私だけ見てるなんて、別のことをしてるなんてそんなの嫌だよ！確かに、光お兄ちゃんより弱いかもしれないけど、私にも魔法の力がある！私にも何かできることがあるはずだよ！光お兄ちゃんと一緒に戦わせてよ！もう、誰かが傷つくのは見たくないの！！」

さつきから泣くのを我慢してたけど、もう限界みたい。

私は、光お兄ちゃんの右腕に縋り付くようにして思いきり泣いた。

そんな私に、光お兄ちゃんは頭をポンポンと2、3回優しく叩いた。

一瞬泣くのも忘れ、顔を上げる。

そこには、光お兄ちゃんの優しい笑顔があった。

「確かに、お前にもできることがあるかもしれない。でも、これは俺とフィレスの問題だ。お前には関わってほしくない。ユーノに聞いたのなら、フィレスも俺と同じヴァリアブルデバイスの使い手だ。って事は知ってるんだろ？」

「うん。」

「ヴァリアブルデバイスはお前も知ってたのとおり、ロストログアを核に使用したデバイスだ。何が起るかわからないんだよ。暴走する可能性だって0じゃない。そんな危険な戦いに、お前を巻き込みたくないんだ。頼む、分かってくれ。それに・・・」

「それに？」

「いや、なんでもなし。とにかく、これは俺一人でやりたいんだ。なのはの言いたい事は十分に分かった。大丈夫、次は負けないよ。絶対に。」

光お兄ちゃんの瞳は、真剣だった。

まだ納得したわけではないけど、何を言っても無駄だろう。

次は絶対に負けないうて言ってたから、それを信じたい。

それに私の目的は達成できた。

ここらへんが引き時だと思う。

「・・・分かった。でも、無茶だけはしないで。」

「ああ、分かった。」

「じゃあ、私はカイルさん達の所に行くね。また明日。」

「ああ、また明日。」

私は光お兄ちゃんの返事を聞き、病室から出て行った。

くなのはサイド End く



く光サイドく

なのはがあんな風に考えていたとはな。

誰かが傷つくのはもう見たくない、か。

それには同感だ。

もう、あんな気持ちになるのはごめんだからな。

それにしてもさつきは危なかった。

まだ確証もないのに、余計な事を言ってなのはを不安にさせちまう所だった。

推測とはいえ、言えるわけないよな。

もうすぐお前の前にも敵が現れるかもしれない、なんて。

願わくば、俺の気のせいであってくれ。

俺は、煌く夕日を見上げながら、そう願った。

く光サイド End く

くなのはサイドく

光お兄ちゃんの病室を出た私は、ロビーに向かった。

そこには、ユーノ君とカイルさんがいた。

「おや、なのはさん。もうお話は終わっただんですか？」

私の姿を視認したのか、ユーノ君とカイルさんが私のほうに歩み寄った。

カイルさんの質問に対して、私は笑顔で答える。

「ええ。おかげですつきりしました。」

二人とも私の頬にある涙の跡については、あえて触れないでくれた。

そこに、二人の優しさを感じた。

「さ、もう日が暮れてしまいます。そろそろお家に戻らないとまずいでしょう。対策局の転移ポートまでお送りしますよ。」

カイルさんの言葉に従い、私達は病院から出て行った。

夕日が眩しく輝き、私達を照らしていた。

〈時空管理局 本局〉

第1管理世界であるミッドチルダに聳える時空管理局の本局。

そこのとある会議室で、極秘会議が行われていた。

「皆さん、今回集まってもらったのは他でもない。」

長テーブルの奥の中央に座っている、老人が徐に口を開く。

この男が議長なのだろう。

「上層部直属部隊『ブラッディソルジャー』から、第97管理外世界「地球」にてヴァリアブルデバイスの反応を察知したという連絡があった。」

議長の言葉に、室内はどよめく。

「データと照合してみた結果、察知した反応は、フラックメ・シユウエアト炎剣であることが判明した。そこで、これからどうすべきかを、皆と話し合いたいと思う。」

「即刻生け捕りにし、管理局に入局させるべきだ！」

「だが、あの炎剣相手に、メッサ・シユウエアトどこまで対抗できるかわからんぞ。」

「なに、心配することはないさ。ヴァリアブルデバイスを封じる手は考えてある。後はそれを実行に移すだけだ。」

「では、それを実行に移す事を許可する。準備を始めてくれ。」

議長の言葉を最後に、会議は終了し、男達は退室していく。

今、管理局の闇が動き始めた。

## 修行？（前書き）

感想やアドバイス、評価などをお待ちしております

修行？

〔高町家、なのはの部屋　なのはサイド〕

午前7時。

いつもなら光お兄ちゃんに起こされて初めて目を覚ます私だけど、今日はなぜか自然に目が覚めた。

「おはよう、ユーノ君。」

「おはよう、なのは。」

ユーノ君に朝の挨拶をして、カーテンを開ける。

今日もいい天気だ。

今日も1日がんばるぞ〜！

さて、準備を始めますか。

私は制服に着替え、髪を整えた後、リビングに向かった。

リビングに向かい、お母さん達に朝の挨拶をして、テーブルにコップを並べようとした時に、玄関から誰かの声がした。

玄関に向かうと、そこには・・・

「おはよう、なのは。」

笑顔を浮かべた光お兄ちゃんがいた。

「うん、おはよう。光お兄ちゃん。」

光お兄ちゃんの挨拶に、私も笑顔で返した。

「腹減った。朝ごはんできてる？」

「うん、もうすぐできるみたいだよ。」

光お兄ちゃんの気の抜けた声に思わず笑ってしまった。

「じゃあ、朝ごはん食べる前に制服に着替えてくる。」

「分かった。時間ないから急いだ方がいいよ。」

「ああ、そうする。」

その言葉を最後に光お兄ちゃんは会談に向かい、私はリビングに戻って朝ご飯の準備を手伝った。

数分後。

「おはよう。母さん、父さん、恭兄、美由姉」

私服に着替えた光お兄ちゃんがリビングに来た。

私がテーブルにコップを並べた時点でもう皆リビングに集まっているので、もう既に全員席に着いている。

「おはよう、光。もう朝ご飯できてるから、早く食べましょう。バスの時間に遅れちゃまずいし、ね。」

「分かった」

お母さんに返事をした後、光お兄ちゃんも席に着いた。

「「「いただきます」「」「」

合掌をした後、それぞれ食べ始める。

バスの時間が迫ってるから急いで食べないと。

「「「ごちそうさま!」「」

光お兄ちゃんと私は同時に立ち上がり、準備を始める。

「「「いってきま〜す!」「」

「「「いってらっしゃい!気をつけてね!」「」

お母さんの返事を聞くことなく、私達は外へ駆け出した。

「バス停」

走る事数分。

バス停に到着した。

そこには既にバスが停泊していた。

走るスピードを上げてバスへと突入する。

私達がバスに乗った直後にバスは扉を閉めた。

運転手さんに挨拶する余裕は今の私達にはなく、すぐにアリサちゃん達がいる座席に向かう。

「おはよう。なのは、光。大丈夫？」

アリサちゃんが私達を心配そうな表情で私達に尋ねる。

「う、うん。なんとか」

「・・・大丈夫だ。」

私達は肩で息をしながら答える。

近くにある椅子の手すりに捕まり、いつもの席になんとか座った。

はぁ、疲れた。

朝からこんなに疲れるなんて思わなかったよ。

私がつま息をついている間にも、バスは学校へと進んでいった。

くなのはサイド Endく



く学校 昼休み 屋上 光サイドく

今日も俺達はいつもとおり屋上でお弁当を食べている。

「ねえ、今日空いてる?」

「空いてるよ。」

「私も」

「……悪い。ちょっと用事があるから俺は無理だ。」

「なんですって!?!あんたは私の誘いよりも用事のほうが大切だって言うの!?!その用事ってなんなのよ!正直に答えなさい!」

なのはとすずかはOKを出したというのに、俺だけ無理。

この事実腹を立てたのか、アリサは俺の胸倉を掴み問い詰めてくる。

マジで怖いです……

アリサのものすごい気迫に、冷や汗が止まらない。

てか、正直に言えと言われても、無理なんだけど。

適当に誤魔化すか。

「ちょっと、行きたい場所があるんだよ。今日じゃなきゃダメなんだ。」

「それって、映画の試写会かなにかかな？」

「まあ、そんなところだ。」

すずかの質問に、一応うなづく。

「そういうことなら仕方がないわね。また今度誘うわ。」

「ああ。そうしてくれ。」

本当は違っただけだな。

《光お兄ちゃん。映画の試写会に行くなんて嘘だよな？》

突然、なのはから念話が送られてきた。

やっぱバレたか。

まあなのはには隠す必要ないし、正直に言うか。

《ああ、そうだよ。ちょっと対策局でやりたいことがあるんだ。帰りは遅くなると思う。》

《そっか。分かった。》

なのはとの念話を終了したため息をつく。5間目の始業5分前を告げる予鈴が鳴った。

俺達は急いで教室に向かった。

〈放課後 教室 光サイド〉

「さようなら！」

帰りの挨拶が終わった瞬間に、俺は教室から出て行った。

早く対策局に行ってカイルさんに相談しないと。

その前に、制服のままじゃまずいから、家に帰って着替えよう。

俺は全速力で家に向かった。

〈学校 教室 なのはサイド〉

光お兄ちゃんは帰りの挨拶が終わった瞬間に教室から出て行った。

それを見届けた後、すずかちゃんとアリサちゃんが私の方にやってきた。

「光君、ものすごい速さで行っちゃったね。」

「それだけ試写会が楽しみってことなんですよ。それより、早く行く。」

「うん！」

私達はアリサちゃんの家に向かった。

↳対策局 本局 光サイド↳

家に着き、準備を終えた俺は対策局本局に到着した。

転移ポートから出て周りを見てみるが、人は誰一人としていない。

ここにずっといても仕方が無いので、とりあえず真っ直ぐに道を進む。

しばらく歩くと、警備員らしき人に会った。

「ん？君、見掛けない顔だね。役職と名前、IDを教えてくださいませんか？」

言葉は優しいが表情は真剣なものだった。

「囑託魔導師の高町光です。IDは231456987hrvです。」

「今調べるからちょっと待ってくれ。」

そう言って警備員の人はウィンドウを展開した。

役職とIDをデータベースで検索しているんだろう。

「確かに、囑託魔導師、高町光と確認した。いや、悪かったね。で、ここになんの用だい？」

申し訳なさそうに警備員さんは言った。

「カイル・セルフィアさんに会いたいんです。ちょっと相談した事があります。」

「カイル・セルフィア執務官に？分かった。確か執務官は自室にいらっしゃるはずだから、そこまで案内してあげよう。」

「お願いします！」

俺は警備員さんお後に付いて行った。

歩き始めて数分。

一つの扉の前で警備員さんは足を止めた。

どうやらここがカイルさんの部屋らしい。

「さ、入っていいぞ。」

警備員さんの言葉に従い、目の前の部屋に入った。

「失礼します」

「私の部屋へようこそ、光さん」

カイルさんは部屋の奥にある椅子に座っていた。

目の前にある机には、たくさんの資料があった。

「まあ、立ち話もなんですから、そこに座ってください。今お茶を持ってくるので、待っていてください。」

右横に応接スペースとして、二つのソファとそれに挟まれた状態で机が置かれている場所があった。

カイルさんは、手前のソファに座るように言っていたので、俺は手前のソファに座った。

すぐにカイルさんは二つのコップを持って戻ってきた。

「どうぞ。」

そう言い、カイルさんは二つのうちの一つのコップを差し出してくれた。

俺は一言お礼を言って、コップを受け取り一口飲んでコップを机に置いた。

「それで、なんの御用でしょうか。」

「お願いしたい事があって来ました。」

「お願いしたい事？」

「俺は魔法に、プリューナクに出会って3年になるんですけど3年間一生懸命鍛錬してたんで、どんな相手だろうとそれなりに戦える

つていう自信があつたんです。でも、結果は惨敗。とても、悔しかったんです。」

カイルさんは、俺の話を静かに聞いてくれていた。

「だから俺、強くなりたいんです。フィレスに追い付いて、超えるくらいに。お願いします！俺を鍛えてください！」

俺は頭を下げた。

でも、還ってきた答えは――――

「すみませんが、それはできません。」

拒否だった。

「え？」

俺は目を見開いた。

「勘違いしないでください。確かに、私でも貴方を鍛えてあげることとはできます。ですが、私が使用しているのはインテリジェントデバイスです。ヴァリアブルデバイスではありません。貴方とは使用するデバイスの種類が違います。これはあくまでも推測ですが、貴方の最終目標は、フィレスさんと同じように、真姿解放をできるようにすることなのでしょう？」

これは驚いた。

まさか見抜かれていたなんて。

「……ええ。そのとおりです。」

「真姿解放を会得するには、真姿解放を会得しているヴァリアブルデバイスの所有者に鍛えてもらうしかない、と考えたんです。納得

していただけましたか？」

「はい。」

「幸い、局内にもヴァリアブルデバイスの所有者は存在します。真姿開放を会得している人も私の知り合いにいます。その人に連絡してくるので、少々お待ちください。」

そういうと、カイルさんは部屋から出て行った。

しばらくして、カイルさんは一人の男性を連れて戻ってきた。

先ほどカイルさんが座っていた場所に、男性は座った。カイルさんは男性の右側に座っている。

「お待たせしました。もうすでに事情は説明してありますので、後は彼の指示に従ってください。紹介しますね。彼は私の同期で、執務官の」

「ウラノス・イヴェリアだ。よろしく頼む。ウラノスと呼んでくれて構わない。」

銀髪のオールバックの男性が引き継いだ。

「高町光です。光と呼んでください。よろしくお願いしますウラノスさん。」

俺は軽く会釈した。

「さて、光君。君はヴァリアブルデバイスの事をどこまで理解して



いる？」

突然、ウラノスさんが質問してきた。

「ロストログアを核として使用し、そのロストログアの名前を解放する事によって真の姿と力を顕すインテリジェントデバイスより格上のデバイス。という事くらいです。」

俺の回答に納得したのか、数回軽く頷いた。

「正解だ。真姿開放については実戦形式の模擬戦で教えようと思う。この模擬戦は君の実力を知るためのものでもある。手加減せずに本気でかかってこい。」

「はい。わかりました。」

「ふむ。では、訓練場所に行くとするか。」

「はい。」

俺とウラノスさんは立ち上がり、扉へ向かった。

「光さん。」

部屋から出る直前、カイルさんに呼び止められた。

「はい？」

「頑張ってください。ウラノス。光さんの事、お願いしますね。」

「はい！頑張ります！」

「任せろ。必ず真姿開放を会得させてみせる。」

俺は笑顔で、ウラノスさんは真剣な眼差しで答え、共に部屋を出た。

## 修行？（後書き）

誤字・脱字などがありましたらお手数をおかけしますが、ご指摘をお願いします。

**修行？（前書き）**

やっと投稿できました。

相変わらず駄文ですが、よろしく願いします。

あとがきで、お知らせがあります。

修行？

訓練所に到着し、中に入るとそこには市街地が広がっていた。

どうやら、囑託魔導師試験の際に使用された空間シミュレーターが  
此処でも使われているらしい。

なんでも此処はヴァリアブルデバイスの所有者専用の訓練所だとか。  
念のために結界も常時展開しているとの事。

俺達は近くにあるビルの屋上に移動し、対峙した。

「始める前に、一つ確認しておきたい事がある。」

「なんでしよう？」

「真姿開放はそう簡単に会得できるものではない。下手をすれば死ぬ可能性もある。それでも、お前は真姿解放を会得したいのか？」

ウラノスさんは、真剣な眼差しで俺に問いかけた。

その眼差しに一瞬硬直してしまうが、すぐに正気に戻った。

「……当たり前です。俺はフィレスに追いつき、追い抜く事を目標にしています。まだスタート地点にすら立てていない現状でNOという選択肢を選ぶことはありません。どんな事をしてでも、真姿開放を会得するつもりです。もう、覚悟はできてます。」

俺も真剣な眼差しで答えると、ウラノスさんは少し表情を緩ませた。

「そうか。ならばその覚悟がどれほどのモノか見せてもらおうとしよう。……そろそろ始めるか？」

「はい！プリューナク！」

「タナトス！」

「Set Up！」

バリアジャケットを展開し、プリューナクを構える。

ウラノスさんは、緋色をベースにしたバリアジャケットを展開していた。

両肩から袖の部分まで翠のラインがあり、両手には手甲をしている。

ウラノスさんも自身のデバイスであるタナトスを構えた。

「どこからでもかかってこい。全力で、な。」

言われなくとも！

「グラビティランサー！ファイア！」

俺は4つのランサーを生成し、ウラノスさんへ放つ。

『ダガーモード』

「はっ！」

ウラノスさんはタナトスをダガーモードへ変形させ全てのランサーを斬り、止まることなく俺に襲い掛かる。

俺は飛行魔法で上空に避難する事によって回避。

ウラノスさんも俺の後を追いかけてくる。

「プリューナク！」

『ストライクムーヴ』

加速魔法でウラノスさんの背後に移動し、プリューナクをシューティングモードに変形させた。

「グラビティ・レイ！」

漆黒を砲撃をウラノスさんに放つ。

「タナトス、バスターモード！」

『バスターモード』

「カラミティ・ブラスト！」

緋色の砲撃がタナトスから放たれ、俺の漆黒の砲撃を相殺した。

「そんな・・・バカな！」

相手の技と自分の技を相殺させるのは、そう簡単にできることじゃない。

瞬時に相手が放った技の質量を見抜き、寸分の違いもなく同質量の技を放たなければならない。

それがどれほど難しい事か、俺でも理解できる。

俺はウラノスさんの技術の高さに、一瞬動きを止めてしまった。

それが命取りだった。

「戦場で動きを止めると、死ぬぞ？」

俺が動きを止めている間に、ウラノスさんは俺の目の前まで移動し、タナトスを俺の腹部に突きつけた。

そして、俺はゼロ距離での砲撃の直撃を受けた。

「うわあああああ！」

その衝撃で後方にあった2つのビルを突き破り、3つ目のビルに激突した。

すぐに自分の状態を確認する。

（バリアジャケットは、バリアが抜かれてもう使い物にならねえ・・・。後は、背中が少し痛い程度か。まだ、やれる！）



「プリューナク！セイバーモード！」

『セイバーモード』

プリューナクをセイバーモードに変形させ、ウラノスさんへ突っ込む。

ウラノスさんは、プロテクションで俺の攻撃を防いだ。

俺はプロテクションを破ろうと力を込めてみたが、びくともしなかった。

「バリアバースト」

ウラノスさんは呟いた瞬間、プロテクションが小さく爆発した。

その衝撃で、俺はわずかに後ろに後退した。

すぐにプリューナクを構える。

間もなくしてウラノスさんが、黒煙から抜け出した。

俺は上段からの一閃を繰り出すが、ウラノスさんは少し体をずらすことでそれを交わし、俺の懐へもぐりこんだ。

俺は既に刀を振るってしまっているため、無防備の状態だ。

ウラノスさんは、右手を俺の心臓部分に当てた。

「そっぴいえば、まだ真姿開放について教えてなかったな。」

そう言い、ウラノスさんは俺の心臓より少し下の場所を、魔力弾で打った。

「なに・・・を・・・」

言葉を最後まで言うことができず、俺は地上へ落ちていく。

だんだん意識が遠のいていくのが解った。

口頭では話をできないと考えたのか、ウラノスさんは念話で続きを話し始めた。

《バリアジャケットのバリアを抜いた状態で、心臓下部に存在する麻槻という部分に純魔力系攻撃を受ける事。これが、真姿開放を会得するための第一段階だ。》

消え行く意識の中で、ここまで聞き取った所で、俺は意識を失った。

## 修行？（後書き）

月光蝶・桜華というサイトの投稿小説で、フィレス視点の小説を書いています。少量しかありませんが、よかったら読んでください。

## 新たな力（前書き）

やっと投稿できました。感想やアドバイスがありましたらお願いします。

## 新たな力

『光さん・・・光さん』

聞き覚えのない女性の声が頭に直接響いてくる。

これは、念話なんだろうか？

女性の声に導かれるかのように、俺の意識が徐々に目覚めていく。

「・・・ん？ここ・・・は」

完全に意識を取り戻した俺の目の前には、果てしない草原が広がっていた。

「やっと私の声が届いたようですね。大丈夫ですか？」

周辺を見渡していると、一人の女性が俺の方に歩み寄りながら笑顔で話しかけてきた。

翡翠色のショートヘア、蒼い瞳に整った顔立ち。

黒いワンピースを着ているこの女性の手を借りて俺は立ち上がった。

女性の身長は俺より少し高く、女性の肩の部分までしか俺の身長はない。

必然的に見上げなければならぬこの現状はつまり、俺の首が痛く

なる事を示している。

その事を察してくれたのか、女性は俺の身長に合わせてしゃがんでくれた。

「初めまして、光さん。私の名前はイリスと言います。」

「初めましてイリスさん。ところで、ここはどこですか？そして何故貴女は俺の事を知っているんですか？」

「答える前に、まず敬語はやめてくれませんか？敬語で話しかけられるのは少し苦手なんですよ。」

理由を聞きたかったが、彼女・イリスの真剣な表情を見てやめておいた。

「解った」

俺の答えに満足したようで、彼女は再び笑顔になった。

「まず、一つ目の答え。ここは貴方の精神世界。いうなれば、貴方の心の中の世界です。」

「精神、世界？」

初めて聞く言葉に俺は首を傾げることしかできない。

「精神世界とは、個人の心を具現化した世界の事を指します。そして、二つ目の質問の答え。私が光さんの事を知っているのは、私がプリューナクの核となる存在だからです。」

「核？・・・と言う事はイリス、まさか君は、プリューナクの中核であるロストロギアなのか？」

「正確に言うと、ロストロギアの力を管理する存在です。そうですね、時空管理局や遺失物専門対策局の言葉で言うなら、管制人格と同類です。管制人格について解らない事があるのなら、跡でカイルさんかウラノスさんに聞いてください。」

「ああ、解った。」

イリスは小さく溜息をつき、先程以上に真剣な表情になった。

「さて、光さん。貴方がここに来たという事は、プリューナクの真の力を解放したいのですね？」

「ああ。」

「では、一つ質問をします。この答え次第で、真の力を解放できるかどうかが決まります。合否については私が判断します。」

「ああ。解った。」

「貴方は何のために力を求めているのですか？」

何のために、か。難しい質問だな。

「・・・あいつと話し合いをしたいんだ。」

「話し合いに力はいらないと思います。」

「イリスもこの世界にいたのなら見ていたんだろう？フィレスに襲われた時の事を」

「ええ。」

「あいつの瞳は真剣なものだった。だけど、俺にはあいつが無茶をしているような気がしたんだ。自分の想いを殺して、目的のために行動しているように感じたんだ。だから知りたいんだ。なんでそこまでして目的を果たそうとしているのかを、な。」

「ふむ・・・なるほど。合格です。」

そう言い、イリスの足下に赤褐色の魔法陣が出現した。

「私、イリスはマスターである高町光に真の姿を開放する事を認めます。真名や戦闘方法については後ほど貴方に流します。」

次の瞬間赤褐色の光が俺を包み込み、俺の意識が少しずつ遠のいていった。

「忘れないでください。貴方の中に、私が居ると居るといふ事を。」

イリスのこの言葉を最後に俺は完全に意識を失った。

（ウラノスサイド）

光君が気を失ってから数分が経過した。



真姿開放が成功したのなら、そろそろ目を覚ます頃か。

そう思い立ち上がると、光の体が赤褐色に包まれた。

（赤褐色だと！？あいつの魔力光は確か漆黒だったはず・・・）

俺が疑問に思っている赤褐色の光が弾け、光君が姿を現した。

先程までポロポロだったバリアジャケットは修復されたらしい。

だが、髪と瞳、魔力反応に先程との大きな違いを見つけた。

薄茶色の髪は翡翠に、水色だった瞳の色はさらに深い蒼に染まっていた。

そして魔力反応。

光君の魔力の内側に、別の魔力が溶け込んでいるようだ。

2種類の魔力が溶け合うという現象は、ユニゾンデバイスとのユニゾン以外起こりえない。

真姿開放を行ってこのような状態になったのだから、おそらくユニゾン機能のある管制人格でもいるのだろう。

最後に、武器は杖から赤褐色に蒼のラインが入った2丁の銃に変化してた。

まあ、詳しい事は後で本人から聞くとして、今はとりあえず集中するか。

俺は自分のデバイスであるタナトスを構えた。

「光サイド」

とても、暖かい。

胸の奥から力が湧き上がってくる。

閉じていた目を開けてみると、俺は赤褐色の魔力光に包まれていた。

『これより、必要な情報を貴方に流します。少しキツイかもしれませんが、頑張ってください。』

イリスの念話が届き、その直後にたくさんの情報が頭の中に入っていくのを感じた。

プリューナクの真名や形状、特殊能力などの情報を理解したと同時に、赤褐色の魔力光が弾けた。

両手には赤褐色に蒼のラインが入った2丁の銃が握られていた。

そして、目の前には、タナトスを構えたウラノスさんがいた。

「その様子だと、真姿開放は成功したようだな。」

ウラノスさんの安堵の声に、俺も笑顔で答える。

「ええ。インファイニット・ピストル無限銃。これがこの銃の名前です。」

「そうか。これで君は真姿解放を会得できた。君の言うスタート地点とやらに立てたわけだ。とりあずはおめでとうと言っておこう。」

「ありがとうございます！」

「ではこれから、真姿開放後の武器を使用した模擬戦を行う。準備はいいか？」

「はい！」

「よし。ならばこちらにも真姿開放するでしょう。不可視剣」  
インビジブル・シユヴェアト

ウラノスさんがナトスの真名を解放した瞬間、タナトスは発光しながら徐々に形を変えていった。

発光が終わると、ウラノスさんの手には、刀身がない状態の柄が握られていた。

「こちらの準備も完了した。さあ、どこからでも来い！」

「では、行きます！」

言うのと同時に、俺は走りながらウラノスさんに4発魔力弾を放った。

ウラノスさんはそれを全て避け、俺のほうにもものすごい速さで向かってきた。

俺は咄嗟にプロテクションを展開し、ウラノスさんとプロテクション

ンが衝突し魔力爆発を引き起こした。

〃〃本局、廊下〃

初日の訓練は無事終了した。

結果は俺の惨敗。

戦闘方法を知っていたとしても、経験の差が違いすぎるから、勝てるはずが無い。

ウラノスさんによると、これからも実戦形式での訓練をこれからも続けていくとの事。

これからも頑張らなくちゃ、と考えていると、転移ポート前に到着した。

後ろにいるウラノスさんに振り向く。

転移ポート前まで送ると言って着いて来てくれたんだ。

「今日はありがとうございました。これからもよろしくお願いします。」

「ああ。家に帰ったらゆっくり休めよ。じゃあ、また今度な。」

「解りました！」

俺はそう言い、転移ポートの中に入った。

家に帰るとすぐに風呂に入り、夜ご飯を食べてすぐに自分の部屋に向かった。

窓から見える眩いほどの星空が、まるで今の俺の心情を表現しているようで嬉しかった。

## 町に潜む危険（前書き）

テスト週間や検定などで忙しく、1ヶ月以上更新できませんでした。真に申し訳ありません。評価や感想・アドバイスなどをよろしくお願ひします

## 町に潜む危険

皆さんおはようございます。

高町光です。

俺が真姿解放を会得してから1週間が経過しました。

修行は順調に進んでいます。

相変わらず、ウラノスさんにボコボコにやられてるんですけどね。

さて、今日は用事があるので、いっともより少し早めになのはを起こそうと思ひ、なのはの部屋の前に行ったのですが……

「なのは、起きて！朝だよ！」

「今日は日曜日だし……もう少しお寝坊させて〜」

「ダメだつてば！早く起きてよ！」

「ん〜」

「うわあああああああ！」

……何やってんだあいつらは。

まあ、いいか。さっさと起こそう。

「おいなのは！早く起きろ〜！今日は約束の日だろ？〜ごはんできてるから、早く降りて来い！」

「ん〜。わかった〜」

本当にわかってんのかな？

俺がごはんを食べ終えた時に、なのははやっと降りてきた。

なのはがご飯を食べているうちに、俺は身支度を完了した。

玄関でなのはを待ち、準備が整ったので、目的地に向かった。

実は今日は、家のお父さん、高町士郎さんがコーチ兼オーナーをしているサッカーチーム、『翠屋JFC』の試合の日なのです。

それを、俺やなのは、すずかとアリサの皆で応援しようって約束してたんです。

「さて、観客席も埋まって来たようですし、そろそろ試合を始めますか。」

「ですな。」

両チームの監督の言葉で、ホイッスルが鳴り響き、試合が始まった。

先攻は翠屋JFCだ。

正確なパス回しで、確実にゴールに近付いている。



《これってこっちの世界のスポーツなんだよね？》

試合に見入っていると、ユーノから念話が届いた。

《そつだよ。サッカーって言うんだ》

翠屋JFCがゴール前に到着し、シュート。

ボールはゴールのネットを揺らした。

これで翠屋JFCが1点取った。

喜びの声をあげながら、ユーノにサッカーの説明を続ける。

《足でボールを蹴って、相手のゴールにボールを入れたら1点獲得。手を使っていいのはゴールの前にいる一人だけなんだ。》

《へえ〜。おもしろそうだね》

《だろ？》

翠屋JFCが先制したのでボールは相手チームにわたり、ゴール前まで攻められシュートを打たれる。

得点を入れられるかと思ったが、ゴールキーパーがボールに飛びついて防いだ。

キーパーのファインプレーによって、観客席から歓声が沸く。

今度は、俺がユーノに質問してみた。

《ユーノの世界には、こういうスポーツとかあるのか?》

《あるよ。僕は研究とか発掘であんまりやってなかったけどね》

《そっか。なら、今度一緒にやろうぜ。きっと楽しいだろうから》

《うん!》

ユーノとの会話を終え、再び試合を観戦した。

結果から言うと、1・0で翠屋JFCの勝ち。

ご褒美として、翠屋でご飯を食べることになった。

（翠屋）

俺達も中でご飯を食べようと思ったんだけど、店員オーバーって事で外に場所を作ることにした。

「改めてみるとこのフェレット、普通のフェレットとは少し違うんじゃない?」

「そうだよねえ。動物病院の院長先生も、変わった子だねって言うてたし。」

うっ!!痛いところついてくるな、二人とも。

「ま、まあ、ちょっと違うフェレットってことでいいんじゃないか

な！？ほら、ユーノお手。」

ユーノがお手をすると、アリサとすずかが「えら〜い！」「す〜いね〜！」と言いながらユーノを撫でてる。

ユーノがなんか可哀想になってきた。

誤っておこづ。

《ごめんな、ユーノ》

《だ、大丈夫・・・》

アリサとすずかの気が済んだのか、ユーノは数分後に解放された。

そしてしばらく談笑していると、翠屋JFCのメンバーが店から出てきた。

どうやら解散らしい。

「あっちも解散するみたいだし、こっちも解散する？」

アリサの言葉に俺達は頷く。

「午後から楽しみだな〜！」

すずかがにこやかに言った。

「そっか。午後から用事があるんだっけ？」

「私はお姉ちゃんと出かけるんだ。」

「私はパパとお買い物！」

「そっか。月曜日に話聞かせてくれ。」

「「うん！」」

「お？そっちも解散か？」

俺達が帰り支度をしていると、店のエプロンを着た父さんがやってきた。

「あ、お父さん！」

「今日はお招きいただき、ありがとうございました  
「！」

「試合かっこよかったです！」

すずかとアリサがにこやかに言った。

「ありがとな、二人とも！応援してくれて。帰るんなら、送って  
いこうか？」

「いえ。迎えを呼びますので。」

「同じくです！」

「なのはと光はどうする？」

俺達のほうを見ながら、父さんは言った。

「ん〜、お家でのんびりしようかな？」

「なら、俺もそうするよ。」

「父さんも、お風呂入ってからお仕事再開だ。一緒に帰るか？」

「うん！」

あ、でも後片付けしないと。

「父さん、その前にテーブルとか椅子を片付けないと。」

俺の言葉に、父さんは思い出したかのように手を打って言った。

「お、そうだな。ならなのは、光。手伝ってくれるか？」

「わかった！」

俺達は協力して椅子やテーブルを片付けた。

ユ一ノをなのはの肩に乗せて、さあ家に帰ろう！と家の方向に歩き始めた時、反対側から翠屋JFCのユニフォームを着た選手が歩いてきた。確か、ゴールキーパーの人だったと思う。

その人とすれ違った瞬間、僅かにジュエルシードの反応を感じた。

(っ!!)

俺はその気配に歩みを止めた。

《光お兄ちゃん!》

《光!》

どうやら、なのはやユーノもジュエルシードの反応を感じたようだ。俺と同じく、なのはも歩みを止めている。

《ああ。解ってる。今ほんの一瞬だが、ジュエルシードの反応を感じた。今は消えているがな》

《どうする?》

ユーノの声に少し思案し、一つの答えを導き出した。

《尾行して、様子を見よう。そしてジュエルシードを視認したらユーノは結界を展開。俺となのは素早く封印だ。》

《《了解!》》

「どうしたんだ二人とも?いきなり止まって。」

「な、なんでもないよお父さん!」

なのは、どもるな。

父さんに怪しまれるだろうが。

「そうか？ならいいさ。さ、お家に帰るぞ。」

そう言い、父さんは一人で歩き始めた。

「そのことなんだけどさ、父さん。」

「ん？どうした？」

俺の声に父さんは振り向いて聞いた。

「俺達、やっぱり外で遊んでくる事にするよ！こんなに晴れてるのに、家の中にいるなんてもったいないからさ！」

父さんは納得したように数回頷いた。

「そうかそうか。わかった。車には気をつけるんだぞ？」

「はい！」

父さんの言葉に俺達は元気に答え、ゴールキーパーの人の後を追いかけた。

後ろのほうで父さんがため息をついた気がしたが、無視しよう。

俺達は自販機の陰に隠れてゴールキーパーの人の様子を観察している。

なんかマネージャーらしき人と歩いてるし。

通行人が、何やってんだこいつらの視線で見ってくるが、気にしない！

気にしないっいたら気にしない！

通行人の視線に耐えられなくなって涙目になってるけど、知らない！

《光お兄ちゃん！周りの人の視線が！視線が痛いよ〜！》

《気にしたら負けだ！目の前の事だけに集中するんだ！》

《う、うん！》

俺達は改めて目の前の二人の行動を観察した。

注意深く観察していると、ゴールキーパーの人がポケットからなにかを取り出した。

あれは・・・ジュエルシード！？

《ユーノ、なのは！》

《《うん！》》

ジュエルシードを視認した直後、俺達は自販機の陰から飛び出した。

ユーノは人間の姿に戻っていた。

「封鎖結界、展開！」



ユーノが結界を展開するのを視界の端で確認する。

世界の色がセピア色に塗り替えられていく。

結界を展開し終えた後、俺となのはは自信の相棒であるデバイスを掲げる。

「プリユーナク！」

「レイジングハート！」

「「セットアップ！」」

バリアジャケットを装着し、杖を構える。

「一気に決めるぞ！」

「うん！レイジングハート！」

《Sealing Mode》

レイジングハートが封印形態に変形し、先端部分に魔力が蓄積されていく。

「リリカル！マジカル！ジュエルシード封印！」

《Sealing》

レイジングハートから桃色の砲撃が放たれ、ジュエルシードに直撃。

普段どおりならばこの後ジュエルシードにシリアルが浮かび上がり、レイジングハートによって保管される。

そう、普段どおりならば。

封印を確信した俺の目の前に広がっていた光景は、予想とは違っていた。

「なんだと!?!」

「そんな!?!」

「防がれた!?!」

あの二人を守るように、ドーム型の障壁を展開していたんだ。

予想外の光景に啞然とする俺達。

俺達が動けないでいると、ジュエルシードが突然発光した。

あまりの眩しさに、俺達は目を覆った。

再び目を開けるとそこには、大樹があった。

根本の部分にはウネウネと無数の根らしきものが動いている。

「くそっ!! 発動しちゃった!」

「どうしよう、光お兄ちゃん!」

「とりあえず空に上がって、現状を把握するんだ！」

「分かった！」

なのはとユーノは飛行魔法を発動し、空へ飛び立った。

俺も空に上がろうと飛行魔法を発動し、地面を蹴り上げた。

だけど、俺は空に上がることができなかった。

無数の根が俺に襲い掛かり、両手足を縛られたからだ。

(ちくしょう！抜け出せない！)

この状況を打破するために四苦八苦していると、桃色の砲撃が飛来し、根を消滅させた。

桃色の魔力色を持っているのは一人しか居ない。

そう、なのはだ。

「光お兄ちゃん大丈夫！？」

「大丈夫だ！ありがとうなのは！」

「うん！」

なのはのおかげで俺は空に上がることができた。

上空から見た海鳴市は酷かった。

市内全域に大樹が生え、道路は蜘蛛の巣状の輝が広がり、陥没している。

（くそっ！被害を最小限に抑えるために行動した結果がこれかよ！  
・だけでも、後悔している時間はない。今は一刻も早くジュエルシードを封印しないと、被害がさらに拡大する可能性がある。まずはあの根をなんとかしないとな・・・）

「プリューナク！シューティングモード！」

《シューティングモード》

またも襲い掛かる無数の根に、プリューナクの先端を向ける。

「グラビティ・レイ！」

漆黒の砲撃が根に直撃し、白煙が発生した。

「やったか？」

白煙が消えた先にある光景に衝撃を受けた。

本気で砲撃を放ったが、それでも全てを消滅させることはできなかった。

しかも厄介な事に、根はものすごい速さで再生した。

本気で放った砲撃が通用しないととなると、もう残された手段はアレしかない。

漆黒の魔方阵を足元に展開し、プリューナクの真の姿を解放する。

「汝の真の姿を此処に顕現せよ!。インフィニット・ビストレ無限銃!」

プリューナクの真名を解放し、真の力を引き出す。

そして薄茶色の髪は翡翠に、水色だった瞳の色はさらに深い蒼に変化した。

「行くぞ、イリス!」

『了解!』

2丁の拳銃を構え、銃口に魔力を収集する。

『座標入力、固定完了!』

「打ち抜け!セレナディバスター!」

イリスの合図を聞き、引き金を引いた。

赤褐色の砲撃が2丁の拳銃から放たれ、根を一掃した。

俺が根を一掃した直後に、ジュエルシードの反応がある場所に桃色の魔力が直撃し、ジュエルシードが封印された。ユーノとなのはがうまくやってくれたようだな。

町中に生えていた大樹も消えた。

これで封印作業は完了だ。

なのはとユーノに合流した後、変貌した容姿について質問攻めにされた。

容姿が変化したことに關してはまた今度話すことにして、とりあえず俺達は帰路についた。

しかしその雰囲気は暗く、沈黙が支配していた。

（ジュエルシードの発動の現場に居ながら、封印できずにジュエルシードを発動させ、町に多大な被害をだしてしまった。）

尾行なんてせずに、直接声を掛けてジュエルシードを回収することもできたんじゃないか？

封印魔法が防がれた時に諦めずに追撃して障壁を破り、発動する前に封印できたんじゃないか？

いまさら後悔しても遅いが、もっと他にできることがあったのではないかと考えてしまう。

時刻は夕方。

綺麗な夕日が顔を覗かせるなか、俺達は重く暗い気持ちを抱えて家に戻った。

## 再会 そして始まり（前書き）

やっと投稿できました。感想やアドバイスをお願いします

## 再会 そして始まり

皆さんおはようございます。

突然ですが、今俺はリビングにいます。

今日もまた予定がありまして、今出かける準備をしている所です。

今回出かけるのは、俺となのはと恭兄とユーノの4人。

俺と恭兄はもう準備はできてるんで、後はなのはの準備ができるのを待つだけです。

今日の予定は、月村家に遊びに行く事。

さすがが俺となのはとアリサの4人でお茶会をしようって誘ってくれたんだ。

恭兄は、俺達の付き添いなんて言うてるけど、本当はさすがのお姉さんである忍さんに会いに行くため。

詳しい事は後で説明するでしょう。

「お〜い光！なのはの準備ができたみたいだから、出発するぞ！」

「解った！今行く！」

俺は荷物を持って急いで玄関に向かった。



（月村家）

場所は移り月村家。

バスに揺られる事数十分。

月村家に到着した。

なのはが、「私、インターホン鳴らしたい！」とこねたのでなのはにインターホンを押させることに。

インターホンを鳴らして数秒後。

メイド服を着た一人の女性が出てきた。

この人は月村家のメイド長のノエルさん。

簡単に言うと、何でも出来る完璧人間だ。

「なのはお嬢様、光様、恭也様。ようこそおいでくださいました。」

ノエルさんは見惚れるほど綺麗なお辞儀をした。

何度見てもすごいなあ。

「お招きに預かったよ」

「「こんにちわ」」

「どうぞ中にお入りください。」

ノエルさんの声に従い、俺達は月村家の中に入った。

ノエルさんの案内ですずかとアリサがいる場所に到着。

「なのは、光！遅かったじゃない！」

「なのはちゃん、光君！いらっしやい！」

「おはよう二人」

すずかやアリサが座っているテーブルに向かいながら二人に挨拶する。

「恭也！」

俺達が椅子に座った瞬間、扉の方向から女性の声がした。

扉の方を見てみると、そこにはすずかのお姉さんである忍さんがいた。

忍さんと恭兄は高校の頃同級生で、今では恋人同士だ。

なんか見てるほうが嫌になるほどの桃色空間展開するんだ。

で、恭兄は忍さんによって2回に連行された。

その様子を俺達は見ていたわけだが……

忍さん性格変わったよね。

最初は内気で大人しかったのに、今はものすごく活発だ。

「忍さんって性格変わったよね。」

なのはも俺と同じように感じたらしく、しみじみと言った。

「あ、そうだユーノ君を出してあげないと！」

なんか忘れてると思ったら、ユーノの事忘れてた！

とりあえず、急いでバックからユーノを取り出すことに。

バックからユーノを取り出してみると、目を回していた。

ちょっと！この状況どうすりゃあいいの！？

「光君落ち着いて！こういう場合は濡れタオルで冷やせばいいんだよ」  
「！」

すずかの提案で、タオルを冷水で濡らしてからそのタオルの上にユーノを乗せる。

しばらくすると、ユーノは元気になった。

「よかった〜！ユーノ君元気になって！」

「まったく！心配させないでよー！」

「きゅ……」

なのは胸に手を当てて安堵し、アリサは腰に手を当てて怒ってる。

ユーノはしょんぼりとしていた。

しかもユーノから暗いオーラが漂ってる。

「まあまあアリサちゃん、元気になったんだからいいじゃない？と  
ころでさ、こんなにいい天気なんだから、外でお茶しようよ！」

『確かに、いい天気なんだから外に出ないと損よね。よし、外に出  
るわよ！光！適当にテーブル持ってきて！私達は椅子を運ぶから！』

えっ!？

なんで俺なのさ!？

大人の人に頼んで持って来てもらえばいいじゃん！

「ごちゃごちゃ言っていないでさっさと持ってきてなさい！」

アリサに背中を押される形で屋敷に戻った俺は、頑張って一人でテ  
ーブルを運んだ。

え？子供一人でテーブルを運べるわけないって？

それができるんだよ。俺の場合は。

俺のレアスキルである魔力変換資質「重力」を使ってテーブルの質量を軽くしたのさ。

本当に一人で持つてくるとは思っていなかったみたいで、アリサは驚いてた。

「これから荷物運ぶ時、光君に手伝ってもらおうかな？」

さすががなんか物騒な事言ってるけど、無視しておこう。

とりあえず椅子を並べて、屋敷の中にいた猫を全て中庭に移した。

ユーノはテーブルの上に、猫達は俺達の足元にいる。

「それにしても、すずかの家って相変わらずの猫天国よね〜！」

「まあ、雇い主が決まってる、もうすぐお別れしなくちゃいけない子もいるんだけどね。」

「寂しくなるな・・・」

「うん。でも、猫達がまっすぐ育ってくれるのは嬉しいよ。」

しみりとした空気が流れ、なんとか場を明るくしようと思ってる色々考えしていると・・・

キーン！

ジュエルシードの反応を察知した。

(ジュエルシードの反応!?こんな所でかよ!?)

《光お兄ちゃん!》

《光!》

《解ってる!》

この状況でどうやって反応場所に行く!? いったいどうすれば……!

頭をフル回転させてこの現状を打破する方法考える。

考えている最中にふとユーノが視界に入った。

そして、1つの案を思いついた。

《ユーノ! 1つ提案があるんだけど、いいか?》

《いいよ。どんな案?》

《それはな……. . . . . というわけだ。》

《うん! 解った!》

俺はユーノに案を伝え、ユーノはそれを実行した。

まあ、ユーノに先に反応場所に向かってもらって、それを俺達が追いかけるってだけなんだけどね。

「あれ？ユーノどこ行った？」

「そつえばいないね。」

なのにも念話で伝え、話をあわせるように伝えておいた。

俺達は席を立ち、ユーノを探す振りをする。

「私達も探すの手伝おうか？」

「いや、いいよ。俺達だけで探すから」

「アリサちゃん達はここで待っててよ！すぐ戻るから！」

アリサ達の返事を聞くことなく、俺達は森の中に入って行った。

ジュエルシードの反応場所に向かっていくと、空間の色がモノクロに変化した。

どうやらユーノが結界を展開したらしい。

「光！なのは！」

約1分ほど走り、ユーノと無事に合流した。

ユーノをなのはの肩に寄せ、繁忙場所に向かうとした瞬間……

青白い光が反応場所から放出された。

青白い光が収まると、そこには……

「ニヤアアアア！」

巨大な猫がいた。

あの猫には見覚えがある。

確か、すずかお家にいたアインって名前の猫だ。

なんであんな巨大化してるんだよ。

「ねえ、ユーノ君……。なんでアインが巨大化してるの？」

「多分、あの猫の大きくなりたかって願いが正しく叶えられたんじゃないかと……。」

「そ、そっか。」

ジュエルシードってそんな願いも叶えるんだな。

「とりあえず、封印するか。」

「そうだね。あのままだとすずかちゃん可哀想だし、襲ってくる様子も無いからさっさとおわらせちゃおう。レイジンググハート！」

「プリューナク！」

「Set Up！」

バリアジャケットを纏い、デバイスを構える。



今回は、なのはだけで十分だろう。

相手は巨大化したといっても猫だ。

ただ鳴きながらそこらへん歩いてるだけだから、すぐに封印できるはずだ。

というわけで、俺は上空で見物する。

一応ユーノに注意しとくか。

《ユーノは念のために適当な場所に隠れとけよ》

《解ってる》

ならいいんだけどな。

さて、なのはは何してんのかな？

「レイジングハート！シーリングモード！」

レイジングハートを封印形態に変形させたところか。

「レイジングハート！っ！？」

なのはがレイジングハートを構えた瞬間、背後から大量の金色の魔力弾が飛来し、爆音を響かせる。

「なのは！？くそっ！！」

「行かせねえよ！フレイムシューター！」

俺はなのはを助けに行こうとしたが、ファイレスが割って入り、フレイムシューターを放つ。

「プリューナク！」

《プロテクション》

なんとかプロテクションで防ぐ事はできたが、なのはを助けに行くチャンス逃してしまった。

ファイレスがここに現れたという事は、なのはの方にはフェイトがいるはずだ。

なのはが魔法の力を手に入れてからまだほんの数週間しか経過していない。

魔法を手に入れた直後の模擬戦であそこまで闘えたのだから大丈夫だとは思うけど、万が一という事もある。

ファイレスとの戦闘を早く終わらせて、なのはの援護に向かった方がいいかもな。

そのためには最初から本気でやらないとな。

俺は決意を込め、プリューナクを強く握った。

「なのはサイド」

私は、ジュエルシードを封印しようとした瞬間、背後からの魔力弾による襲撃を受けた。

なんとかプロテクションで防ぐ事ができた。

魔力弾を防いだ事により発生した黒煙で、視界が覆われた。

相手がどこから攻撃してくるかわからないので、目を閉じて集中し、気配を探る。

突然、背後から空気を切る音が聞こえた。

考えるよりも早く体が反応し、レイジングハートを背後に振り下ろした。

すると、刃を重ね合わせたような金属音が響いた。

「っ！？」

攻撃が失敗したと判断したのか、すぐに重みがなくなった。

ゆっくりと振り返ると、近くの木の子に漆黒のマントと黒衣を纏った女の子がいた。

きっと私と同じくらいの歳で、髪と瞳が綺麗な子。

なんとなく、フィレス君に似てるかもしれない。

「貴女が高町なのはですね？」

凜とした、大人びた声。でも、そこに表情と呼べるものはなかった。まるで、感情を持たない人形のようなだった。

「はい、そうですが・・・」

いきなりの質問に、思わずレイジングハートを降ろしてしまう。

「貴女の事は、フィレス兄さんから聞いています。」

え？今、フィレス兄さんって

「じゃあ、貴女は」

「始めまして、ですね。私はフェイト・テストロッサ。フィレス・テストロッサの妹です」

そっか、フィレス君の妹さんか。通りで似てるわけだね。

「ジュエルシードを探している理由は兄さんから聞いてますよね？」

「聞いています」

「なら、話は早いです。そのジュエルシード、私がいただいていきます！」

「それだけは譲れないよ！」

あれはユーノ君の探し物だ！

私達の一つも欠かす事なく集めなくちゃいけないんだ！

「ならば、力づくで奪うまでです！バルディツシュ！」

《ハーケンフォーム》

「レイジングハート！」

《シューティングモード》

「では、行きます！」

「負けない！」

（光サイド）

涼しい風が俺達の

「ユーノ・スクライアに伝言を頼んだはずだが、伝わっていないのか？」

「いや、伝わったよ。俺はお前の伝言を聞いた上でこの場に居るんだ。」

次の瞬間、フィレスの視線が強まった。

「手加減はしないと云った筈だが？」

「ああ。お前と本気で闘うために力も身につけた。以前の俺と同じとは思っなよ?」

「なら、見せてみるよ!お前が身に付けた力って奴を!」

「いいぜ!見せてやるよ!無限銃!」  
インファイニット・ピストル

プリューナクが発光し、その形を徐々に変えていく。

俺も赤褐色の魔力に包まれる。

数瞬後には、イリスとユニゾンした状態になっていた。

「ほう。わずか数週間で真姿解放を会得したか。確かに、これなら本気で闘えそうだな。(外見と魔力の質が変化している。ユニゾン機能を持つ管制人格がいるということか。いつも以上に気を引き締めたほうがよさそうだな) フラッシュ・シュヴェアト 炎剣!」

ルシファリウスも、燃え盛る剣に姿を変えた。

「では、予告どおり本気で行くぞ!」

「来い!」

今、二つの戦いの火蓋が切って落とされた。

## 戦いの始まり（前書き）

遅くなつてしまい、すいません。書き方を変えてみました。評価や感想・アドバイスをお願いします。

## 戦いの始まり

月村家の敷地内の森林。

その上空で、赤褐色と紫が何度も交差していた。

光とフィレスである。

「スパイラルショット！」

「獄炎一閃！」

光が魔力弾を放ち、フィレスが斬撃で叩き斬る。

先程からこのやり取りが繰り返されていた。

「はあっ！」

繰り返されるやり取りに痺れを切らしたのか、フィレスは足に炎を纏い加速しながら光に肉薄する。

剣を振り上げた状態で光の眼前に到達したフィレスは、加速した勢いを利用し、斬りかかる！

「くっ！！！」

光は、腕をクロスさせ2丁の銃で防ぐがフィレスの斬撃が予想外に重く、大した抵抗も出来ずに地面に叩きつけられてしまう。



粉塵が舞い、光の姿は確認できない。

だがフィレスは注意を怠ることなく、周辺を警戒する。

あらゆる可能性を考慮し、何が起きてもすぐに反応できるように身構える。

しかし次の瞬間、フィレスは目を見開き体を硬直させた。

粉塵が舞っている場所の近くにある1本の木が突然浮上し、襲い掛かってきたのだ。

すぐに硬直が解けたものの、すでに木は目の前に迫っていた。

（回避は不可能。ならば！）

左の拳に炎を纏い、拳を引く。

（打ち砕くのみ！）

全力で木を殴る。

拳を伝って炎は木全体に広がり、一瞬で灰となった。

（高町光は！？）

すぐに粉塵が舞っていた場所に目を向けるがそこに光の姿はなかった。

周りを見渡しても、光の姿を確認できず、また気配を探ってみたが光の気配は感じられなかった。

「ッ!！」

突然悪寒が走り、振り返るとそこには

「はあっ!！」

銃口から魔力刀を展開させた銃を振り上げた光がいた。

「くっ!！」

振り落とされた銃を防ぐため、フィレスは横薙ぎに剣を振るった。

互いの武器は衝突し、金属音を響かせながら魔力を散らす。

衝突から逃れた魔力は大気中に広がり、やがて二人を飲み込んだ。

一方、光とフィレスが戦闘を繰り広げている場所から数百メートル離れた場所で、なのはとフェイトは闘っていた。

「フォトンランサー!！」

「デイベインシューター!！」

「「ファイア! / シュート!！」!！」

お互いの魔力弾が同時に放たれ、襲い掛かる。

なのはもフェイトも、襲い来る魔力弾を避けながら前へと進んでいく。

「バルディッシュ！」

『サイズフォーム』

フェイトは、バルディッシュをサイズフォームに変形させ、魔力刀を展開し、振り上げる。

「レイジングハート！」

『プロテクション』

なのはは、レイジングハートを構え、プロテクションを展開し、フェイトの一撃を防ぐ。

「フェイトちゃん達は、お母さんのためにジュエルシードを集めているんだよね！なんでお母さんはジュエルシードを必要としているの！？」

「母さんがなんでジュエルシードを必要としているのかは私達は知らない。知る必要がないんだ。私達にとって大切なのは、母さんがジュエルシードを欲しがっているという事実だけなんだから。」

そう言いながら、フェイトはふと母の言葉を思い出す。

『フェイト。フィレスと協力して、ジュエルシードを集めてきて。なるべく早くお願いね』

要件だけ言っと、母さんはもう用はないとばかりに早足で出て行った。

最近、母さんは笑わなくなった。

毎日のように研究室に籠ってる状態だ。

母さんに笑って欲しい。

その願いを叶えるためにどうすればいいかを考えていたときに舞い込んできたこの任務。

チャンスだと思った。

私はこの時、母さんの笑顔を取り戻してみせると誓ったんだ！

早く全てのジュエルシードを集めて、母さんに届けなくちゃならない。

こんな所で、立ち止まっている訳には、いかないんだ！！

フェイトは、自分の思いを込め、目の前の少女　なのは　を睨み付ける。

なのはも、フェイトの思いに答えるように真剣な瞳で応える。

見詰め合うこと数瞬。

二人は同時に後方へと距離を取った。

そして、フェイトはフォトンランサーを。

なのははデイベインシューターをそれぞれ展開。

フェイトは6つ。

なのはは4つ。

「ファイア！」

「シュート！」

禁と桃色の魔力弾が飛び交った。

フェイトはサイズフォームを展開し、魔力弾を切り裂きながら。

また、なのはは縦横無尽に動き、魔力弾を避けながら。

先程と同じように前進していく。

フェイトはなのはを目前に捕らえ、バルディッシュの柄を強く握り締める。

なのははそのまま、こちらに前進している。

（次で終わらせるー！）

次の一撃で決着を着ける覚悟を決め、バルディッシュを振り上げる。

「はあっ！」

気合いの一声と共に振り落とされた一撃は、なのはの右肩へと向かっていく。

（勝った！）

フェイトは勝利を確信し、笑みを浮かべた。

しかし次の瞬間、彼女は驚愕した。

刃先が右肩を切り裂く直前になのはの姿が掻き消え、全力で振り下ろした一撃が空を斬ったからだ。

すぐにフェイトは冷静な判断力を取り戻し、今起こった事を分析し、そして理解した。

自分の一撃が当たる直前に、加速魔法を使って避けたのだと。

（残る問題は、どこにいるのかって事だけだ）

そう思いフェイトはなのはの姿を探し、周りのを見渡す。

そして、フェイトは見つけた。

自分の遙か後方で、レイジングハートをシューティングモードに変更し、砲撃を撃つ体制に入っているなのはを。

レイジングハートの突先には、もう既に魔力が収集されている。

次になのは、何をやるかは、解りきった事だ。

フェイトは、回避行動に入ろうとしたが、既に遅かった。

もう目の前には、桃色の砲撃が迫っていたからだ。

フェイトの姿は、桃色の砲撃に呑み込まれていった。

桃色の砲撃は、フェイトを呑み込んだ後も突き進み、やがて空の彼方へと消えていった。

場所は、フィレスと光の戦闘地点に戻る。

此処では今、2つの黒煙が立ち上っていた。

二人が衝突した結果、魔力爆発が引き起こされ、ソレによって二人とも吹き飛ばされてしまったのだ。

爆発地点から最も近い場所に立ち上っている黒煙の近くに、フィレスがいた。

爆発が起きた時フィレスが下で、光が上にいた状態だったため、フィレスは爆発の勢いで地面に叩きつけられたようだ。

地面に減り込むように仰向けに倒れている。

どうやら気絶しているようだ。

ずっとそのままかと思われたが、やがてフィレスは意識を取り戻した。

「……うう……まさか魔力爆発が起きるとは……」

魔力爆発は、魔力を過剰に込めることにより発生する。

昔はよく魔力爆発を引き起こしていたが、その後の特訓で押さえることができていた。

もう魔力爆発を引き起こすことはないだろうと自信を持っていた。

しかし、魔力爆発は起きてしまった。

先程の光の攻撃を防ぐ際、焦って大量の魔力を込めてしまったのが原因だろう。

（俺もまだまだな）

ため息をつきながらそう思った。

先程ので大量の魔力を消費してしまったが、問題ない。

全てのヴァリアブルデバイスには、1つの共通した能力がある。

それは『魔力素収集』

大気中に存在する魔力素を吸収し、使用者のリンカーコアへと送る



という仕組みである。

回復できる亜力量は、吸収した魔力素の濃度によって異なるが、回復できるだけマシだろう。

（さて……。アレを調べてみるか）

ある程度魔力を回復したフィレスは、探索魔法を展開。

無数のサーチャーを生成し、四方へ放つ。

フィレスには、一つ気になることがあった。

それは、先程の戦闘で光の居場所を探すために気配を探った時の事だ。

光の気配を探すことに集中していたため除外していたが、空間の歪みを感じたのだ。

それが妙に気になって仕方がない。

だから、その正体を確かめるために探索魔法を展開したのだ。

（見つけた！）

意識を集中させてから数十秒後。

フィレスは、空間の歪みを見つけた。

空間の歪みをじっくりと調べていく。

その結果、リンカーコアの反応を感知した。

フィレスは魔導師が姿を隠している理由を考えたが、いくら頭を働かせても解らない。

（ま、考えていても仕方がないな。まずは、高町光を探すか）

これからの行動を心中で決め、実行しようとしたその時！

「見つけたぞ！フィレス！」

近くの茂みから光が姿を現した。

魔力刀を銃口に展開させた2丁の銃を構えている。

（探す手間が省けたな）

そう思い、フィレスもまた剣を構える。

それを合図に、二人は同時に接近。

光は魔力刀を展開した銃口部分を交差させた状態で、またフィレスは、剣を上段から振り下ろした状態でお互いが衝突した。

『高町光。一つ聞きたいことがある』

『なんだ？今は戦闘中だぞ？』

フィレスは念話を光に送り、光は怪訝な声で答える。

『上空に二つの空間の歪みを発見した。どうやら魔導師のようなのだが、俺達の戦いを監視しているらしいんだ。何故だと思う？』

（空間の歪み、だと？）

光はフィレスの言葉を信じられず、眉を潜める。

真偽を確かめるため、光は気配を探る。

するとフィレスの言うとおり、二つの歪みと、魔力反応を感じた。

そして、光は思考する。

（俺達の戦いを監視しているって事は、俺達が狙いか。俺達が狙われる理由って言うたら、1つしかないし、監視している組織もあそこ以外考えられない。）

光は、自分なりの考えをまとめていく。

そして、最終的に一つの答えに辿り着いた。

時間にして、ほんの数十秒でだ。

今度は光がフィレスへ念話を送る。

『恐らく、俺達を逮捕するためだろう。この戦いに決着がついたと同時に攻め、纏めて逮捕しようって考えたと思う。俺達が狙われている理由は、解ってるよな？』

『ああ』

『で？どうするよ？このまま戦いを続けるか、それとも・・・隠れる奴を引つ張り出して倒すか。この二つしかないぜ？俺はどちらでも構わない。』

そう言い、光はフィレスにこれからの行動を選択させる。

フィレスはしばらく思索し、光に答えを伝える。

『・・・一時休戦、だな』

『了解！そんじゃあ、始めるか』

光の言葉を合図に、二人同時に距離を取る。

そして、光とフィレスはそれぞれの武器を上空へと向ける。

「豪炎一閃！」

「セレナデイ・バスター！」

フィレスは斬撃を、光は砲撃を上空に放つ。

通常ならば突き抜けるはずが、ある場所に到達したと同時にその進行を止めていた。

まるで、壁のような何かに遮られているかのように。

やがてその場所の空間が歪み、二人の青年が障壁を張った状態で姿を現した。

そして、障壁の出力を上げ、砲撃と斬撃を打ち消した。

「やはり、気付かれていたか。」

「あれだけの数のサーチャーを飛ばしたら、そりゃ気付くって。」

「さて、こちらも始めるか」

「ああ」

男達は、不敵な笑みを浮かべていた。

今、新たな戦いが始まろうとしている。

## ブラッディソルジャー（前書き）

遅れて申し訳ありません！またまた駄文ですが、よかったら読んでください。感想やアドバイスを、評価などをお待ちしております。

## ブラッディソルジャー

二人の男達は、不敵な笑みを浮かべたまま、地上に降り立った。

ここで始めて男達の外見を観察する事ができた。

1人は、蒼のポニーテールで、黒い袴を身に纏っている。

墓もそうだが腰に挿している刀が、戦国時代の侍の連想させた。

もう一人は、紅のロングヘアで、上下黒のシャツとズボン姿で、シャツの上に赤いパーカーを着ている。

右手には、深紅の宝石を持つ杖が握られていた。

ヴァリアブルデバイスの特徴が見られない事から、インテリジェントデバイスだと思われる。

そして二人に共通して言えることは、黒いヴァイザーと外套を着用している事だった。

「そういえば、自己紹介がまだだったな。俺の名前はリュウガ・マツモト。時空管理局上層部直属部隊「ブラッディ・ソルジャー」の一人だ。そして、こいつが」

「同じく時空管理局上層部直属部隊「ブラッディ・ソルジャー」が一人、クラウスだ。我等が汝らの前に姿を現した理由は、解っておるだろうか？」

「ああ。解ってるぜ。」

光の返事に、黒い袴の男・クラウス・が満足そうに笑みを浮かべ、さらに続ける。

「ならば話は早い。ここで一つ、取引をしないか？通常、ヴァリアブルデバイスの所有者には、100年以上の投獄が課せられるわけだが、時空管理局に入局することによって投獄を免れる事ができる。どうだ？管理局に入局しないか？もちろん、タダでは言わん。入局した暁には、尉クラスの階級を与えよう。どうだ？悪い話ではあるまい？」

クラウスの言葉に、光は心中でため息をつく。

カイルの言うとおり、ヴァリアブルデバイス所有者を逮捕するといふ時空管理法の明記は、違法者を逮捕するのが目的ではなく、有能な人材を集め、管理局に引き入れるのが本当の目的だったのである。

しかも、強制的に、だ。

100年以上の投獄か、管理局に入局するか。二択を迫られた場合、後者を選択するのは火を見るより明らかだ。

投獄されるのは元より、目的のためならば手段を選ばないような組織に入局したくないというのが光の考えだ。

この考えからして、光の答えは一つしかないだろう。

光は心中で覚悟を決め、フィレスへ視線を向ける。



フィレスは、光の視線に答えるように一度頷いた。

それを確認し、光はクラウドスへ視線を戻す。

「悪いが、俺はどちらも選ぶ気はない。」

「成し遂げなければならない事があるんでな。その取引に応じることはできない。」

二人の回答に、クラウドスは笑みを消し無表情になる。

恐ろしいほど冷たい声で、二人に言う。

「そうか。やはり入局する気はない、か。ならば、無理矢理にでも連れて行くまでの事。」

そう言い、クラウドスは刀の柄に手をかけ、鞘から刀を引き抜く。

リュウガもまた、デバイスを構える。

光やフィレスも武器を構えようとしたが、しかしできなかった。

リュウガが左手の指をパチリと鳴らすと。

突如、足元から深紅の魔法陣が出現し、そこから同色の鎖が伸び、インフィニット・リズスト無限銃に何重にも絡まったのだ。フィレスもまた同じ状況だった。

「こんなものっ!」

「すぐに引きちぎってやる！」

ファイレスは、地面に何度も炎剣を打ち付け、光は片方の銃から魔力弾を生成し、それぞれ鎖を破壊しようとしていた。

しかし、何度地面に打ち付けても傷一つ付かず、また魔力弾を放つてもまったく効果がなかった。

他の方法を用いて破壊しようと、考えを巡らせる二人に、信じられないことが起こった。

フラッシュ・シューヴェアト・ピストル  
炎剣と無限銃が唐突に発光したのだ。

しかもそれだけでは留まらず、発射を続けながら徐々に形を変えていき、発光が収まった時には通常のデバイス状態に戻っていた。

「っ！！そんな・・・バカな!？」

「真姿解放が・・・解除された!？」

光とファイレスはその現象に驚愕しながらも、もう一度真姿解放を行うと、真名を唱えた。

しかし何の変化も見られなかった。

その事実を否定したくて、信じたくなくて、二人は何度も真名を叫ぶ。

必死な呼びかけにも関わらず、パートナーが答えることはなく。

二人の声は、ただ虚しく響くだけだった。

二人の行動を嘲笑うかのように、リュウガは笑みを浮かべ事実を突きつける。

「無駄だ。もうお前たちの声が届くことはない。真姿解放を封印したからな。」

「なん、だと!?!」

驚愕の声を挙げる光に、リュウガは面白いものを見たとしても言うよう声を抑えて笑う。

「何をそこまで驚いている?元々、ヴァリブルデバイスは俺たち时空管理局が創ったものだという事は、遺失物専門対策局の囑託魔導師となったお前なら、知っているだろう。俺達が創った武器を無力化する術を持っているのは当然のことだとは思わないか?」

「だが、炎剣はお前達が創ったものじゃない!なぜお前達がその力を封印出来る!?!」

そう、フラックメ・シュウゲアト炎剣は时空管理局が創ったものではない。これは、ファイレスとフェイトにとっては、先生あるいは姉のような存在である女性から、誕生日にもらったものだ。

その構造は、女性しか知らないはずである。しかしその女性はもういない。今となつては炎剣の構造を知る術はないのだ。それなのに、何故彼らは真姿解放を封印できるのか。

「確かに、フラックメ・シュウゲアト炎剣は俺達が創ったものではない。当然、その構造を俺

達は知らないわけだが、別に構造を知る必要はないんだよ。真姿解放はある法則に乗っ取っただけ。そのパターンは一つしかない。よって、そのパターンさえ理解していれば封印することは可能という事だ。他に聞きたいことは？」

「・・・いや、ない。」

リュウガの問いに、フィレスは簡潔に答えた。

先程は気が動転してしまっただが、今は冷静な判断力を取り戻していた。

それは光も同じようで、落ち着いた眼で前を見据えている。

「さて、真姿解放を封印したわけだが、まだ我々と戦う気かね？」

「当たり前だ！真姿解放を封印されたのにはさすがに驚いたが、戦う方法は他にもいくらでもあるんだ！まだ戦ってすらないのに、諦めるわけないだろう！」

「真姿開放ばかりに頼ってきたわけではないしな。デバイス状態での鍛錬もちゃんとやっているんだ。戦う手段があるのに、諦めるってのはおかしいだろう？」

確かに、真姿解放は封印されてしまったが、まだデバイス状態の力がある。

真姿解放を会得する前は、デバイス状態で必死に鍛錬してきたのだ。

光は、真姿開放での戦闘面においてもそうだが、デバイス状態でも

実戦形式の訓練をウラノスの指導の元行ってきた。

フィレスは、家庭教師兼姉のような女性から魔法の指導を受けた。女性がいなくなっただけからは、女性の教えを元に、自己流で鍛錬を行ってきた。

二人は、今こそ鍛錬の成果を試すときだ！と、愛機を強く握りしめ、構えた。

その様子を見て、リュウガは小さくため息をつく。

「やれやれ、仕方がないな。」

「では、魔導戦にて決着をつけるとしよう。汝らが勝てば、今回は身を引く。しかし、我らが勝った場合は・・・わかっておるな？」

「「ああ！」」

「ふむ。いい返事じゃな。ではリュウガ、アレの展開を。」

「分かった。」

クラウドの指示を受け、リュウガは右手を空に掲げる。

すると、周囲の背景に異変が起こった。

青い空が、大地が、木々が！

全て紅に染まっていたのだ。

そして、何よりも目を引くのが、本来太陽がある場所。

地上を明るく照らすはずの太陽までもが紅く染まっていた。

普段太陽が放つ暖かく柔らかい光は、体を解し、安心感をもたらす。

しかし、今あの太陽を見た光とフィレスの心は、恐怖で満たされていた。

この空間は危険だ！今すぐ脱出しろ！という警告を本能が告げているが二人はそれを無視し、恐怖を振り払うために心の中で己を叱咤し、武器を構える。

もう二人には恐怖はなくなっていた。

「ほう。この結界による周辺の変貌を目の当たりにしても、まだ武器を構えるとは・・・」

「久々に骨のある奴に出会えたな。」

その様子を見て、リュウガとクラウドスは感心していた。

今までこの結界によって変貌した風景を見た者のほとんどは、あまりの恐怖に士気を喪失し武器を捨て投降した。

フィレスや光のように、変貌した風景を見てなお、武器を構えたのはほんの一握り。

結果的にはリュウガ達が全勝したわけだが、武器を構えた人間は、全てが手強く、戦いの中でリュウガ達を満足させるには十分な技量

を持っていた。

今回は期待できそうだ、とリュウガとクラウドは思った。

「それでは、戦闘を開始するのでしょうか。」

リュウガの一言で、戦いが始まる。

〈数分前〉

次元空間では、紅い巨大な鳥が刻印されている1隻の次元航行艦が航行していた。

その艦の名を『フリーゲル』

遺失物専門対策局が所有している艦である。

ドイツ語で、鳥の翼を意味するこの艦は、現在第97管理外世界・通称「地球」へと向かっていた。

数日前に上層部からジュエルシードの探索、及び回収の任務を言い渡された『フリーゲル』は、現地周辺で、ジュエルシードの探索を行っていたのだが。

突如、複数の魔力反応と結界の反応を観測。

調査のために現地に向かっているという訳である。

その『フリーユージェル』内の廊下を、一人の女性が歩いていた。

女性の名は、レイナ・マクラーレン。

『フリーユージェル』の艦長を勤めている。

今彼女は、現状確認のためブリッジに向かっていった。

目の前にあるブリッジ扉を開き、中に入る。

そこには、10数人の通信士や執務官のカイルとウラノスがいた。

「第97管理外世界まで後どれくらいかかりそうなの？」

レイナの問いに、ある一人の通信士が答える。

「約15分後くらいです。たった今、転送装置の使用圏内に入りましたが、使用しますか？」

「使用しましょう。このまま到着するまでじっとしているのも、もつたないしね。現地に向かうのは、カイルとウラノス。貴方達に頼むわ。」

「了解！」

レイナからの指示に、敬礼で答え、カイルとウラノスはブリッジから出て行った。

今、それぞれが自分の果たすべき目的のために動き出す。





## それぞれの戦い（前書き）

1ヶ月以上間が空いてしまい、申し訳ありません。なんと表現すればよいか分からず、悩みながら執筆していくうちに、いつの間にか1ヶ月以上経過していました。もっと力をつけたいと考えているので、アドバイスや感想・評価などをよろしくお願いします。

## それぞれの戦い

「・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

なのはは、肩で息をしながら、黒煙を挙げている前方を見ていた。

フェイトの攻撃を直前で避け、即座に手加減なしの砲撃を放ったのだから、疲労するのは当然の事だろう。

しかしなのはは、今の一撃がフェイトに効いてないと考えていた。

砲撃が彼女に直撃する寸前、金色の何かが彼女の前に展開されたのを、視認したからである。

恐らく、障壁だろうとなのはは予測し、周辺の警戒をする。

今までのフェイトとの戦闘から、彼女は高機動型である事が分かった。

そして攻撃を防いだ後、その場に留まることなく移動している事も。

見渡す限り彼女の姿は確認できない事から、彼女は地上に潜んでいると推測し、目を閉じて感覚を研ぎ澄まし、フェイトの気配を探る。

しばらく静寂が続いたが。

「ニヤア！」

「！」

背後からの猫の鳴き声がそれを破った。

猫の鳴き声に驚き、なのはは猫へ視線を向ける。

猫に気を取られ一瞬だが、フェイトへの警戒が疎かになった。

戦場では意識を逸らした時点で、負ける。

その一瞬の気の緩みが、敵に懐への進入を許してしまうから。

《ソニックムーブ》

「っ……！」

なのはの地上から聞こえる電子音声が唱えるのは、加速魔法。

高機動型のフェイトが加速魔法を使うのだから、そのスピードは相  
当なものだろう。

加速魔法の使用に気づき、なのはは慌てて防御体制に入ろうとした  
が、既に遅かった。

なのはがレイジングハートを構える前にフェイトは地上からなのは  
の懐に接近し、胸に手を当てたのだ。

さらに胸に当てられた手に、金色の魔力が収集されていく。

「っ!!」

その瞬間、なのはの頭が真っ白になる。

しかし、それも一瞬の事。

すぐになのはは思考を再開させる。

加速魔法で回避する？

無理だ。加速魔法を発動させる前にフェイトが気づき、発動を阻まれてしまうだろう。

障壁を展開する？

無理だ。たとえ今術式を練ったとしても強度な硬度を得られるとは思えない。

八方塞がりだ。

いくら考えても、現状を打破できる方法が見つからない。

思考を続けている間にも、胸に当てられた手に魔力が収縮され、やがてサッカーボール並みの大きさにまで膨れ上がる。

（打つ手がない!）

完成した魔力球を見て、心中でなのはは絶望する。

そして、フェイトが魔力球を撃つ瞬間

「……ごめんなさい」

なのはがその言葉の意味を理解した時、フェイトの手から魔力球が放たれた。

なのはは地上へと落ちていく中、フェイトの悲しみに満ちた表情を浮かべているのを眺めながら、意識を手放した。

（フェイトサイド）

傷つけて、しまった。

本当はそんな事したくはなかったのに。

でも母さんの願いを叶えるためには、あの大好きな笑顔を取り戻すには、こうするしかなかったんだ。

……いくら理由を並べたとしても、それは言い訳にしかならない事は分かってる。

結局、あの白い魔導師の子 高町なのは を傷つけた事という事実は変わらない。

「……ごめん、なさい」

私はもう一度彼女に小さな声で謝罪し、巨大な猫へ視線を向けた。

「ニャアア！」

巨大な猫は攻撃する素振りも見せず、ただ周辺を歩いているだけ。

大きさが変化しただけで、普通の猫なんだ。

周りに害を成す存在でもない生き物を、ジュエルシードを取り出すためとは言え攻撃する事にほんの少し躊躇した。

でも、私にとってその思考は邪魔な物。母さんの願いを叶えるのに、不必要な物だ。

首を2・3度振り、不必要な思考を追い出し、ジュエルシードを封印する事だけを考える。

巨大な猫がいる上空まで移動した後、バルディッシュを構える。

「バルディッシュ！」

『Sealing form・Set up』

私は、バルディッシュを封印形態に移行させ、先端に封印させるための魔力を収縮する。

そして、収縮が終わると同時に私は巨大な猫へバルディッシュを振り下ろした。

金色の砲撃が猫に直撃する。

「ニヤアアアアア！」

猫はしばらくの間、もがき苦しんでいた。

やがて猫は動かなくなった。

呼吸はちゃんとしているようだから、おそらく気絶しただけだろう。私は、内心ホツとしながら猫に近づく。

地面に着地したのと同時に、猫の背中からジュエルシードが出現した。

「バルディツシュ」

『Capture』

ジュエルシードをバルディツシュに収める。

もうこれでここに用はなくなった。

すぐにここから立ち去ろうとしたその時、偶然彼女の姿が目に入った。

地面に倒れている高町なのはの姿が。

ジュエルシードを封印する作業に集中する事で殺していた罪悪感が、再び私の心を締め付ける。

でも、私はそれを無視してこの場から飛び立たとうとした瞬間！

『悪いが、少し待ってくれないか？』



念話が届き、二人の男性が私の行く手を遮るように現れた。

～～～結界内～～～

リュウガが展開した結界内では、フィレスがクラウドと、光がリュウガと闘っていた。

フィレスとクラウドは地上でお互いの愛機を衝突させ、光とリュウガは空でお互いの魔力弾を撃ち落としていた。

二人ともバリアジャケットは黒く汚れ、顔や腕に切り傷を負っている。

(まずいな)

光は、リュウガとの戦いで危機感を感じていた。

少しずつではあるが、リュウガの攻撃に体が反応できなくなって来ている事に気付いたのだ。

しかも、通常なら攻撃を受けたとしても、それは魔力ダメージとしての痛みしかないはずだ。

だが、リュウガの魔力弾の直撃を受けた左腕は赤く腫れ、出血していた。

この事から相手は殺傷設定を使用している事が分かる。

先ほども述べたように、非殺傷設定の場合は攻撃を受けたとしても、

魔力ダメージが体内を駆け巡るだけで済む。

しかし、殺傷設定は違う。

掠っただけでも出血してしまうのだ。

相手の攻撃に注意しなければ、こちらの身が危つくなる。

そう思い相手の攻撃を観察し、避けてきたのだ。

しかし、いきなり魔力弾の速度が上がり、左腕に直撃してしまう。

「……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……っ!!」

相当痛むのか、時折顔を顰めている。

右手を左腕に当て、プリューナクの補助を受けながら治療していく。

その最中、光は現状の打開策を練っていた。

(あいつが操作している魔力弾の数はだいたい40 50。最初は避けられるような速度だったが、だんだん速度が上がってきている。)

最初のような全弾回避はもう無理だろう。

砲撃戦では、あいつに勝てない。

そう考えた光は、治療が終わると同時に、行動に出た。

「プリューナク！セイバーモード！」

『セイバーモード』

プリューナクをセイバーモードに移行させ、構える。

「はあああつー!!」

気合とともに加速魔法を使い、高速でリュウガの懐に入る。

リュウガはまだ、構えすら取っていない隙だらけな状態だった。

いける!と思い、上段から斬りかかる。

その一撃は、リュウガに傷を負わせる　はずだった。

プリューナクの魔力刀がリュウガを捉える瞬間、リュウガは半歩身を引いたのだ。

その結果、振り下ろされたプリューナクは空を切る。

たったそれだけの動作で光の攻撃を避けた。

という事はリュウガは、光の攻撃の間合いを見切っている事になる。

(俺の攻撃が、あいつに通じない!?)

最悪な考えが頭を過ぎり、構えを解きそうになる。

しかし、そんなはずはないとすぐにそれを否定し、プリューナクを強く握る。

その様子をじつと見ていたリュウガは、わずかに笑みを浮かべ、ここで初めて構えた。

その動作は、今度はこちらから行くぞという意思表示で。

リュウガの攻撃に対処できるよう、気を引き締める。

数瞬後、リュウガの姿がいきなり掻き消えた。

(っ!! 一体どこに ！？)

周辺を探そうとした光の目の前にリュウガは突然現れた。

(くっ!! 防御を!?)

咄嗟に、プリューナクを前に突き出したが、リュウガのデバイスに弾かれてしまう。

もう、光の身を守る物はなくなった。

リュウガは、右手に魔力を集中させ、拳を握る。

そして、光の腹へ拳は向かう。

やがてリュウガの拳は光の腹に直撃し、光は吹き飛ばされた。

苦痛の声を上げる事すらできずに、光は岩壁に激突する。

その後重力に身を任せ、光は地面へ落下していく。

（攻撃速度が、速すぎる・・・勝てない！）

光は、胸中で絶望しながら、意識を手放した。

## 救出作戦始動（前書き）

今年初めての投稿です。間が開いてしまって申し訳ありません。いつの間にか連載初めてから一年が経過しました。現段階でアニメで言う4話あたりです。このままのペースで行くと、無印書くだけで後2年かかるかも……。これからは投稿ペースをあげられるようにがんばります。

## 救出作戦始動

（フェイト サイド）

突然現れた二人の男性はゆっくり私に近付いてくる。

敵意は感じられないから、敵というわけではないんだろうけど。

念のためにバルディッシュを構えて、いつでも行動できるようにしておく。

「そう警戒しないでくれ。俺達は君と敵対するつもりはない。君に協力して欲しい事があってな。」

私の構えから、警戒されていると感じとったようだ。

でも言葉だけじゃ信じられない。

「言葉だけでは信用できません。行動で表してください。」

私の言葉に右側の男性はため息をつき、隣の男性に視線を向け、言った。

「カイル。高町なのはの治療と彼女への現状の説明を頼む。俺はこの子に説明する。」

「了解しました。」

そう言い、左側の男性は私の真横を通り過ぎ、白い魔導師の子・高

町なのは、の方に向かった。

「タナトス、モードリリース」

目の前にいる男性は、武装を解除した。

私の言葉の通り、敵意がないという気持ちを行動で表したのだろう。

「これで、信用してくれるか。」

「はい。信用します。」

「さて、まずは俺達が何者かという話から始めるか。」

そう言い、目の前の男性は説明を始めた。

くなのは サイドく

なんだろう、胸が暖かい。

胸から全体に暖かさが広がり、それと同時に痛みが和らいで行く。

もしかして、治療魔法かな？

「……の……さ……な……は……ん……！」

ぼんやりとだけど、私を呼んでる声がする。



その声に導かれるかのように、私の意識が浮上していくのを感じた。

カイルがなのはの治療を初めて数分後。

なのはが目を覚ました。

現状が把握しきれしていないのはに、カイルは現状と、これからの方針の説明をした。

説明を終えた後、カイルとなのははフェイトやウラノスと合流するために徒歩で移動していた。

その最中、なのはは上空を見上げる。

(・・・気付かなかった。私がフェイトちゃんと闘っている間に、光お兄ちゃん達が隔離されていたなんて・・・)

そう思うなのはの頭の中に、先程のカイルの言葉が過ぎる。

『現在、光さんとフィレス・テストロツサは敵である時空管理局上層部直属部隊が展開している結界に隔離されている状況です。結界の反応や、光さん達の魔力反応が感知できませんが、結界の反応や魔力反応を隠蔽する能力を持つロストロギアを使用していると考えられます。そこでこれから我々は、結界を展開しているであろうロストロギアを破壊します。囑託魔導師として、協力をお願いします。』

突然の話に呆然としながらも、返事はできた。

（いつも、私は光お兄ちゃんに助けられてばかりだ。私が困った時、いつも光お兄ちゃんが傍にいて、私を助けてくれてた。今度は、私の番だ。私が、光お兄ちゃんを助けるんだ！）

頭を過ぎったカイルの言葉になのはは心中で決意し、前へ進む。

光を救出するという、目的を果たすために。

なのはやカイルが、ウラノスやフェイトと合流するために移動している中、フェイトは近くの木にもたれかけながら、空を眺めていた。

先ほどのウラノスの説明が頭を過ぎり、心中で兄・フィレスの救出を誓う。

フェイトは少しの間目を閉じ、瞳に決意を宿らせて木から離れる。

「フェイトちゃん！」

木から数歩移動した所で、聞き覚えのある声に名を呼ばれ、そちらに視線を向ける。

先程、ジュエルシードを巡って鬨った、傷付けてしまった少女・高町なのはへと。

フェイトが視線を向ける中、なのはは笑顔を浮かべてフェイトに駆け出す。

先程闘った事も、自分に傷付けられた事も忘れてしまったかのような笑顔に、フェイトは心中で困惑した。

「フェイトちゃんも協力してくれるの!？」

瞳を輝かせながら、フェイトへと駆け寄るなのは。

フェイトはその笑顔を、理由はなんにしる傷付けてしまった事への負い目のためか直視できなかつた。

目を背け、小さな声で返答する。

「私は、私の目的のために行動するだけ。協力するわけじゃない。」

「そっか。」

フェイトの言葉に拒絶の意志が含まれている事になのは気付いたが、それでもなのはは笑顔だった。

そこにカイルとウラノスが合流し、人数が揃った。

4人はただ一度頷き、青空へ飛び立った。

それぞれの目的と、決意を胸に抱いて。

目を覚ました光の前に広がるのは、闇。

そこは以前イリスと出会った場所だった。

しかし済んだ青空も、草原も、今はない。

済んだ青空は暗雲に覆われ、草原も荒野に変わり果てていた。

イリスは、ここが個人の心を具現化した空間だと言っていた。

という事は、この風景が今の光の心情という事になる。

（そうか。俺は・・・また負けたんだな）

その風景を眺め、光はそう思う。

先程のリユウガとの戦闘が、頭を過ぎる。

（さっきの攻撃、反応できなかった。）

絶望の気持ちから、座り込み、膝を抱える光。

（真姿解放を会得して、その力を扱えるように基礎から訓練したのに・・・デバイス形態での訓練もしていたのに・・・負けた。）

光とリュウガとでは、経験と技術に大きな差がある。光が負けたのはある意味当然だが、それを考える余裕が今の光にはなく、ただ再び敗北した事への絶望感だけが光の胸を埋め尽くしていた。

（俺は、なんのために力を手に入れた？ファイレス以上の力を身につけて、あいつと話をしたいというのは力を手に入れる口実で、本当は自分のためなんじゃないのか？・・・ダメだ！分らない分らない

！自分の事なのに全く分らない！)

疑問とそれに対する解答が次々と思ひ浮かび、やがて頭が混乱して  
いた。

そんな中、ふと目の前に光球が出現した。

それを目にした光はその光球が、自分をこの悩みから、この闇から  
救ってくれるような気がした。

気が付けば、光はその光球へゆっくりと右手を伸ばしていた。

右手が光球に触れた瞬間光球が輝きながら、その形を変え、やがて  
人の形になった。

光が収まった先には

「・・・マスター」

「・・・イリスか」

悲痛な面持ちのイリスがいた。

「何をそこまで悩んでいるんですか！貴方が求めている答えはすぐ  
傍にあるんですよ！？それなのに、なんでこんな・・・」

イリスは光に訴えかけるように詰め寄るが、徐々にその声は勢いを  
無くしていく。

「・・・わからないんだよ。自分の事なのに、なにも、わからない

んだ。なんのために力を手に入れたのかも、何の為に今まで訓練してきたのかも。」

イリスの言葉に対する光の返答は、最悪だった。

初めて出会った時の決意に満ちた眼は消え失せ、焦点の合わない眼で返答したのだ。

しかも光の口からは、絶望へ立ち向かう言葉ではなく、諦めの言葉が出た。

もう、以前の高町光の面影はない。

目の前の絶望を受け入れ、何もかもを諦めてしまっている。

そんなのは自分のマスター・高町光ではないとイリスは思った。

3年前、初めて光がプリューナクに触れた瞬間からイリスは光の精神世界に居たのだ。

声は届く事はなかったが、ずっと光の様子を内側から見ていた。

この3年間、大小の差はあれど光は困難に立ち向かっていた。

何度失敗しても、諦める事なく挑戦し続けていた。

そんな光を見てきたイリスだからこそ、今の光の状態に怒りを覚えた。

「……いで……ぶざけないでー!」

「っ！！」

その怒りは呟きとして漏れ、やがて怒号となって溢れ出し、イリスにある行動を起こさせる。

光の胸倉を掴み、無理矢理立たせるといふ行動を。

光はイリスの思わぬ行動に驚愕し、声を出す事もできない。

「貴方はまたなのはさんを泣かせるつもりなんですか！？あの時、フィレス・テストロツサとの戦いに敗北し、すぐに帰るといふなのはさんとの約束を守れなかった！なのはさんを泣かせないために、なのはさんを守るために貴方は力を欲し、鍛錬してきたのではないのですか！？」

「！！」

イリスの言葉に光は目を見開いたと同時に、病院でのなのはの泣き顔が浮かんだ。

（そつだ……。俺はあの時、なのはをこれ以上泣かせたくないと思つたんだ。なのはを泣かせないために、俺は力を手に入れたんだつたな。フィレスと同等に戦いたいというのは、一番の理由じゃなかった。一番の理由は、なのはを守るためだつたんだな。）

光の思いを感じたのか、イリスは手を離していた。

そして、ゆっくりと光を抱きしめる。

「先程はすいませんでした。私が貴方に力を与えた理由は、貴方を守る盾となり、貴方が行く道を切り開く矛となるため。今の貴方がかつての貴方とは違い、自分の殻に閉じこもってしまったために感情的になってしまいました。」

「……俺の方こそごめんな。2度負けた事で、俺は以前と変わっていないんじゃないか、成長していないんじゃないかと考えてしまつて塞ぎ込んだ。今考えると、負けて当然だよな。経験と技術が違いすぎるんだから。でも、それでも俺は勝ちたいんだ。」

光はイリスの肩に手を置き、体を離す。

そしてイリスの眼を、決意を宿した眼で見つめ自分の決意を言葉に現して伝える。

「俺は、もう迷わない。なのはを守るために、俺はこれ以上負けない。イリス、力を貸してくれ。」

対するイリスは、眩し気な眼で見つめ、笑顔で返す。

「はい。貴方の願いと想いを叶える力は此処に在ります。貴方が正しいと思つた事に、存分にお使いください。」

「ああ。ありがとう。」

しばらく静寂が続き、やがてイリスが真剣な眼差して光を見る。

「……今回の敵は、フィレス・テスタロッサとは桁違いに強いです。それは、彼と闘つた貴方が一番よく分かっていますよね？」



光も、真剣な眼差しで答える。

「ああ。・・・攻撃が、見えなかった。気がついたらもう目の前に居て、攻撃されてた。」

「それは、貴方が彼の動きを眼で追おうとするからです。相手の動きを眼で追うには限界があります。動きを眼で追うのではなく、感じるのです。」

「動きを、感じる?」

言葉で言われても想像できず、首を傾げる光。

「ええ。その手本として、今回は私が戦います。」

「イリスが?でも、どうやって?」

「ユニゾンです。」

「ユニゾンだって!?!」

ユニゾンは、真姿解放の際に行っている。真姿解放を封じられた現時点では、ユニゾンはできはずだ。

それをイリスがわからないはずがない。

「真姿解放を封じられた現時点では、『マスター主体のユニゾンはできません。しかし、その逆ならば・・・』」

イリスの言葉に、光はハッとす。

「逆と言う事は・・・イリス主体のユニゾンという事が！」

「その通りです。」

光が導き出した解答に、イリスは満足気に頷く。

通常ユニゾンとは、ロード主体で行うものである。

こちらの方が安全で、力の向上が可能だからというのが理由の一つ  
でとして挙げられる。

しかし一般的には危険視されているがその逆、融合騎主体のユニゾ  
ンも行う事が可能なのだ。

融合しようとした際に融合騎に体に乗っ取られ融合事故を起こし暴  
走する危険性があるが、ロードと融合機の双方に信頼という絆があ  
ればその問題は解決する。

しかも、ロード主体のユニゾンよりも融合騎主体のユニゾンの方が  
力は向上する。

当然、ロードにはそれ相応の負担が強いられる事になるが。

「通常のユニゾンならば、マスターの力に私の力が付加されますが、  
融合騎主体のユニゾンでは私の力にマスターの力が付加される事にな  
ります。マスターにはそれ相応の負担を掛けてしまいますが・・・  
これで彼に勝てます。」

「負担に関しては大丈夫だ。耐えてみせる。」

二人は笑顔で、一度頷く。

「じゃあ、行こうかイリス」

そう言いながら、差し出された手を、イリス「はい」と笑顔で返事をしながら握る。

それと同時に、二人の体が発光し、徐々に大きくなっていく。

発光が収まると其処には既に二人の姿はなく、以前と同様に、青空と草原が広がっていた。

もちろん、大樹も復活している。

これは光が絶望から抜け出した証だ。

これから、光とイリスの反撃が始まる。

## 絶望からの復活

光がリュウガによって気絶させられていた頃、フィレスはクラウドと闘っていた。

フィレスもクラウドも、お互いに剣を得物とする者同士。

自然と戦い方は決まってくる。

魔法を交えた剣術による接近戦だ。

両者共に空中で加速魔法を使い、紫と黄土色の光線となって金属音を響かせながら何度も衝突する。

その動作をしばらく繰り返し、やがて二人とも空中で静止した。

「くく。さすがは蛇炎の魔剣と呼ばれ恐れられた剣の持ち主だ。所有者として十分な実力を持つておる。」

しばらく沈黙が続いていたが、沈黙を破ったのはクラウドだった。

満足そうな声でフィレスに惜しめない賞賛を送る。

「そりゃどうも。実力の測定はこれくらいにして、そろそろお互い本気で闘おうぜ。」

対するフィレスは賞賛を受けた事が嬉しいのか、笑みを浮かべ言っ

た。

「っ！！」

フィレスの言葉に、クラウスは驚愕した。

毎回このような戦闘が行われている理由は、反抗するヴァリアブルデバイス所有者を鎮圧し、連行するためである。

しかし、クラウス達は連行するためだけに闘っているわけではない。実際に自分達で戦い、相手の実力を計り、上層部に報告する事。

それこそが、クラウス達がヴァリアブルデバイス所有者との戦闘を行う真の理由である。

降伏しろと言われて降伏する奴はいない。

ヴァリアブルデバイス所有者が全力で抵抗することは火を見るより明らかだ。

今までのヴァリアブルデバイス所有者との戦闘は、力を抑えた状態でも圧倒的な実力差で勝利できた。

しかし今回の場合は、フィレスとの戦闘では違った。

力を抑えた状態であるとはいえクラウスと互角に闘えている上に、今まで誰も気付く事のなかったこの戦闘の真の目的に気付いた。

これは、今までになかった事だ。

最初は驚愕していたクラウドだが、それはすぐに喜びへと変化した。初めて自分と互角に渡り合える人物に出会えたのだから、嬉しくなはいはずはない。

その喜びを笑みとして現し左手で握っている刀を右手に持ち替え、眼前に突き出す。

そして、フィレスへ宣戦布告した。

「いいだろう！早急に決着を着け、お主を連行する！」

「やれるもんならやってみろ！」

二人は、再び構える。

やがて二人が動き出し、互いの距離が残り数メートルまで縮まったその時にそれは起こった。

突然、二人の間に紅い魔力割って入ったのだ。

「あぶねっ!？」

「っち!？」

突然の乱入に驚きの声を挙げながらも、二人とも飛び退く事で紅い魔力を避けた。

フィレスは、目の前に昇る紅い魔力に視線を向け、観察する。

（これは、……魔力流、なのか？）

魔力流とは、放出された魔力の流れの事である。

魔導師が魔法を発動させる際に放出される魔力には、目に見えない渦上の流れがある。

フィレスは目の前に昇る紅い魔力に渦のような魔力の流れを感じたので、そう判断したのだ。

だがしかし、魔力の密度が高すぎる。

これほどまでに高密度な魔力流を、今までフィレスは見た事がなかった。

一体誰が？と疑問に思い周囲を見渡し、魔力流を放出した人物を特定する。

現在、この結界内にいるのは、フィレスと光、リュウガとクラウドの4人。

クラウドは目の前にいるし、リュウガの姿も地上にある。

となると残りは　　。

（高町光か！？）

消去法によりたどり着いた答えに、フィレスは驚愕する。

なぜなら、先程戦ったときとは魔力光が異なるからだ。

先程の戦闘での光の魔力光は赤褐色。だが、今放出しているのは紅。

「っ！！」

先程と現在の魔力光の違いを比較した時、頭の中で何かが引っかつかった。

（いやちよつと待て！確か一番最初に高町光に会った時の魔力光は漆黑だったはずだ。真姿解放を展開して魔力光が赤褐色に変化したという事はまさか　　！）

魔力光は一人に一色というのは疑う事もない大原則だ。

だがしかし、一つだけ魔力光が変化する現象がある。

そう、ユニゾンだ。

という事は、光のデバイスであるプリューナクの核として使用されているロストログアには、ユニゾン機能を持った管制人格が居るといふ事になる。

光が真姿解放を展開した時の魔力は赤褐色。

あれが光を主体としたユニゾンだとしたら？

もし仮に、光を主体としたユニゾンとは逆の、管制人格主体のユニゾンが可能だとしたら？



そこまで推測した時に浮かぶのは一つの可能性。

しかし、その可能性が正しいとは限らない。

フィレスは、自分の推測が正しいのかが知りたいと思った。

クラウドの方を見てみると、彼もフィレスと同じように紅い魔力流が気になるのか、地上へ視線を向けていた。

紅い魔力流の発生源が判明するまで、攻撃される心配はないだろう。

これで安心して地上を観察できる。

（俺の推測が正しいかどうか確かめさせてもらっぞ、高町光）

今、結界内にいる人間全てが赤い魔力流に視線を向けた。

リュウガはあまりの驚愕にその場を動けずいた。

突然魔力流が吹き荒れれば誰でも驚くと思うのだが、リュウガが驚いている理由は二つある。

まずは、魔力光。

先程の戦闘では赤褐色だったが、現在は紅に変化している。

魔力光は一人に一色。

その大原則が崩れた事。

そして、もう一つは紅い魔力流から発せられている異質とも言える気配。

まるで殺気のような、背筋が凍るような気配を感じたのだ。

殺気は、時空管理局上層部直属部隊という裏の部隊に所属しているから感じ慣れている。

ただの殺気ならば、動けなくなる訳がない。

今までの殺気とは比べものにならないほどに強力だったのだ。

無意識のうちに冷や汗を浮かべるほどに。

（こんな殺気を、高町光が出せるはずがない！だとしたら一体誰が・・・誰がこれほどまでに強力な殺気を放っている！？）

答えを求めているリュウガに伝えるかのように、紅い魔力は少しずつその規模を縮小させていく。

やがて完全に収まった時、その場にいたのは光ではなく、一人の女性。ワインレッドのロングスカートに紅いシャツの上に黒い長袖の上着を羽織っており、蒼と紅の虹彩異色をもつ がいた。

「・・・何者だ？」

変わらず放たれている殺気に耐え、平静を装いながら訪ねる。

「初めまして。私はマスターのデバイスであるプリューナクに使用されているロストロギアの管制人格、名をイリスと言います」

「管制人格だと？真姿解放を封印している現段階で、何故出て来れる？そもそも、どうやって出てきた？」

「真姿解放は、ロストロギアの真の力を解放するものです。それを封印したとしても、これくらいの事は通常の力の範囲内ですよ。魔力光が変化する現象なんて一つしかないんですから、後は自分で考えて下さい。」

リュウガの疑問にイリスは答えた。

先程までイリスが放っていた強力な殺気はもう感じない。

しかし、その声には怒気が隠されている事なく現れていた。

イリスの答えを脳内で整理しながら、イリスが現れた理由と怒っている理由を考える。

（魔力光が変化する現象といえばユニゾンのみ……なるほど。そういう事か。）

リュウガは数秒思索し、両方の理由が分かった。

イリスはマスターである光主体のユニゾンではなく、管制人格主体のユニゾンを行ったのだ。

そうすれば、管制人格が表に出る事はできる。

まあ、多少はマスターの特徴も現れているが。

そしてもう一つ、怒っている理由は

「そんなに、マスターがやられたのが悔しいのか？」

嘲笑を伴いながら、リュウガは言い放つ。

「もちろん、悔しいに決まっています。平和な日常の中ではあつたけれど、マスターは困難に立ち向かって来ました。そんなマスターを絶望させたのは貴方です。」

リュウガの嘲笑に、悔しそうな表情をするイリス。

悔しさのあまり、右手に力が入る。

「だが彼が、高町光が絶望したのは弱かったからだ。精神面においても、実力面においても、な。」

「・・・確かに、貴方の言うとおりかもしれませんが。それでも私はっ！！あの太陽のように眩しく、輝いていたマスターの心を曇らせた貴方を許しません！」

光の心は、どこまでもまっすぐに輝き、澄んでいた。

イリスをも包み込むかのように。

イリスは光の心の暖かさに満たされ、幸福感を感じた。

その時に誓ったのだ。

この澄んだ心の世界が変化する時は、マスターになにか問題が起った時。

もしそのような事があれば、私が全力でマスターを守ろうと。

光の心は、リュウガとの戦闘で一度は闇に落ちた。

あの澄んだ青空を、草原を、寒気すら感じる荒野へと変化させ、光を絶望させた。

だから。

「今度は私が、マスターが味わった以上の絶望を、貴方に届けます。」

決意を言葉にして、イリスは左手に握るプリューナクを構えた。

## 最終決戦？

一方、なのは・フェイト・カイルは、ウラノスの案内で結界を展開しているロストロギアがある場所へと向かっていた。

飛行する事数分。

4人は目的地に到着した。

しかし周辺を見渡しても、ロストロギアのような物はどこにもなく。

「本当に此処に結界を展開しているロストロギアがあるんですか？」

全員の考えを代弁するかのように、なのはがウラノスに尋ねた。

「間違いない。結界を展開しているロストロギアははここにある。」

なのはの問いに、ウラノスは自信満々に答える。

カイルやウラノスの実力は、ロストロギア関連の事件を扱う遺失物専門対策局の中でもトップクラスだ。

そのウラノスが言うのだから間違いないだろう。

しかし何の気配を感じない現状ではその自信満々な答えにさえ、不審に思ってしまう。

「信じられないなら、目の前に魔力弾でも撃ってみるといい。」

なのはの不審の思いを表情から読み取ったのか、ウラノスはなのはに提案する。

「わかりました。デイバインシューター！シュート！」

なのははウラノスの提案を実行し、3発のデイバインシューターを展開し、発射する。

デイバインシューターは直進し、そのまま通り過ぎるかのように思われた。

だが、実際に起こった事は違った。

3発のデイバインシューターはウラノスが示した座標に到達した瞬間、いきなり消えたのだ。

まるで呑み込まれたかのように。

それはつまりそこに何かがあるという事であり、ウラノスが言っていた事は事実だと言う事を証明していた。

「……消えた？」

「いや、消えたんじゃない。魔力弾が消えた時に、小規模だが空間の歪みを感じた。おそらく吸収されたな。」

なのはの呟きをウラノスは否定し、自分の意見を言う。

「ええ。なのはさんの魔力弾の密度も威力も、高い方に分類されま

す。それがあっさりと吸収されたとなると、純魔力攻撃は効果がな  
いと考えた方が良さそうですね。何か別の手段を考える必要があります。  
ます。」

カイルはウラノスの意見に賛成し、自分なりの見解と、これからの  
方針を示した。

純魔力攻撃とは、魔力弾や魔力刀などの魔力のみを使用した攻撃の  
事である。

魔導師ランクAAAランクを保有するのはの魔力弾は、威力も密  
度も高い。

その魔力弾をなんの抵抗もなくあっさりと吸収したのだ。

どれだけ高威力、または高密度の攻撃を放ったとしてもおそらく無  
駄だろう。

「・・・この中に、魔力変換資質を持っている人はいますか？持っ  
ているのなら、変換対象も教えていただきたいのですが」

なのは達が別の方法を考えている最中、今まで無言だったフェイト  
が質問する。

内心で少々驚きながらも、ウラノスがフェイトの質問に答えた。

「私とカイルが持っています。変換対象は私が『氷』で、ウラノス  
が『風』ですが、それがどうかしましたか？」

「私も、魔力変換資質『雷』を持っています。純魔力攻撃が通用し



ないのならば、魔力を別の物に変換して攻撃してみてもどうでしょうか？」

「……なるほど、その手が在ったか。よし、やってみよう。」

フェイトの説明に、ウラノスは納得した。

魔力変換資質とはその名の通り、魔力を別の物に変換する能力の事である。

魔力変換資質を用いて生成されたものは魔力系等から切り離され、世界に存在するものとなる。

フェイトは雷を、カイルは氷を、ウラノスは風を、魔力結合が可能ならば時間、場所を問わずに創り出せるという事だ。

「風よ……」

「雷よ……」

「空気中に存在する水素よ。」

3人は目を閉じ足元に魔方陣を展開し、右手を突き出して詠唱に入る。

「『『自然の脅威を誇示するため、我に力を与えよ。』』」

3人は詠唱を終え、目を開く。

フェイトとウラノスはそれぞれ右手に雷と風を纏い、空気を振動さ

せる。

ウラノスの右手には、水素を凍らせて創ったサッカーボール並みの氷塊が握られていた。

「準備はいいな？」

ウラノスの言葉に、フェイトとカイルは一度頷く。

それをウラノス準備完了の合図と解釈した。

「では、3・・・2・・・1・・・撃て！」

ウラノスの合図と共に、カイルが氷塊を発射し、フェイトが雷を放ち、最後にウラノスが突風を発生させる。

ここで一つの偶然が起きた。

氷塊に雷と突風が衝突し、混ざり合って一つの光弾になったのだ。

光弾は先程なのはデイベインシューターが吸収された地点に到着し、空間を歪めながら火花を散らして衝突する。

3人は確かな手応えを感じ、これならいけると確信した。

「っっはあっ！！！！」

3人は気合いと共に、それぞれの攻撃の出力を上げる。

すると、衝突していた空間に罅が入り、それは少しずつ範囲を広げ

ていく。

やがてガラスが割れるような音を立てながら、空が砕けた。

(よし!)

(なんとか敗れましたね)

(・・・ふう)

(やった!)

4人は心中で喜びの声を上げ、安堵の表情を浮かべる。

「「っ!?!」」

だがしかしその喜びはすぐに消え、険しいものに変化した。

空が砕けたその先に停滞している戦艦。

そこから、傀儡兵が姿を現したからだ。

傀儡兵の個々の魔力量は、AA程度。

その数はざっとみても200。

三日月型の斧のような物を持っているのがほとんどだが、中には戦車に搭載されているような砲台を背負っているものもいた。

対するこちらは、Sランクが二人、AAAランク相当が二人。

傭兵の個々の戦闘能力から見たら、この戦力ならばまず負ける事はないと思うが、いかんせん相手の数が多い。

これだけの数を倒せるだろうか？

4人の心中に共通の、不安にも似た思いが過ぎる。

しかし、立ち止まるわけにもいかないのだ。

現状を突破しない限り、戦艦に潜入する事はできない。

やるかやらないかなのではない。

やるしかないのだ。

4人はそう思い心を奮い立たせて、目の前の大軍に立ち向かう。

フィレスは、紅い魔力流が収まった先に居たイリスを見て、自分の推測が当たっていた事を確認した。

その事に笑みを浮かべながら、内心では闘志を燃やしていた。

こつちも負けてられないな、と。

今闘っているのは光の融合騎であるイリスだが、融合騎主体のユニゾンが可能にしたのは間違いなく光の力だ。

主体がロードから融合騎に変化してはいるが、光も共に闘っている。

光は自分に相当の負担が掛かる事を覚悟しているのだ。

そうまでしてリュウガと闘っている光に、フィレスはあいつには負けたくないと思った。

「疑念も解決した。こちららも戦闘を再開させよう。お互い本気で、な。」

視線をクラウドへ向けると、デバイスをこちらに向け構えていた。

同じ疑念を抱いていたクラウドは、疑念が解決した事でこちらに意識を集中させたようだ。

「どこからでも掛かってこい！」

フィレスは強い笑みを浮かべ、闘志を力へ変える。

同時に二人は空を蹴り、火花を散らせながら衝突した。

空中では衝突する音が、大地では力の衝突の余波で陥没し、粉碎する音が幾度も木霊していた。

それを引き起こしているのは、加速魔法を使用した事によって紅と蒼の光線となったイリスとリュウガだ。

幾度も衝突した二人は地上に姿を現し、お互いに武器を構える。

二人とも少々の息切れはしているが、それだけだ。

特に外傷は見当たらない。

「ふふつ。」

息を整えるためのしばらくの沈黙を、リュウガの小さな笑いが破る。

「まさか、ここまでやるとはな。正直驚いたよ。」

「全然驚いているようには見えないんですが。」

リュウガの言葉を、息を整え終わったイリスが否定する。

驚いたと言っている割に、リュウガは笑っているのだから。

「そんな事はないさ。十分に驚いているよ。俺とここまで闘えたのは、君が初めてだ。」

「それは光栄ですね。ですが、私はそんな事では満足しませんよ。」

リュウガの言葉を賞賛と受け取りそれに関しては笑顔で、決意は真剣な表情で言う。

「やはり、俺を倒さない限り満足しないか。だが、どうやって俺を倒す気だ？」

「貴方を倒すための準備は既に整っています。始めましょうか。決

着を着けるための戦いを。」

それぞれの場所で最後の戦いが始まった。

## 最終決戦？（前書き）

投稿するのがだいぶ遅れてしまい、すいませんでした。  
それでは、決戦？をお楽しみください。

感想・アドバイス・評価などをお待ちしております。



## 最終決戦？

カイル・なのは・フェイト・ウラノスの4人は、傀儡兵を魔力弾で撃ち抜いたり、魔力刀で切り裂いたり、時には魔力変換資質を用いて確実に倒していた。

しかし、いくら倒しても次々と傀儡兵は増えていく。

傀儡兵との戦闘を初めて既に数分が経過した。

だいたい傀儡兵を倒した筈だが、一向に減る気配がない。

それどころか、最初よりも数が増えているようにも思えた。

「このままじゃ切りがない！ここは俺が引き受けるから、お前たち3人は艦内に侵入してロストロギアを封印しろ！」

ウラノスが、魔力刀で傀儡兵を切り裂きながら3人に叫ぶ。

「こんなに数が多いんですよ！？ウラノスさん一人じゃっ！」

なのはが、6発の魔力弾で2体の傀儡兵を破壊しながら反論する。

「いいえ。そんなことはありません。彼の戦闘スタイルは1対複数向きなんです。このような時にこそ、ウラノスの戦闘スタイルは活かせます。此処は彼に任せて、私達は先に行きましょう！」

「でもっ！」

カイルの言葉を聞いてなお、なのはは反論する。

ウラノスの強さは、兄の光から聞いているため知っている。

だが、相手の数が多すぎる。

いくら強いと言っても、大群相手に一人で挑むのは無茶ではないかとなのはは思ったのだ。

「今私達のすべき事は、ロストロギアの封印。こんな所で時間を取られる訳にはいかない。それは貴女も解ってるでしょう。」

そんななのはを、フェイトが静かに諭す。

「・・・うん」

フェイトの言葉に渋々納得したのか、小さな声で返事をする。

「今道を開く！そのうちにお前達は侵入してくれ！」

「了解！」「」

3人の合図を受け、ウラノスは目の前に右手を翳す。

すると右手から突風が発生し、傀儡兵を数体破壊した。

「今のうちに早く行け！」

傀儡兵を破壊したとしても、その穴を埋めるかのように他の傀儡兵

に塞がれてしまう。

道が開いている時間は非常に短い。

それを3人は理解していたため、ウラノスが道を作った瞬間に飛び出した。

「フリーズバスター！」

戦艦内部への入口を作るため、カイルは戦艦に自身のデバイスであるケイオスに向け、砲撃を放つ。

着弾した場所から周囲2メートルが徐々に凍結していく。

やがて凍結した部分はガラスを割った時のような高い音を立てながら砕け散り、船内があらわになる。

外から内部を覗いて見ると、何処かの部屋へ続く廊下のような場所だった。

三人は船内に入り、廊下に着地する。

その瞬間、目の前の扉の先に巨大な魔力反応を感じた。

3人は直感でこの魔力反応はロストロギアのものだと確信した。

扉までの距離は約300メートル。

3人はお互いを見て一度頷き、目の前の扉を目指して走る。

明るく廊下を照らす左右の天井に設置されている照明の光を浴びながら、3人は扉の前に到着した。

なのはは威圧感を扉の先から感じていた。

この船内に潜入した瞬間に感じたロストロギアのモノであろう巨大な魔力。

ジュエルシードとは比べ物にならないほど強力だった。

それを感じた時、あまりの魔力量の巨大さに一步下がりそうになった。

だがフェイトやカイルの真剣な表情を、決意に満ちた瞳を見て、心中で自分を叱責してここまで走り抜けた。

扉の前にたつてその先にある魔力反応を感じ、なのはは先程よりも強力な、体を押し潰さんとするほどの威圧感を感じた。

（こんな所で立ち止まってる暇なんてない！早くロストロギアを破壊しないと！）

先程とは桁違いの威圧感に吞まれそうになるが、なんとか抑える。

だがそれも数秒の事だった。

「・・・うあ・・・あああ・・・！」

やがて威圧感に吞まれ、目を見開き頭を抱えて恐怖の声を挙げてし

まう。

その際、レイジングハートを床に落としてしまうがその事に気付ける余裕は今のものにはない。

頭に浮かぶのは、恐怖。

抗う意志すらも塗りつぶしてしまうほどの圧倒的な恐怖でなのは頭は埋め尽くされていた。

(ダメっ！足が震えて、前に進めない！前に進まなくちゃいけないのに！この先に、目的の物があるのにつ！！！)

やがてなのはは膝を折り、床に座りこんでしまう。

(こんなのに・・・勝てるわけないよ！)

扉を挟んだ先に目的のロストログアがあるというのに、その強力すぎる威圧感に、体が、心が耐えられなくなる。

本能が早く此处から逃げろと警告を発している。

なのはは、心中を絶望や恐怖で埋め尽くされているため抵抗できず、本能に従い、右足を一步下げてしまう。

そして、左足も下げるために無意識に左足を上げたその時。

「高町なのは」

左隣に居たフェイトがなのはの名を呼び、なのはと視線を合わせる

ためにしゃがみ、右手をなのはの右肩に置いた。

その声は少し低く、怒気が含まれていた。

「貴女は何のために此処まで来たの？目的のロストロギアを目の前にして、怯えるために来たのなら、今すぐ引き返して。戦意を喪失した魔導師なんて、ただ邪魔なだけ。仲間の足を引っ張るだけなの。もう一度自分が此処に来た意味を、思い出して。」

鋭利な瞳がなのはを見つめる。

なのはは、フェイトの瞳から眼を逸らせなかった。

その瞳に心を射抜かれたかのように、揺らぐ眼でフェイトを見つめていた。

心中で、先程のフェイトの声が反響される。

（私が・・・此処まで来た理由？）

フェイトに問われた内容を心中で問いかけ、自分が此処まで来た理由を考える。

脳裏に浮かぶのは、兄である光が魔導戦に敗れ、大怪我を負った姿。

その姿を目の前にして、なのはは自分の行動を後悔していた。

自分が家に帰る事なくその場に居たなら、違う結果になっていたかもしれないのと。

光が退院するまでの間、悔しさのあまり枕を涙で濡らしていた。

その時に、心中で決意した。

光お兄ちゃんの身が危なくなったら、私が助ける と。

(・・・そうだ)

そこまで脳裏に思い浮かべ、なのはは思い出した。

此処まで来た目的を。

(私は、光お兄ちゃんを助けるために・・・)

「光お兄ちゃんを助ける為に此処まで来たんだ・・・。」

心中で呟いていたのが、言葉となってなのはの口から放たれる。

「こんな所で、呑気に立ち止まっているわけにはいかない。早く、ロストロギアを破壊しなくちゃ！」

その言葉と同時に、なのはの瞳に決意が宿った。

落としてしまったレイジングハートを右手でしっかりと握り、自分を絶望から救ってくれた少女 フェイト へ視線を向ける。

「助けてくれてありがとう、フェイトちゃん」

「・・・別に、御礼を言われるような事じゃない。」

なのははフェイトに笑顔を向け、フェイトは恥ずかしさからか視線を逸して答えた。

そして、二人は同時に立ち上がり、改めて扉を見据える。

今のなのはにはもう、恐怖や絶望もない。

相変わらずもの凄い威圧感を感じるが、今はそれが苦にならない。

揺らぐ事のない瞳でしっかりと前を向いていた。

「準備は、いいですか？」

今まで成り行きを見守っていたカイルが確認とばかりに、フェイトとなのはに問いかける。

「はい！」

二人は強く返事をして自身のデバイスを構える。

「では、開けますよ」

二人の返事にカイルは一度頷き、扉に手を当てて前に押す。

するとゆっくりと扉は開いていき、やがて全開になった。

扉の先には数十メートルのロストロギアへと続く道と、封印対象であるロストロギア。

その大きさは、ジュエルシードの約3倍。



しかもロストロギアの外側には紺色の半透明なドーム状の結界のようなものが展開されていた。

「……あれが、結界を展開しているロストロギア」

「……」

「……ロストロギアを破壊するにはまずあの結界のようなものを突破しないといけないようです。時間がありません。早急に結界を突破し、ロストロギアを封印しましょう。」

「はい！」

カイルが結界の突破及びロストロギアの封印を促す。

それに対しなのは返事をし、フェイトは頷く。

そして、3人が部屋へと足を踏み入れた瞬間！

緋色の魔方陣が部屋一面に展開され、そこから傀儡兵が出現した。

その数20。

それぞれが剣を、砲身をなのは達の目的を阻止せんと構える。

対するなのは達も自分達の目的を果たすため、自身のデバイスを構える。

3人は同時に傀儡兵へと駆け出した。

フィレスとクラウドスは空中を駆けながら幾度も衝突していた。

その衝突という動作自体は戦闘当初と変わらないが、衝突の威力・速度が桁違いだった。

衝突する度に大気が震え、大地が砕け、陥没していく。

速度もまた当初よりも速く、眼で追うのが難しくなっている。

やがて二人は地上に鏝迫り合いのような状態で姿を現した。

「はああああつ!！」

「うおおおおおつ!！」

衝突している証である金属音を響かせながらなんとか押し込もうと二人は気合いの声と共にさらにさらに力を込める。

その力はそれぞれの魔力光の暴風となり、正面だけでなく周囲にもその影響を与えていた。

二人が衝突している場所はもちろん、周囲の大地までもが陥没し、砕けていく。

それだけで収まらず、砕けた大地の破片が空中へ吸い寄せられながら消滅していた。

当然、二人が居る場所も只では済まない。

陥没していた状態がさらに悪化し、崩壊していく。

崩壊する直前に二人はその事に気づき、飛行魔法で空に上がり、無事な場所に着地した。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「ふっ・・・ふっ・・・ふっ・・・」

二人とも肩で息をしていた。

二人とも本気で戦っており、フィレスの場合はクラウドと対等に戦うために身体強化魔法で腕力などの力を底上げしていた。

息切れするのも当然だ。

二人は呼吸を整え、再び構える。

その時、ルシファリウスに変化が起きた。

魔力刀に罫が入ったのだ。

クラウドはそれを見て口を耳の当たりまで曲げ、笑う。

「くくっ。魔力刀と実際の刀では性質が違う。その状態では砕けるのも時間の問題。我の、勝ちだ。」

「確かに、魔力刀と実際の刀は性質が違う。使用されている材料が違うしな。もうこの魔力刀は、使い物にならないだろう。」

フィレスは静かに言う。

そのフィレスの言葉を裏付けるかのように魔力刀はガラスが割れるような音を響かせ、四散した。

「だが、魔力刀に罅が入ったからと言え、それであんたの勝ちにはならない。魔力刀は魔力によって創られたものだ。魔力さえあれば創り出せる。」

そしてフィレスは笑みを浮かべながらルシファリウスに魔力を送り、新たな魔力刀を展開する。

先程折れたものよりも、高強度かつ高純度な魔力刀を。

それに対してクラウドは、まるでその作業が無駄であるとも言つように嘲笑する。

「どうやら理解できていないようだな。お主の言うとおり、魔力刀は魔力さえあれば創り出せる。しかしそんなものは実際の刀を前にしている現状では、無駄なんだよ。魔力刀を折る事くらい容易くできるのだからな。」

「無駄かどうかなんて、やってみないと分らないだろう。」

笑みを浮かべてフィレスは言い、腰を低くして構える。

「では、試してみるといい。」

「言われなくとも！」

若干呆れの声を含ませながら、クラウドも構える。

その場を静寂が包み込む。

やがて緩やかな風が二人の髪を撫ぜる。

その風が収まった瞬間に二人は同時に姿を掻き消し、数瞬後には先程と同じように金属音を響かせながら衝突した。

数回衝突した後、フィレスが上空に右手でルシファリウスを振り上げた状態で現れた。

数瞬後クラウドも刀を下段に構え、現れる。

「はあっ！」

気合いと共にフィレスは魔力刀を振り下ろし、クラウドは無言で刀を振り上げた。

魔力刀と刀は衝突し、火花を散らす。

そんな中クラウドは笑みを浮かべる。

「先程と何も変化していないじゃないか。やはり無駄だったようだな。」

「まだまだあ！」

フィレスはクラウドの言葉を跳ね除け、強化魔法でさらに腕力を上昇させる。

その際右腕がミシミシと嫌な音を響かせ、まるで雷に打たれたかのような激痛がフィレスを襲う。

「ぐううっ!!」

フィレスはその痛みを奥歯を噛み締め、耐える。

このままでは右腕が潰れるのは時間の問題だろう。

必要以上の身体強化は、体に大きな負担を掛ける。

強化の度合いによっては、耐えられず骨折などの大怪我を招く場合があるのだ。

しかし、フィレスにとってそんな事はどうでもよかった。

フィレスにとって優先すべきは目の前の敵を倒す事なのだから。

立ち塞がる敵を倒すためなら、どんな痛みでも受けてやる!

敵を倒すためならば、自分がどうなるかと構わない。

フィレスはそう考えていた。

激痛に耐えながら、それでも自分に向けて攻撃を放とうとしているフィレスの様子を、クラウドは驚愕の表情で見っていた。

痛みに歯を噛み締めて耐えるフィレスの瞳に、並々ならぬ決意を感じたからだ。

(何故だ・・・?)

「何故そこまでして、自分の体を傷付けてまで戦う!? 一体何がそこまでお前を動かしているというんだ!」

心中で呟くはずだった疑問は、心の叫びとなってクラウドの口から出た。

悲鳴を挙げても不思議はないほどの痛みがフィレスの体を駆け巡っているのだ。

しかしその痛みにフィレスは耐え、さらに自分に攻撃しようとしている。

クラウドは、フィレスなぜそこまでして戦うのか理解できなかった。

「何故そこまでして戦うか、だって? 成し遂げたい目標があるからだ。それを邪魔する奴は、俺が必ずこの手で倒す。これは俺なりの覚悟の証なんだよ。」

肩で息をしながら、一言一言に力を入れてクラウドに言った。

自分の思いを、決意を伝えるために。

(その歳で、そこまでの覚悟を決めているとは・・・。)

クラウドスはフィレスの瞳を観察し、フィレスの覚悟の大きさを知った。

他者を守るために自分の全てを捨てる覚悟を、感じた。

大きな覚悟を持つ者の強さを、今までもクラウドスは体験した事がある。

今回のようなヴァリアブルデバイス所有者との戦いで。

その全てが、成人した大人との戦闘だった。

その戦いの中でも、フィレスと同じような瞳を持った人間は何度倒れようとも、諦めることなく挑んできた。

本来ならば大人が持つような覚悟を9歳という、普通ならば親に甘え、友達と楽しく過ごしているであろう時期の、フィレスが持っていた。

その事にクラウドスは驚愕した。

フィレスは突然力を抜き、鏝迫り合いの状態を自ら解き、クラウドスと距離を取る。

「……これで最後だ。この一撃で、決める。」

「っ！」

フィレスは、次の一撃で決着を着けるつもりだ。



(とはいえ、こちらにも負けは許されない)

クラウドもまた負けられない理由がある。

自身の力の全てを刀に注ぎ、刀を下段に構える。

骨が軋むほど腕力を強化した一撃を防げるとは思えなかったのだ。

「はあああつ！」

「おおおおつ！」

互いに最後の力を振り絞り、全てをぶつけた。

押し押し返されを何度か繰り返し、やがてクラウドの刀に罅が入る。

その罅はすこしずつ広がり、やがてパキンと音を立て、折れた。

それだけでは終わらず、フィレスの魔力刀はクラウドの腹へ吸い込まれるかのように向かっていく。

驚愕で瞳を見開きながら、クラウドはその様子を眺めていた。

(我の、負けか)

クラウドは、自分の刀が折られた時点で自らの負けを心中で認めた。

不思議と悔しさなどはなく、ありのままの結果を受け入れる事ができた。

次の瞬間、クラウドはフィレスの魔力刀に腹を切り裂かれ、地上に落下した。

イリスとリュウガは空中で闘っていた。

イリスが撃つ魔力弾をリュウガが魔力刀切り裂き、さらにイリスへと肉薄し切り掛る。

それに対してイリスはリュウガの攻撃を障壁で防ぐ。

「強度は中々のものだが、俺の攻撃を防ぐにはまだ強度不足だ！」

笑みを浮かべながらリュウガは言いさらに腕に力を込め、強引に押し切る。

その結果、イリスの障壁に罅が入った。

「くっ！」

イリスは苦々しい表情で軽く呻き声を上げてしまう。

障壁を展開させるための術式構成の時間が短かったせい、この障壁は予想していた強度を下回っていた。

一度罅が入ってしまった障壁を修復する事はできない。

障壁が破壊されるのも時間の問題だった。

この状況を打破する方法を思案した次の瞬間、ガラスが割れるような音を立てながら障壁が四散し、イリスは地上へ衝突してしまう。

衝突した場所から白煙が上がり、イリスの姿を覆い隠す。

それでも構わずに、リュウガは白煙が立ち込める地上にデバイスを向ける。

「これでもくらいな！」

その言葉と同時に現れたのは魔力弾。

その数、35。

それらを、未だ白煙が上がる大地へと放つ。

轟音を響かせながら次々と着弾していく。

35発全て着弾したのを確認した後、リュウガはデバイスを頭上に構え魔力収縮させる。

「これで終わりだ！」

これを最後の攻撃と考え、本気の砲撃を放つ。

放たれた極太の砲撃は着弾とともに轟音を響かせながら白煙を上げる範囲を拡大させた。

その様子を、リュウガは肩で息をしながら眺め、勝利を確信してい

た。

30発以上の魔力弾に続き、手加減なしの本気の砲撃。

あの砲撃はSランク以上のものだ。

喰らえばただでは済まないだろう。

その事に驚きながらも、紅い光の正体を見抜き何も考えずとも体は既に次の行動を開始していた。

そう思い笑みを浮かべた瞬間、白煙の彼方から紅い光が見えた。

回避という行動を。

その直後にリュウガへと向かう砲撃。

しかし砲撃が発射される前に回避行動を取っていたリュウガに当たるがずもなく、砲撃はリュウガの真横の空間を裂き、空の彼方へと消えた。

その砲撃の行方を見届けた後で、リュウガは先程まで白煙が上がっていた地上に視線を戻す。

先程まで拳がっていた白縁は砲撃によって吹き飛ばされ、その先にリュウガを驚愕させる光景が広がっていた。

イリスが無傷で佇んでいるのだ。

先程も述べたとおり、リュウガは手加減などせず、全力を叩き込ん

だ。

それなのに、イリスにダメージを受けた形跡はない。

この結果を見て驚かない人間などいないだろう。

リュウガの驚愕も至極当然だった。

「もう、終わりですか？」

「っ!？」

イリスが笑みを浮かべるのを、リュウガはその眼で確かに見た。

その瞬間、言葉で言い表す事のできない寒気を感じ、動く事ができなかった。

「では次は、こちらから行かせてもらいます。貴方にヴァリアブルデバイス故に成せる業を、見せてあげましょう。行きますよプリューナク！」

『OK!』

イリスはプリューナクを頭上へ掲げる。

そして目を閉じ、心を落ち着かせ、集中力を高める。

詠唱に入る為に。

「集わせるは世界を見渡す巨大な2つの眼。まなこ魔導師の生命である魔

力よ……。」

大規模な魔法を発動させる際には、深い集中力と緻密な魔力制御が必要になる。

少しでも集中力を欠けば、膨大な魔力は行き場を無くし魔力爆発を起こす危険性がある。

当然のように欠点もある。

詠唱時には大規模な魔方陣構築と緻密な魔力制御に徹しなければならなかったため、全くの無防備になってしまうのだ。

今攻撃すれば、確実に命中するであろう。

それはリュウガも考えていた。

攻撃するには今がチャンス。

だがしかし。

（何故、何故体動かない！？）

リュウガの体が動く事はなかった。

攻撃するには今が最大の好機。

それを理解し攻撃しようと頭で考えてはいるものの、実行に移せず  
にいた。

まるでバインドで拘束されたかのように、指一本動かす事ができないのだ。

このままではイリスが構築している魔法が完成してしまう。

なんとかして阻止しなければ。

そう思いはしても実行できない現状にリュウガは絶望した。

今リュウガにできる事は、イリスの魔法を受ける事のみ。

いくら考えてもリュウガにはそれしか思い浮かばなかった。

(・・・もしかしたら、これは今までの自分の行いに対する罰なのかもしれないな)

自分は今まで上層部からの命令とはいえ、罪のない人に刃を向け強制的に捕縛し、何十人という人々の人生を狂わせてきた。

それは決して許される事ではなく、またどんな事をしてでも償えるものでもない。

これはもしかしたらそんな自分に神が与えた罰なのかもしれない。

『頼む！た・助けてくれ！俺には妻と子供が・・・俺の帰りを待ってる大切な家族がいるんだ！お、お願いだ！家に・・・帰らせてくれ！』

大切な人のために己の全てを掛けて戦い敗れ、助けてくれと懇願した人間を。

『くそ・・・ちくしょう！俺にはあいつを守るための力はおるか、自分の身を守る力すらないのか！くっそー！！』

自分の力に限界を感じ、崩れ落ちる人間を。

本人の意志に関係なく強制的に裏の世界に引き入れてきた。

守りたい人が・・・守りたい世界があつたはずなのに。

俺と出会い、戦ってしまったが故に願いを砕かれ望みもしない事を強制的にやらされている。

そんな状況を作り出したのは自分自身だ。

たくさんの人を不幸にさせた自分が何時までも生きていけるとは思えない。

いつかきつと俺に罰が下る時が来る。

その時まで、俺がたくさんの人を不幸にさせてしまったという事実を背負って生きようと考えていた。

おそらく今が罰を受ける時なのだろう。

イリスが構築している魔法で死ななかつたとしても、高町光の捕縛・連行という任務を成功させる事ができなかった責任を負わされて、上層部に殺される。

任務を成功させた者、つまり勝者には最高の栄光を。



任務を成功させる事ができなかった者、つまり弱者には死を。

それが、裏の世界の暗黙のルールだ。

どちらにしろリュウガを待っているのは死。

抵抗の意志を見せた程度でどうにかなるような事ではない。

そう思うと、抵抗する意志は自然と消えていた。

これが神が自分に与えた罰だというのなら喜んで受けよう。

心中で覚悟を決め、リュウガは唯一動かす事ができる顔を上げ、上空を見る。

するとそこには、イリスが構築している魔方陣が展開されていた。

巨大な二つの魔方陣。

その一つ一つに膨大な魔力が収縮されていくのが視界と魔力反応の両方で確認できた。

それはまさしく世界を見渡す紅い巨大な眼のようにリュウガは感じた。

そして次に、魔法を構築しているイリスへ視線を向ける。

マスターである高町光を傷付け、絶望させた俺に怒り全力で戦った。

その結果、今俺に止めを射そうとしている。

本当、お前は凄いよ。

完全に実力は俺上だった。

今更謝つても遅いけど、それでも言わせてくれ。

「・・・すまなかった。」

リュウガの声がイリスに届いたとは思えない。

しかしそれでも、リュウガはその言葉を口にした。

リュウガが謝罪の言葉を口にした瞬間、イリスが構築していた魔法は完成した。

上空に展開された二つの魔力収束魔方陣とイリスのはるか前方に展開された魔方陣。

その3つの魔方陣は魔力で創られた道のようなもので繋がっていた。

二発の収束砲を道標となる魔方陣へと発射し、着弾点となる地上に展開された魔方陣で二発の収束砲を合体させて1発の収束砲として敵に放つ。

それが、イリスが用意していた魔法だ。

3つの魔方陣が魔力の道で繋がれている様から、その業はこのように名付けられていた。

”トライアングルブレイカー”と。

「魔力の奔流に吞まれなさい！トライアングルブレイカー！！！」

イリスは、マスターである高町光が味わったであろう痛み・絶望の程を思い、マスターの心を汚れさせたリュウガに対して怒りを抱いた。

この一撃にイリスはその怒りの全てを込めて発射。

2つの魔方陣から発射された2発の収束砲はイリスの前方に展開されている魔方陣へと向い、着弾。

同時に着弾点にて展開されている魔方陣が起動し、2発の収束砲が1発となってリュウガへ放たれる。

リュウガは、迫りくる超巨大な収束砲を眺めながら、笑みを浮かべていた。

その眼は表情同様、安堵の意志を示していた。

次の瞬間、その表情はイリスが放った特大な収束砲に飲まれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6615i/>

---

魔法少女リリカルなのはFIRSTSTORY

2011年10月5日22時32分発行